千葉市猪鼻城跡・皿池東遺跡

— 平成13年度調査 —

２００３

千　葉　市　教　育　委　員　会
財団法人　千葉市教育振興財団

猪鼻城跡

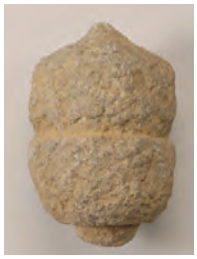
猪鼻城跡航空写真　南東から　1996年12月撮影　○が調査地点

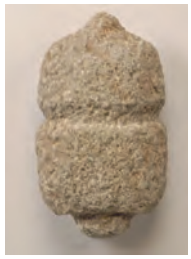
1号堀状遺構　西から

2

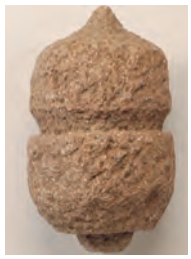
1

5


4


6

3


7

8

9

10

11

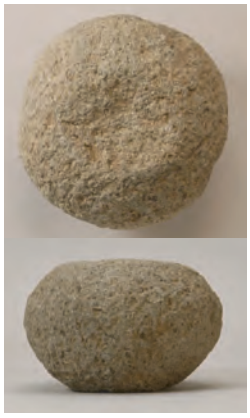
12

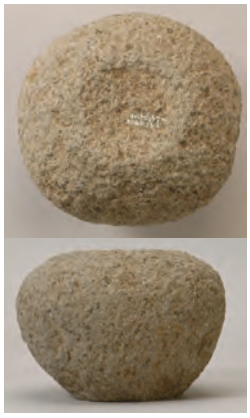
13

14

15

16


17


18

19

出土遺物　石塔類①

猪鼻城跡

出土遺物　石塔類②・陶磁器・土器他

33

34

35

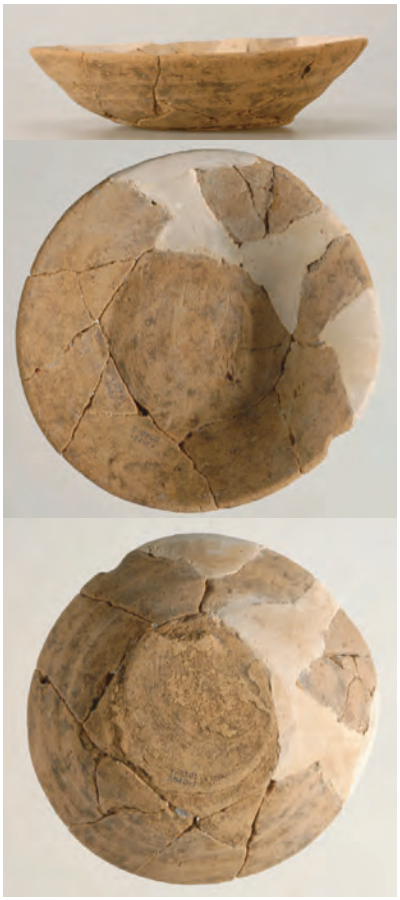
36

38

39

出土遺物　カワラケ①

猪鼻城跡



40

41

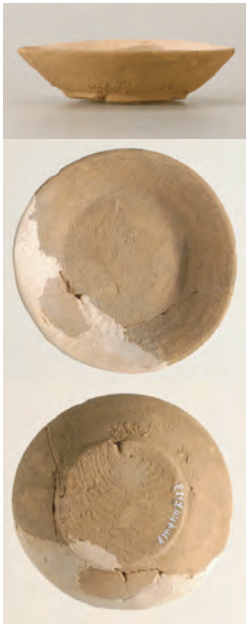
44

46

45

37

42



43

※番号は第16図～18図・20図と対応

出土遺物　カワラケ②

褐釉四耳壺（3号蔵骨器）

底部

※蔵骨器群とその関連遺物は全て
千葉市立郷土博物館蔵

土塁中出土蔵骨器①（付編(2)参照）

1 号蔵骨器：古瀬戸四耳壺

2 号蔵骨器：常滑壺

土塁中出土蔵骨器②

1 号蔵骨器蓋

3 号蔵骨器蓋

2 号蔵骨器蓋

常滑甕

蔵骨器関連遺物

蔵骨器群出土直後の状況（昭和48年（1973）11月）

例　　言

1．本書は千葉市中央区亥鼻３丁目203他に所在する猪鼻城跡と，若葉区中田町1,205-16他に所在する皿池東遺跡の発掘調査報告書である。

2．猪鼻城跡の発掘調査（平成13年度分）は，仮称亥鼻３丁目公園整備事業に伴うもの，皿池東遺跡の調査は，仮称若葉区球技場整備事業に伴うもので，財団法人千葉市文化財調査協会が千葉市より委託を受けて実施した。なお，文化財調査協会は平成14年３月31日をもって解散し，財団法人千葉市教育振興財団に業務が統合された。

3．発掘調査の期間・面積・担当者は次の通りである。

猪鼻城跡

確認調査　平成11年10月１日～10月14日　263㎡／2,634.97㎡　担当者　塚原勇人

本 調 査　平成13年９月３日～11月15日　2,196.32㎡　担当者　長原亘

皿池東遺跡

調査期間　平成13年９月17日～平成14年１月30日　担当者　古谷渉

確認調査　900㎡／6,200㎡

本 調 査　上層405㎡・下層165㎡

4．整理作業及び本書の作成は，平成14年４月１日～平成14年７月31日に行い，簗瀬裕一が担当した。

5．遺構の写真は発掘調査担当者が撮影した。遺物は簗瀬が撮影した。

6．近世瀬戸製品の一部と中世瀬戸窯製品の分類については，財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏にご教示いただいた。常滑窯製品の分類については常滑市民俗資料館中野晴久氏にご教示いただいた。主郭土塁中出土の中国製の褐釉四耳壺については，山本考古学研究所山本信夫氏にご教示いただいたものである。

7．猪鼻城跡の墓壙から検出された炭化材については，株式会社パレオ・ラボに分析を委託し，分析結果は付編に掲載した。

8．猪鼻城跡の墓壙から検出された人骨および猪鼻城跡主郭土塁中から検出された蔵骨器中の火葬骨については，札幌医科大学の松村博文氏と山上実紀氏に鑑定を依頼し，鑑定結果は付編に掲載した。

9．昭和48年（1973）に，猪鼻城跡主郭土塁中から出土した蔵骨器群については，今回報告する墓壙群との関連も想定できるため，付編に概要を掲載することとした。

10．出土遺物及び調査記録は，すべて千葉市埋蔵文化財調査センターに収蔵保管しているが，猪鼻城跡土塁中から発見された蔵骨器等は，千葉市立郷土博物館が収蔵している。

発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで，下記の諸機関・諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。（順不同・敬称略）

千葉県教育庁文化財課，千葉市教育委員会生涯学習部文化課，千葉市立郷土博物館，千葉大学文学部考古学研究室，小野正敏，柴田龍司，外山信司，麻生秀仁，丸井敬司，小高春雄，松本勝，山本勇，和田憲治郎，千葉城郭研究会，房総中近世考古学研究会

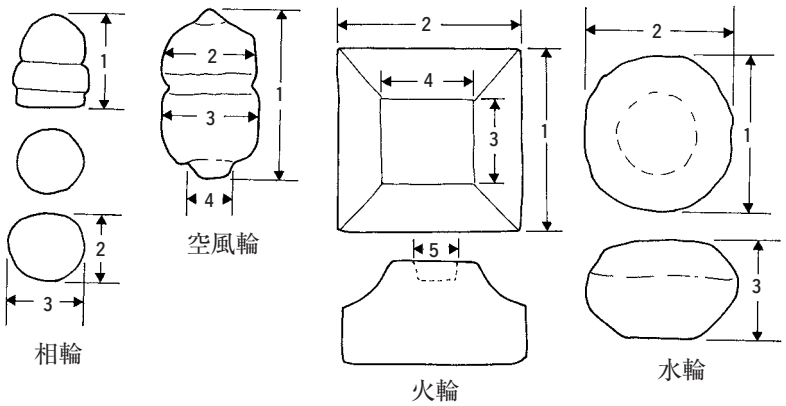
凡　　例

1．本書に掲載した遺構図等の方位は，座標北である。

2．土層の色を記号で示してある場合は，農林水産省監修「新版　標準土色帳」による。

3．遺構・遺物実測図の縮尺は，図中にスケールを表示している。

図版中記号類凡例



石塔類計測部位

目　　次

第Ⅰ章　猪鼻城跡
1．猪鼻城跡の位置と周辺の遺跡 …… 1
2．過去の調査について …… 1
3．猪鼻城跡の概要 …… 2
4．調査成果 …… 10
5．付編(1) 猪鼻城跡中世墓壙の炭化材樹種同定　植田弥生（パレオ・ラボ） …… 32
6．付編(2) 猪鼻城跡土塁中出土の蔵骨器群について …… 36
7．付編(3) 猪鼻城跡出土の人骨について　松村博文・山上実紀（札幌医科大学） …… 40
8．考察　－猪鼻城跡の調査成果について－ …… 50
第Ⅱ章　皿池東遺跡
1．遺跡の概要 …… 60
2．調査成果 …… 60

抄録 …… 巻末

図　版　目　次

－猪鼻城跡－
第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 3
第２図　猪鼻城跡地形図（1/2,500） …… 5
第３図　猪鼻城跡土地利用図（1/2,500） …… 7
第４図　猪鼻城跡中心部遺構配置図 …… 9
第５図　猪鼻城跡調査区全体図 …… 11
第６図　猪鼻城跡遺構配置図 …… 13
第７図　検出遺構　墓壙(1) …… 16
第８図　検出遺構　墓壙(2) …… 17
第９図　検出遺構　墓壙(3) …… 18
第10図　検出遺構　墓壙(4) …… 19
第11図　検出遺構　墓壙(5) …… 20
第12図　検出遺構　墓壙(6) …… 21
第13図　検出遺構　墓壙(7)・土壙(1) …… 22
第14図　検出遺構　土壙(2) …… 23
第15図　検出遺構　溝 …… 24
第16図　出土遺物　石塔類(1) …… 26
第17図　出土遺物　石塔類(2) …… 27
第18図　出土遺物　中世陶磁器・カワラケ他 …… 28
第19図　出土遺物　銅銭 …… 29
第20図　出土遺物　近世陶磁器他 …… 30
－付編２－
第21図　猪鼻城跡土塁中出土蔵骨器他 …… 38
第22図　貿易陶磁・貯蔵具編年図 …… 39
－考　　察－
第23図　１号・２号堀状遺構 …… 50
第24図　墓壙群の分布と出土遺物 …… 52
第25図　火葬土壙分類図 …… 54
第26図　猪鼻城跡中心地区瀬戸・常滑製品時期別点数 …… 56
第27図　猪鼻城跡３丁目公園地点カワラケ分類図 …… 57
－皿池東遺跡－
第28図　皿池東遺跡位置図・地形図 …… 61
第29図　遺構配置図（1/600） …… 62
第30図　検出遺構　１号溝・３号溝 …… 63
第31図　検出遺構　２号溝 …… 64
第32図　旧石器第１・第２ブロック遺物分布図 …… 65
第33図　検出遺構（土壙）・出土遺物 …… 66

表　目　次

―猪鼻城跡―

第１表　猪鼻城跡調査歴 …… 2
第２表　墓壙一覧表 …… 25
第３表　土壙一覧表 …… 25
第４表　出土銭一覧表 …… 30
第５表　出土銭集計表 …… 30
第６表　石塔類一覧表 …… 31
第７表　カワラケ計測表 …… 31

―付編１―

表１　猪鼻城跡の墓壙出土炭化材樹種同定結果 …… 33

―付編２―

表１　土塁中出土蔵骨器関連遺物観察表 …… 38

―付編３―

表１　墓壙出土人骨の歯冠計測値 …… 45

―考　察―

第８表　猪鼻城跡亥鼻３丁目公園地点中世出土遺物一覧 …… 56
第９表　猪鼻城跡中心地区渥美・常滑・貿易陶磁集計表 …… 56
第10表　猪鼻城跡中心地区瀬戸製品時期別集計表 …… 56

―皿池東遺跡―

第11表　石器計測表 …… 60

巻頭図版目次

巻頭図版１　猪鼻城跡航空写真・１号堀状遺構
巻頭図版２　出土遺物　石塔類①
巻頭図版３　出土遺物　石塔類②・陶磁器・土器他
巻頭図版４　出土遺物　カワラケ①
巻頭図版５　出土遺物　カワラケ②
巻頭図版６　土塁中出土蔵骨器①　褐釉四耳壺
巻頭図版７　土塁中出土蔵骨器②　古瀬戸四耳壺・常滑壺
巻頭図版８　土塁中出土蔵骨器関連遺物　蓋・常滑甕，出土直後の状況

写真図版目次

―付編１―

図版１　猪鼻城跡の墓壙炭化材樹種① …… 34
図版２　猪鼻城跡の墓壙炭化材樹種② …… 35

―付編２―

図版１　猪鼻城跡出土人骨 …… 46
図版２　猪鼻城跡出土人骨（歯１） …… 47
図版３　猪鼻城跡出土人骨（歯２） …… 48
図版４　猪鼻城跡出土人骨（歯３） …… 49

―猪鼻城跡―

写真図版１　検出遺構　堀状遺構他①
写真図版２　検出遺構　堀状遺構他②
写真図版３　検出遺構　土壙他
写真図版４　検出遺構　墓壙①
写真図版５　検出遺構　墓壙②
写真図版６　検出遺構　墓壙③
写真図版７　検出遺構　墓壙④
写真図版８　検出遺構　墓壙⑤

―皿池東遺跡―

写真図版９　検出遺構他
写真図版10　出土遺物

第Ⅰ章　猪鼻城跡

１．猪鼻城跡の位置と周辺の遺跡（第１図）

猪鼻城跡は，千葉市の市街を北に臨む，標高20mほどの下総台地上に位置している。西は東京湾岸低地に面し，北側には台地下を都川が流れており，北西方向に突き出す台地の先端部を城郭としている。現在，城跡は，亥鼻公園・千葉市立郷土博物館・千葉県立文化会館・千葉大学医学部などの公共施設によって大部分の空間が占められている。郷土博物館や文化会館付近は，猪鼻城跡として一括して扱われることが多いが，遺跡地図では，③亥鼻遺跡（貝塚：縄文後期・弥生後期），④市場第１遺跡・②市場第２遺跡（包蔵地：弥生後期）の登録があり，城跡とは別の遺跡の扱いになっているが，ここではこれらも猪鼻城跡の一部として一括して扱うことにしたい。

縄文時代の大規模な貝塚である⑯矢作貝塚が形成されていたように，この付近では既に縄文時代から集落の形成は確認できるが，亥鼻周辺の台地上に広く集落が展開するようになるのは，弥生時代後期からとみられる。郷土博物館周辺では，弥生時代後期から集落が確認でき，千葉大学医学部内の調査でも同じ時期の住居跡が検出されている。その後，古墳時代の遺跡として，⑤天神台遺跡・⑥葛城弁天台遺跡ではかつて円墳が確認されており，⑦新田遺跡では古墳時代の住居跡も調査されている。この付近の現存する古墳としては，㉑荒久古墳のみであるが，2002年の千葉大学医学部構内の調査では前方後円墳が検出され，注目を集めた。この調査により，七天王塚の一部も古墳である可能性が高くなり，七天王塚を城郭の土塁の残存とする見方も再検討する必要が生じている。こうした前方後円墳の検出は，古代寺院千葉寺の成立や千葉郡衙の所在地に関する議論にも大きな影響を与えるものである。

近くにある中世の遺跡としては，⑯矢作砦跡が知られている。しかし，同じ場所にある矢作貝塚が調査されているものの，中世の遺構・遺物の検出はなく，詳細は明らかではない。南方の⑦新田遺跡では，発掘調査が行われ，この付近では数が少ない中世初期の遺物を含む溝や墓壙が検出されている。⑪千葉寺も中世の遺跡として忘れてはならない重要なもので，経塚からは白磁の合子や銅製の経筒などが出土しており，また，近年境内では火葬骨を納めた常滑の蔵骨器が採集されている。こうした考古学的成果は，千葉寺が古代末～中世初期に有力者と係わりを持っていた徴証であり，それが千葉寺を再興したと縁起に伝える千葉氏であった可能性も十分にありえる。この他，やや距離は離れるが，千葉市街地の北側にある㊱高品城跡は，千葉氏の家臣安藤氏の城と考えられているものである（外山1996，簗瀬・外山1997）。この高品城跡は，猪鼻城跡と千葉を挟んで南北に位置しており，両城は対になり，千葉を守るためにおかれた城郭とも考えられる。そして，千葉市の南には戦国期に下総の実質的支配者となった原氏の居城生実城跡（㊲）がある。

２．過去の調査について

猪鼻城跡の過去の調査歴は第１表の通りである。ここに示したのは，千葉市による調査で，備考に文化課とある以外は，（財）千葉市文化財調査協会による調査である。No.７とNo.９の本書に報告する

以外の調査は，いずれも猪鼻城跡中心地区の調査である。このうち平成８年度調査分については，すでに報告済みである（倉田1999）。初めて主郭内に本格的にトレンチを入れた平成13年度の確認調査によれば，主郭（Ⅰ郭）内部には中世の明確な遺構は確認されておらず，後世に削平された可能性が高い。Ⅰ郭東側からは空堀が検出されており，底から五輪塔が検出されている。これ以外に，平成14年度に千葉大学医学薬学総合研究棟建設事業に伴い千葉大学亥鼻地区埋蔵文化財調査委員会による調査が実施されて，弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡６軒や前方後円墳（推定全長28m）などが検出されている。また，正式な発掘調査ではないが，昭和48年に主郭土塁中から蔵骨器群が出土しており，これが猪鼻城跡の最初の考古学的成果といえるものである（付編(2)参照）。

第１表　猪鼻城跡調査歴

	調　査　年　次	調　査　原　因	調査区分	備　　考
1	昭和55年度（1980）	公園整備	確認調査	80㎡　文化課
2	昭和55年度（1980）	収蔵庫建設	確認調査	300㎡　文化課
3	昭和57年度（1982）	収蔵庫建設	本調査	800㎡　文化課
4	昭和58年度（1983）	公園整備	本調査	12㎡　（便所設置）文化課
5	平成元年度（1988）	博物館別館建設	確認調査	210㎡／2,100㎡
6	平成８年度（1996）	博物館別館建設	本調査	4,412㎡うち配管工事314㎡，新館工事4,098㎡
7	平成11年度（1999）	公園建設	確認調査	263㎡／2,634.87㎡　（本報告の確認調査）
8	平成12年度（2000）	博物館改修	本調査	140㎡　文化課
9	平成13年度（2001）	公園建設	本調査	2,196.32㎡　（亥鼻３丁目・今回の報告対象）
10	平成13年度（2001）	公園整備	確認調査	260㎡／10,293㎡　（亥鼻公園）

３．猪鼻城跡の概要

この城の名前の由来は，その形が猪の鼻に似ているためとも，亥の方角（北北西）に城の台地が突き出しているためともされるが，これはその中心部付近の地形に対応しているものである。猪鼻城跡は，千葉氏の館の所在地つまり千葉城跡とされることも多いが，延宝２年（1674）の水戸光圀の『甲寅紀行』には，猪鼻城跡について「千葉の町を出づる所の左の方に，古城あり。伊野花と云ふ」とあり，別に「妙見寺の東に千葉屋敷あり」ともあるから，17世紀後半には「古城」となっていた「伊野花」城跡は，この段階では千葉城跡と考えられてはいなかったのである。したがって，猪鼻城跡が千葉城跡とされるようになったのはこれよりも後のことということになる。ただし，猪鼻城跡が千葉氏と無関係ということではなく，調査によって得られている遺物に，15世紀半ば以前のものが多く，また，千葉氏のものとも考えられる蔵骨器も出土しているように，15世紀半ばに滅ぶまで千葉氏も猪鼻の地を利用していたことは確かである。千葉氏の館の所在地としては，「御殿跡」の地名がある千葉地方裁判所の敷地が現時点では最有力である（簗瀬2000）。この御殿跡は徳川家康が東金に鷹狩りに来たときに止宿した場所ともされる（『甲寅紀行』）。ただし，千葉氏の館がここ一カ所だけであったとは考えにくく，時期によって移動していることも十分予想され，おそらく千葉の市街地の下には複数の千葉氏の館跡が残っているであろう。

１）猪鼻城跡の範囲

地形的に郷土博物館～文化会館地区と千葉大医学部地区に分かれるが，前者が城の中心部分で，後者の部分は，医学部建設による地形の改変とその南側の宅地化により，曲輪の配置などははっきりしない。現状で城郭の遺構が確認できるのは，亥鼻公園付近に限られるが，城の範囲はかなり広くとらえられており，七天王塚のあるあたりが大手とされる（山本1980）。神明社のある先端部分から大手

1．猪鼻城跡
2．市場第２遺跡
3．亥鼻遺跡
4．市場第１遺跡
5．天神台遺跡
6．葛城弁天台遺跡
7．新田遺跡
8．原台遺跡
9．八縄遺跡
10．弁財天遺跡
11．千葉寺
12．千葉寺遺跡
13．門前遺跡
14．道修路遺跡
15．桜屋敷遺跡
16．矢作貝塚
17．井合遺跡
18．矢作三山塚遺跡
19．和唐地遺跡
20．琵琶首台遺跡
21．荒久遺跡（荒久古墳）
22．稲荷山遺跡
23．地蔵山遺跡
24．鷲谷津遺跡
25．観音塚遺跡
26．熊ノ台西遺跡
27．熊ノ台遺跡
28．山ノ神遺跡
29．宮崎台１遺跡
30．大北遺跡
31．大宮作遺跡
32．オクマンノ貝塚
33．染谷津遺跡
34．大森台１遺跡
35．都町・山王遺跡
36．高品城跡
37．生実城跡
38．柏崎砦跡

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25,000）

まで，直線距離でおおよそ850mになる。このような猪鼻城跡の広がりの認識は近世以来のもので，元禄２年（1689）の『涌谷伊達氏文書』（丸井1995）には，「千葉之城跡　高サ廿間程　長サ拾丁程　本丸二ノ丸跡アリ　西ノ端ニ伊勢ノ宮アリ」とみえ，「拾丁」という距離は，先の猪鼻山の先端部から大手の間の実際の距離より少し長いが，ほぼ同じ範囲を示しているといえよう。千葉大学医学部の敷地内には，かつて堀があったともされ，七天王塚は土塁の残存である可能性もある。したがって，猪鼻城跡は複数の曲輪によって構成された大規模な城であった可能性があるが，戦国期城郭としての猪鼻城跡の実態はよくわかっていない。もし，猪鼻城跡が七天王塚付近までをも含む城郭であったとするとかなり大きな城郭になり，規模的には生実城跡や土気城跡・本佐倉城跡などに匹敵する戦国盛期の領主層の本拠となった大規模城郭の部類に入る。しかしながら，主郭を囲む堀は幅４～５ｍ程であり，大規模城郭に伴うものとは考えにくい。さらに，中心地区（Ⅰ・Ⅱ郭）の調査では，戦国期の遺物がわずかしか検出されておらず，そこに生活の痕跡をほとんど見いだすことができない。ただし，出土遺物が少ないからといって16世紀代に使われていないとはいえず，このように城郭内で検出遺物が少ないのは，高品城跡などでも確認されていることであり，大規模城郭以外では，戦国期の遺物はあまり多く得られない傾向がある。したがって，こうした出土遺物の傾向からも，この城は戦国期の拠点的な大規模城郭とはいえないと考えられる。これまでのところ，本書において報告する亥鼻３丁目地点を含めて，中心地区以外では戦国期の城郭遺構は確認されていないので，大手と呼ばれる地点まで城郭に含めることについては，その判断を留保しておきたい。

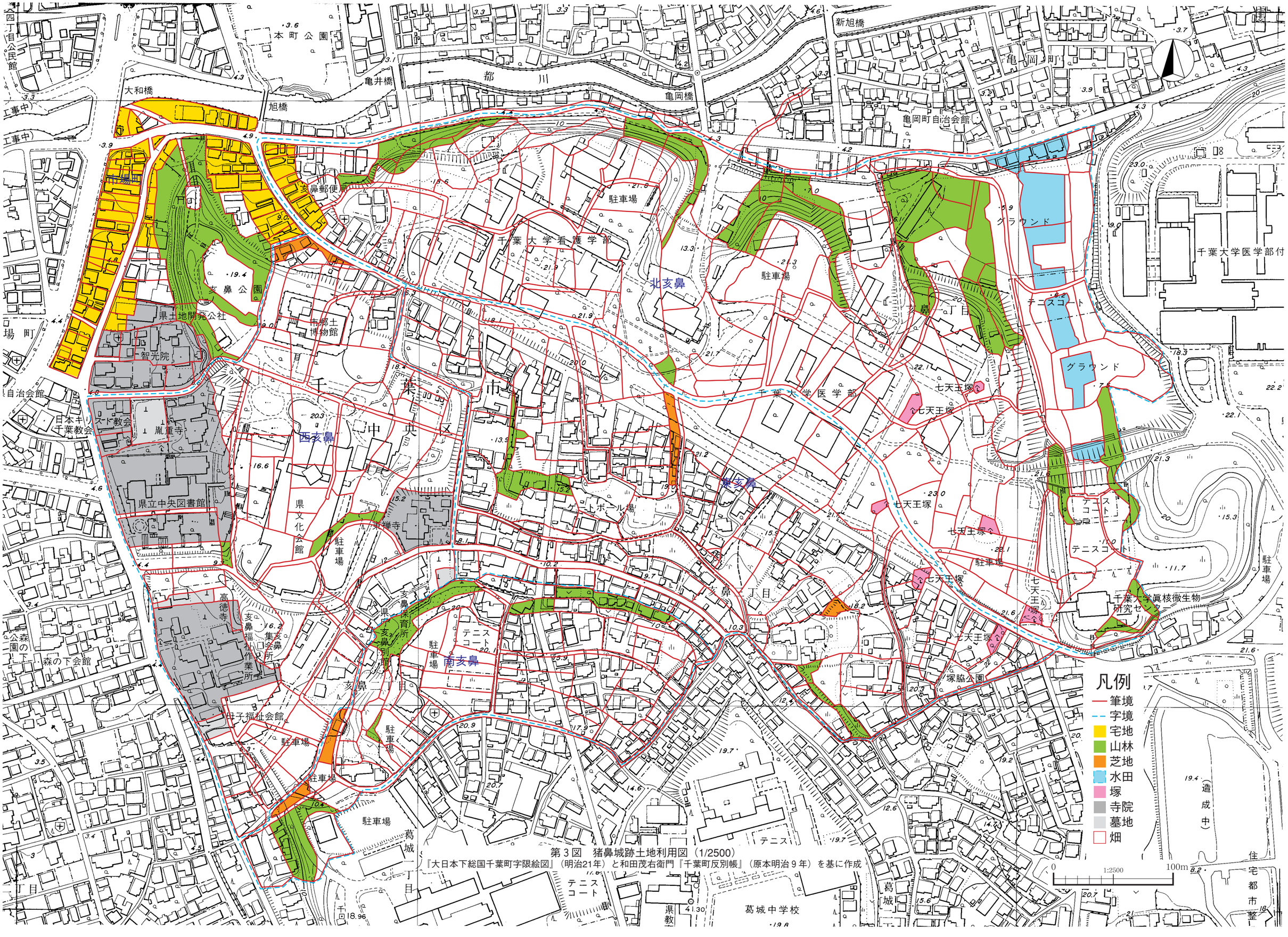
２）構造

Ⅰ郭周囲には土塁が残り，郷土博物館との間には発掘調査により堀が確認されているが，これは近世段階では堀跡として痕跡が残っていたものが埋められたものである。北西端の神明社のある部分は掘切によって切り離されて小さな独立した曲輪になっており，物見の跡と伝えられる。現在，いのはな亭という茶店がある部分もかつて小さな郭であったことは知られているが，『涌谷伊達氏文書』のいう二ノ丸に相当するのかははっきりしない。Ⅱ郭としたのは，郷土博物館の建つ地点である。博物館の下に堀があることが調査により確認されており，少なくとも東西の二つに分かれていると考えられる。文化会館付近をとりあえずⅢ郭としておいたが，実際は曲輪となるのかも不明である。地籍図では郷土博物館の下を道路が通っていることになり，これが調査により確認されている堀と関係しているとすれば，博物館と文化会館の間を東西に直線的に通る道路も堀と関係する可能性もある。文化会館建設以前にかなり地形の改変がなされているので，現状では城郭の構造について詳しいことは述べられない。この他，千葉大学医学部の周辺の斜面には腰曲輪状の地形も確認できるが，それらが果たして城郭遺構なのかは前述のように疑問も多い。

３）時期

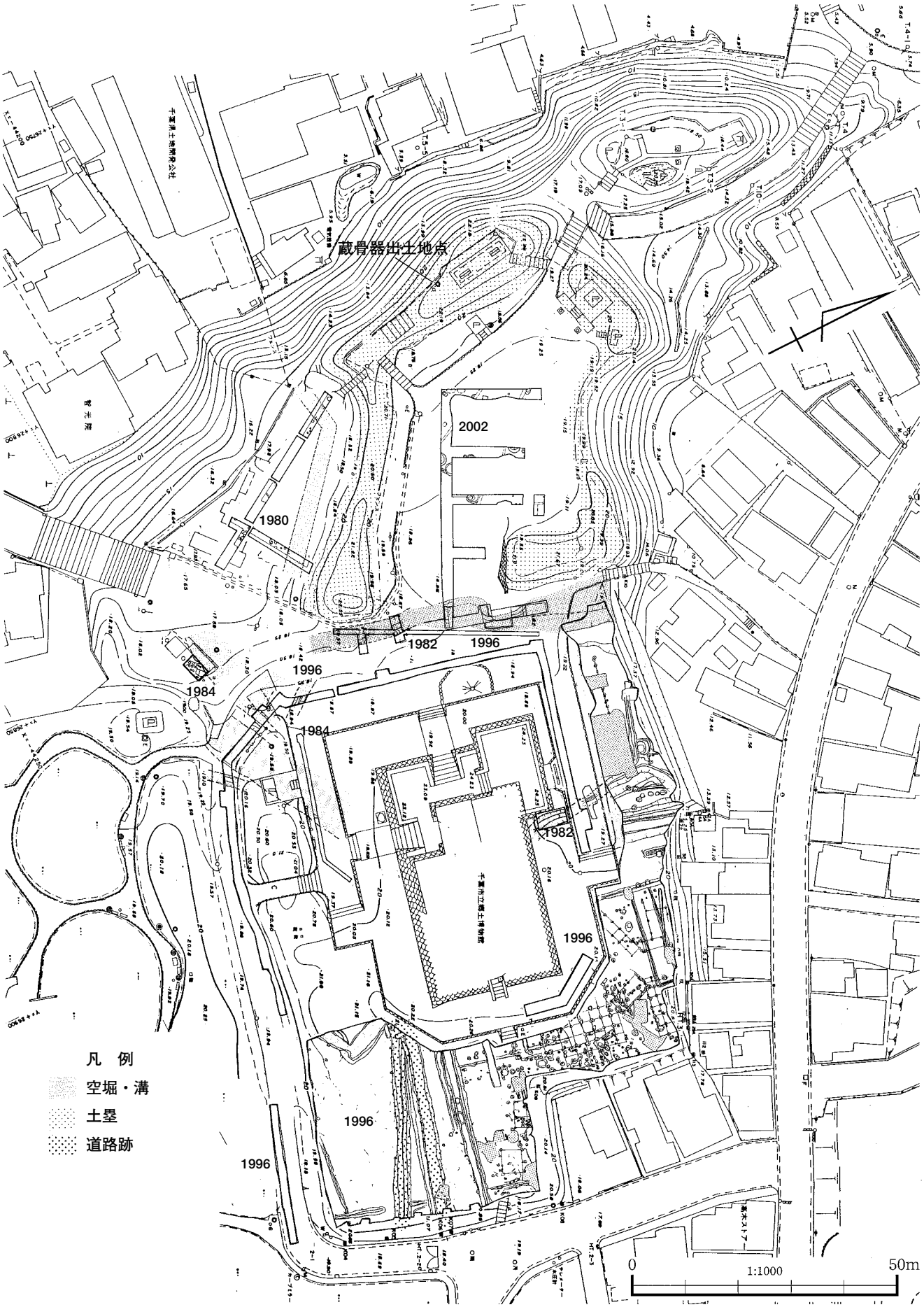
これまでの発掘調査の結果，鎌倉時代の明確な遺構は検出されず，城郭となるのは戦国期であることが明らかになった。15世紀半ば以前の遺構・遺物も存在するが，遺物に見るべきものは少なく，千葉氏当主の館跡とは考えにくいものであった。組成では，カワラケが主体であるので，儀式や儀礼の場であった可能性が高い。これに対し，戦国期の本佐倉城跡では，千葉氏の城にふさわしいとされる遺物が検出されているのとは対照的である（進藤・木内1995）。

千葉市
中央区
千葉
千葉大学医学部
駐車場
千葉大学看護学部
駐車場
支鼻公園
市郷土博物館
県立中央図書館
県文化会館
駐車場
高徳寺
支鼻郵便局
支鼻保育所
支鼻児童館
支鼻二丁目
支鼻一丁目
母子福祉会館
駐車場
駐車場
駐車場
高城中学校
県教
亀井橋
亀岡橋
新旭橋
旭橋
大和橋
新川
本町公園
東禅寺
日蓮宗
千葉教会
日本キリスト教会
自治会館
県庁
(工事中)
(工事中)



第３図　猪鼻城跡土地利用図（1/2500）

『大日本下総国千葉町字限絵図』（明治21年）と和田茂右衛門『千葉町反別帳』（原本明治９年）を基に作成



※数字は調査年次

第４図　猪鼻城跡中心部遺構配置図

『千学集抜粋』には，「一條院薄墨の御証文は，範覚の世に井の鼻を持たれし時，永正十三年丙子八月廿三日，三上但馬守二千余騎にて押寄せ打落とす，此時薄墨の御証文は宝器ともみな失せにける」とあり，妙見宮座主範覚（永正10年（1513）～天文12年（1543））が猪鼻に依ったことが推定される。猪鼻で戦いがあったことは，『本土寺過去帳』によっても確かめられる。「原蔵人丞殿法名郎寿　東六郎殿　証仏果　永正三丙子八月　千葉井花ニテ打死諸人同」とあり，年号と干支が一致しないが，『抜粋』と８月というのが共通するので，永正13年丙子が正しいものと考えられる。この戦いで原蔵人丞という原一族とみられる人物が打死しているが，範覚も原氏の一族で原胤隆の三男とされているように（『千学集抜粋』），永正13年に落城した猪鼻城は原氏との関係がみえるので，この城は原氏の城とみてほぼ間違いなさそうである。猪鼻城跡が，原氏と関係する城であることは，早くに小笠原長和氏によって，猪鼻城が原氏の支城的な役割を果たしていた可能性が指摘されていたが（小笠原1977），小高春雄氏も猪鼻城跡を原氏によって維持されたとし，猪鼻城跡と千葉城とは別のものという考えを示している（小高1995）。永正13年というのは，生実に足利義明が入って小弓公方が成立する直前であり，猪鼻城跡の落城は，原氏のこの地域からの駆逐と小弓公方の成立という一連の動きに連動した事件であったと考えられる。

４．調査成果

１）概要

調査地点は，千葉大学医学部南方の住宅地に位置する。標高約22mの台地から中央で標高約10mの谷に下る南斜面にあり，調査区は約18～19mほどの標高で，かつては宅地となっており，斜面に沿って平坦面が造成されていた。調査の結果，この地点の平坦面は台地を切り込むように造成して作られたものであることが確認された。その平坦面に中世の墓が多数検出されたことにより，この造成は中世にさかのぼるものであることが明らかとなった。調査によって検出されたのは，堀状遺構２，墓壙44基，土壙13基，溝５条，ピット１基である。このうち堀状遺構については，調査時においては城郭に伴う空堀と考えていたが，今回報告に当たり詳細に検討した結果，考察で述べたように堀ではなく陥し穴様の遺構と考えるにいたり，この報告では堀状遺構として報告することにした。出土遺物は，銅銭39枚（北宋・明銭）・五輪塔18点・宝篋印塔１点・板碑２点・カワラケ・陶磁器（瀬戸・常滑・渥美・青磁）などである。中世の遺物は銅銭と石塔類とカワラケが主で，陶磁器類は僅少である。その他，縄文土器や古代の土器なども検出されている。

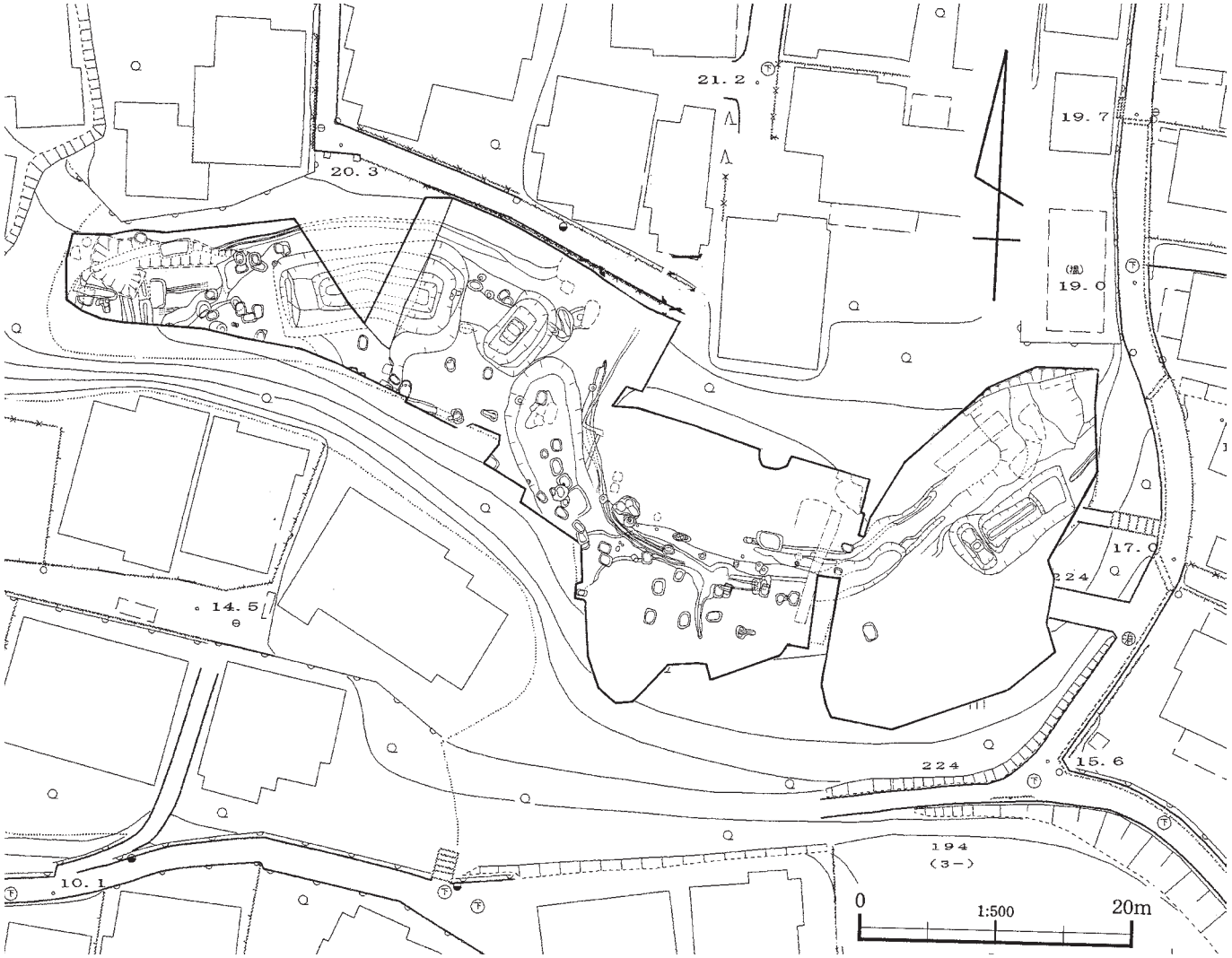
２）検出遺構

ａ．堀状遺構　堀状遺構としたものは，巨大な土壙といえるもので，二つの堀状遺構が確認された。この二つは規模は異なるが，ほぼ同じ構造のもので，主土壙と呼んだ長大な土壙の片側に，小規模な副土壙と呼んだ土壙が配されている。規模は，１号堀状遺構：長さ9.6m・幅4.9m・深さ2.5m，副土壙：長さ4.9m・幅2.2m・深さ2.5m，２号堀状遺構：長さ20.5m・幅8.2m・深さ2.8m，副土壙：長さ6.3m・幅3.8m・深さ2.8mである。１号と２号では，深さはあまり差がないが，大きさでは２号は１号の倍近い規模である。また，２号は主土壙が屈曲しており，これは地形にあわせたものであろう。これらはその配置や地形との関係から，城郭の防御施設とは考えにくいので，大規模な落とし穴のよ

うなものであろうと推定している。

b．墓壙　墓壙には，土葬（34基）と火葬土壙（10基）の二種がある。後者は火葬跡と呼んだ方が適切かもしれないが，ここでは調査時の遺構名を踏襲して報告しているため，これも墓に含めて報告する。土葬墓は，23号のように長方形の墓穴に側臥屈葬で，頭位を北にとり，顔を西に向けるものが基本となるようである。これは北首西顔とも呼ばれる遺体安置の方法で，23号のように両手が胸の位置にあるものは西向き合掌葬となるが，32号のように頭位が西に向くものもある。火葬土壙は燃焼部と通気坑に分かれるが，通気坑が土壙状を呈するものと，通気坑が直線的で全体がＴ字型をするものがある。

本地点の墓壙の特徴としてあげられるのは，まず，土葬のものには，覆土中から五輪塔が多数検出されたものがあることである。点数を示すと７号：水輪１，10号：空風輪１，23号：火輪３・水輪１，31号：空風輪３・火輪５・水輪２である。これらはいずれも土葬によるものであることは注意されるべきである。31号では計10点も検出されており，特殊な埋葬のされ方であったことがわかる。ただし，ここでは地輪はまったく検出されず，組み合わせも完全ではないので，もともと墓の上に立っていた五輪塔を墓壙内に埋め込んだものではないことは確かである。



第５図　猪鼻城跡調査区全体図

ｃ．土壙　土壙として報告したのは13基であるが，これらの大部分は墓である可能性が大きい。分布の上でも墓壙群に含まれるし，形態の上でも大きな違いがないからである。ここでは，人骨が検出されなかったため，土壙としたが，これらの土壙を含めて墓壙としても問題は少ないであろう。１号土壙は，形態が細長く墓壙にしてはやや異質であるが，細長い形の40号墓壙もあり，墓壙に伴うことの多い五輪塔も検出されているので，これも人骨の消失した土葬の墓と考えられる。

ｄ．溝跡　溝として報告したのは，５条である。墓壙群の展開する平場も，墓壙群を設けるために作られたもので，溝跡はその区画用のものと考えられる。それらの方向は，造成面の奥の縁に沿うもの（３号・５号）か，それに直交する方向のもの（１号・２号・４号）がある。

ｅ．ピット　今回報告するのは，カワラケが検出されたＣ区の１基のみである。柱穴となるようなものは確認されず，ここには建物は建っていなかった可能性が高い。

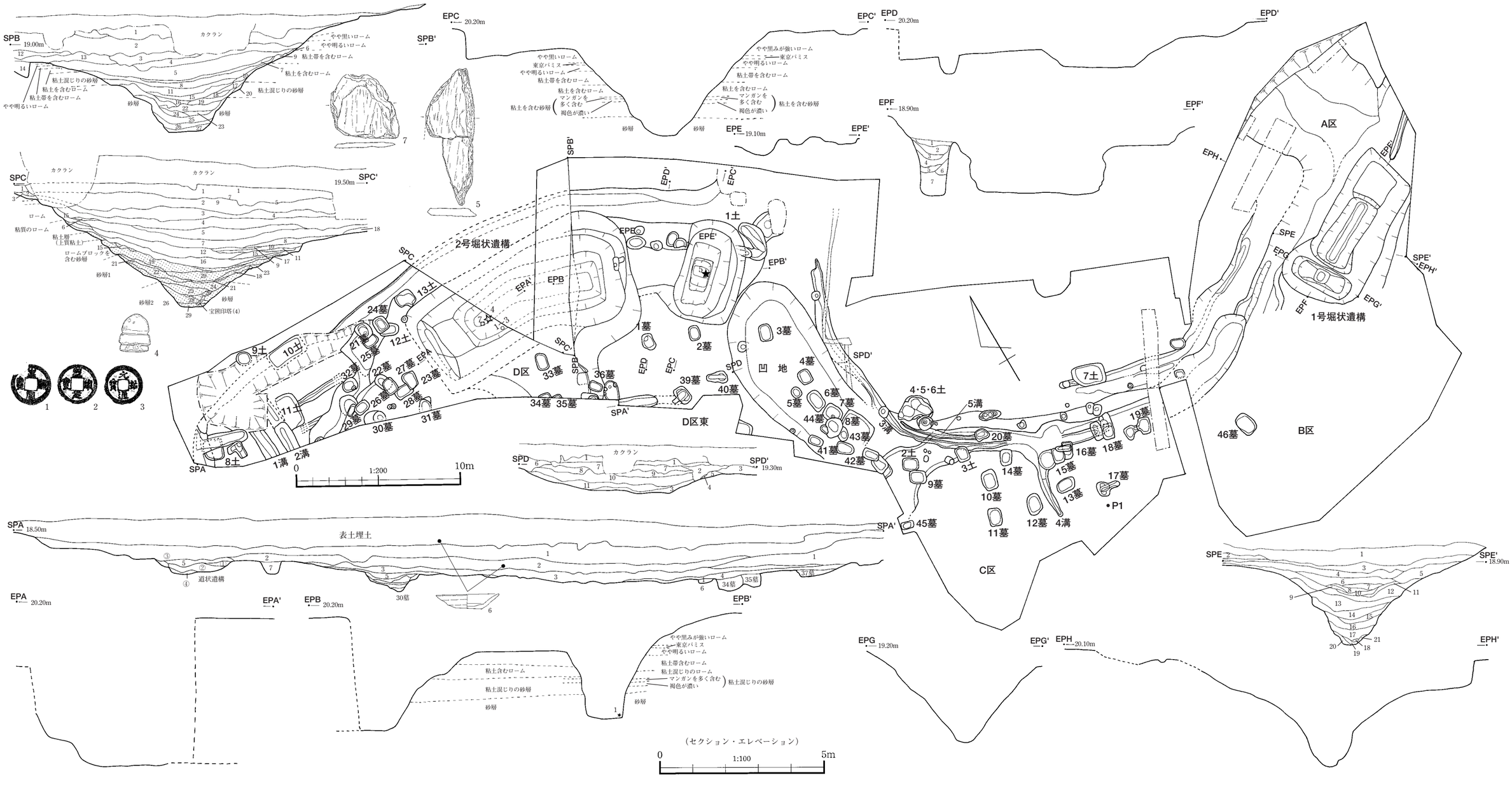
３）出土遺物

ａ．石塔類（第16・17図）　五輪塔は18点検出された。墓壙の可能性が大きい１号土壙以外はすべて墓壙からの出土である。空風輪４・火輪９・水輪５という点数で，火輪が多く，地輪がまったくないのが特徴的である。31号墓壙では，空風輪３・火輪５・水輪２がまとまって検出されている。石材は１点以外はいずれも安山岩である。空風輪のうち５は，砂岩製で空風輪部の長さ22㎝，径15㎝を測るやや大型の五輪塔の一部である。地元の大日寺に残る大型の五輪塔群と比較してみると，おおよそ１ｍ程度の高さのものに復元できそうである（千葉市教育委員会1976）。形態的にも他の小型の一群に比べれば，先行する時期のものと考えられ，おおよそ14世紀代のものとみられる。その他，空風輪では断面が少し扁平化しているもの（４・６），火輪では整形の丁寧なもの（８），高さの低いタイプ（14・16）などいくつかのタイプがあるが，31号墓壙ではそれらが混在している。板碑は堀状遺構から緑泥片岩製の断碑が２点検出されている。３は砂岩製の宝篋印塔の相輪部の先端と思われるものである。

ｂ．中世陶磁器（第18図）　確実に遺構に伴うものはなく，遺構からのものも覆土に入り込んだものである。中世のものとしては，青磁の鉢（23），渥美甕（25），常滑鉢（26：９型式），常滑壺（28）常滑甕（29～31），古瀬戸盤類（27：後期Ⅰ～Ⅱ期）などである。渥美甕は13世紀前半までのものであるが，その他はいずれも14～15世紀と考えられるものである。24は須恵器質の小型鉢である。

ｃ．カワラケ（第18図）　14点図示したがこれが主なものである。墓壙から複数検出されたものが多く，土葬と火葬がそれぞれ２例ずつである。これらは，カワラケの編年を考える上でも良好な資料といえる。基本的に大中小の３種のセットであるが，主体となるのは，大型が体部下半に屈曲を持ち外反するタイプ（35・36・39・44）である。これに組となる中小型タイプは屈曲を持つもの（42）と持たないもの（37・38・43）がある。これらとは別のタイプがあり，それはピット１から検出された２点（45・46）で，これらは体部が内湾し，側面観が丸みを持つものである。技法的には，確認できるものはすべて底部の切り離しは右回転の糸切りで，内面見込みには横ナデが加えられている。

ｄ．銅銭（第19図）　銅銭は16種39点検出された。２号堀状遺構から検出された３点以外は，すべて墓壙から検出されたものである。最新銭は，永楽通宝（初鋳　明：1408年）であるが，洪武通宝を含め明銭は４点のみで，その全体に占める比率は少ないといえる。



第６図　猪鼻城跡遺構配置図（3丁目公園地点）

ｅ．その他の遺物　第18図22は，24号墓壙から検出された石で，特に加工はないが一部に摩滅痕がある。32は鉄釘である。第20図１～６は近世後期の陶磁器，７は近代の土器（火鉢か），８も土器類だが，これも方形を呈する鉢かもしれない。９は砥石，10～14は縄文土器（10・11：加曽利Ｂ式，12：曽谷式，13：安行１式，14：曽谷～安行式），15・16は近現代の弾丸，17・18・20～22は古代の須恵器，19は古代の瓦である。確認調査では近世初頭の瀬戸製品（第20図26・27）も検出されている。

第６図土層説明

SPA～A′

1	7.5YR 3/3	暗褐色	粘性ややあり　しまり普通
2	7.5YR 3/1	黒褐色	粘性普通　しまり普通
3	7.5YR 2/3	極暗褐	色粘性普通　しまり普通
4	7.5YR 3/4	暗褐色	粘性ややあり　しまり普通　ややキメが粗くローム粒らしきものが攪拌されて全体に入る　中世含含層
5	7.5YR 2/3	極暗褐色	粘性・しまり普通　ローム粒少々入る
6	10YR 4/3	にぶい黄褐色～5/2	灰黄褐色　粘性弱　しまりやや弱　谷頭の自然堆積層

SPB～B′

1	7.5YR 3/3	暗褐色	2～5㎜のローム粒を5%含む　粘性・しまりやや弱
2	7.5YR 3/3	暗褐色	2～5㎜のローム粒・炭化物粒を5%含む　粘性・しまりやや弱
3	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒・炭化物粒を5%含む 粘性やや強　しまりやや弱
4	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒・炭化物粒を5%含む 粘性やや強　しまりやや弱
5	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%　2～5㎜の炭化物粒を5%含む　粘性やや強　しまりやや弱
6	7.5YR 3/1	黒褐色	2～5㎜のローム粒を10% 白色粘土を10%含む　粘性・しまりやや弱
7	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%　1㎜以下の焼土砂を5%含む粘性　しまりやや弱
8	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%　2～5㎜の炭化物粒を5%含む　粘性やや強　しまりやや弱
9	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%　白色粘土を10%含む　粘性やや強　しまりやや弱
10	7.5YR 3/1	黒褐色	10㎜以上のローム粒を20%　1㎜以下の焼土砂を5%含む　粘性やや弱　しまりやや強
11	7.5YR 2/4	暗褐色	10㎜以上のローム粒を20%　1㎜以下の焼土砂を5%含む　粘性・しまりやや弱
12	7.5YR 3/4	暗褐色	1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性・しまりやや弱
13	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎜のローム粒を5%　1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性・しまりやや弱
14	7.5YR 3/2	黒褐色	1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性やや強　しまりやや弱
15	7.5YR 3/3	暗褐色	2～5㎝のロームブロックを10%含む　粘性・しまりやや強
16	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎝のロームブロック主体　粘性・しまりやや強
17	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒・褐色砂ブロックを10%含む　粘性やや弱　しまりやや強
18	7.5YR 3/2	黒褐色	2～5㎜のローム粒10%　褐色砂ブロックを20%　スコリア粒を微量に含む　粘性やや弱　しまりやや強
19	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒・褐色砂ブロックを10%含む
20	7.5YR 5/8	明褐色	褐色砂主体　1～2㎜の炭化物粒を5%含む　粘性・しまりやや強
21	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎝のロームブロックを30%含む　粘性・しまりやや強
22	7.5YR 3/4	暗褐色	1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性・しまりやや強
23	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を5%　炭化物粒を微量に含む　粘性やや強　しまりやや弱
24	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を5%含む　粘性やや強　しまりやや弱
25	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎜のローム粒を5%　炭化物粒を微量　褐色砂を10%含む　粘性・しまりやや弱
26	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎜のローム粒を5%　褐色砂を20%含む　粘性やや強　しまりやや弱
27	7.5YR 5/6	明褐色	砂層

SPC～C′

1	7.5YR 3/1	黒褐色	粘性ややなし　しまり普通
2	7.5YR 3/3	暗褐色	粘性ややなし　しまり普通
3	5YR 3/2	暗赤褐色	粘性ややなし　しまりややあり
4	7.5YR 3/4	暗褐色	粘性ややなし　しまりややあり
5	10YR 3/3	暗褐色	粘性ややなし　しまりややあり
6	7.5YR 3/4	暗褐色	4層と同色だが　しまっていてロームブロックが多量に入る（55%）
7	10YR 2/2	黒褐色	粘性普通　しまりややあり
8	10YR 2/3	黒褐色	粘性あり　しまり普通
9	10YR 2/2	黒褐色	
10	10YR 1.7/1	黒色	
11	7.5YR 3/1	黒褐色	
12	10YR 2/1	黒色	粘性・しまり普通
13	10YR 3/1	黒褐色	ローム粒・小ブロックがとても多く入る
14	7.5YR 3/1	黒褐色	
15	7.5YR 3/2	黒褐色	
16	7.5YR 3/3	暗褐色に5/4にぶい褐色のロームブロック粒が下部に多く入る（30%）粘性普通　しまりややあり	
17	7.5YR 2/1	黒色	
18	7.5YR 2/3	暗褐色	19層と同じ　ロームブロックが80%を越える　硬化
19	7.5YR 2/3	暗褐色に2/4	灰褐色ロームブロックが全体に入る（25%）　粘性ややあり　しまり強　硬化
20	5YR 2/2	黒褐色	微量のローム粒入る　粘性ややあり　しまり強　18・19・21層に比べ　しまりが悪い　硬化
21	19層と同色		ロームブロックが90%以上入る　粘性普通　しまりやや弱　硬化
22	10YR 2/1	黒色	粘性やや弱　しまりあり　硬化
23	10YR 3/1	黒褐色	粘性やや弱　しまりあり　硬化
24	10YR 2/2	黒褐色	粘性普通　しまりあり　硬化
25	10YR 4/3	にぶい黄褐色	粘性・しまり弱　砂層
26	2.5YR 3/2	黒褐色	粘性ややあり　しまり弱　砂層
27	10YR 2/3	黒褐色	粘性ややあり　しまり弱　黒褐色ブロック20%混じる　砂層
28	5YR 3/2	オリーブ黒色	粘性・しまり弱　砂層
29	5YR 5/2	灰オリーブ色	粘性・しまり弱　砂層

SPD～D′　（凹状遺構）

1	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を30%　1～2㎜の炭化物粒を5%　1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性・しまりやや弱
2	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%　1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性・しまりやや弱
3	7.5YR 3/3	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%　1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性やや弱　しまりやや強
4	7.5YR 3/4	暗褐色	粘性・しまりやや強
5	7.5YR 4/6	褐色	粘性やや強　しまり強
6	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%　1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性・しまりやや弱
7	7.5YR 3/4	暗褐色	5～10㎜のローム粒を10%　1～2㎜のスコリア粒・5～10㎜の炭化物粒を微量に含む　粘性・しまりやや弱
8	7.5YR 3/4	暗褐色	5～10㎜のローム粒を20%含む　粘性・しまりやや弱
9	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎜のローム粒を30%含む　粘性やや弱　しまりやや強
10	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を30%含む　粘性やや弱　しまりやや強
11	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎜のローム粒を10%　1～2㎜のスコリア粒を微量に含む　粘性やや弱　しまりやや強
12	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎜のローム粒を5%含む　粘性やや弱　しまりやや強

SPE～E′

1	7.5YR 3/3	暗褐色	粘性・しまり普通
2	7.5YR 3/4	暗褐色	粘性・しまり普通
3	10YR 2/1	黒色	細かいハードロームブロックを含む　粘性普通　しまりややあり
4	10YR 3/3	暗褐色	ハートローム粒が全体に散見　粘性普通　しまりややあり
5	10YR 3/4	暗褐色	ハートローム粒が全体に散見　粘性普通　しまりややあり
6	7.5YR 3/3	暗褐色	ハートローム粒が全体に散見　粘性・しまり普通
7	7.5YR 2/2	黒褐色	粘性やや弱　しまり強　硬化が著しい道状の凹みか
8	7.5YR 2/3	極暗褐色	粘性やや弱　しまり強　硬化が著しい道状の凹みか
9	7.5YR 3/4	暗褐色	粘性やや弱　しまりあり　硬化が著しい道状の凹みか
10	7.5YR 3/3	暗褐色	粘性やや弱　しまりあり　硬化が著しい道状の凹みか
11	10YR 3/3	暗褐色	粘性やや弱　しまりあり　硬化が著しい道状の凹みか
12	10YR 3/3	暗褐色	粘性・しまりややあり　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
13	10YR 3/4	暗褐色	粘性・しまりややあり　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
14	10YR 4/3	褐色	粘性なし　しまり普通　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
15	7.5YR 4/2	灰褐色	粘性なし　しまり普通　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
16	10YR 4/2	灰黄褐色	粘性なし　しまり普通　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
17	10YR 4/3	褐色	粘性なし　しまり普通　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
18	10YR 3/1	黒褐色	粘性あり　しまり普通　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
19	7.5YR 5/3	にぶい褐色	粘質の有機質層で18層の小ブロックを含む　粘性なし　しまり普通　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層
20	7.5YR 5/4	にぶい褐色	ほとんど地山　18層の小ブロックを含む　粘性なし　しまり普通　地山の山砂の崩落ブロック砂粒を多く含む自然堆積層

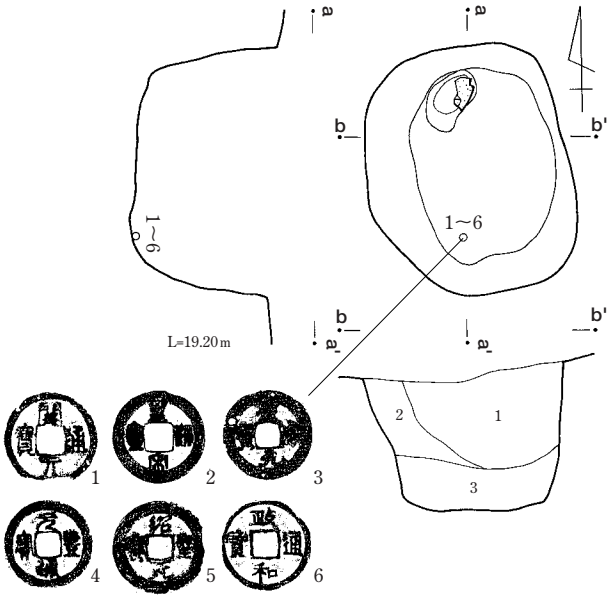
EPE～E′

1	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を5%含む　粘性弱　しまりやや弱
2	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%含む　粘性弱　しまりやや弱
3	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を20%含む　粘性やや強　しまりやや弱
4	7.5YR 4/3	褐色	5～10㎜のローム粒を30%含む　粘性やや強　しまりやや弱
5	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎜のローム粒を20%含む　粘性やや強　しまりやや弱
6	7.5YR 4/3	褐色	2～5㎝程のロームブロックを20%含む　粘性・しまりやや強
7	7.5YR 3/4	暗褐色	2～5㎜のローム粒を10%含む　粘性やや強　しまりやや弱
3層～7層			山砂ブロックの混入が全体的に見られる
5層～7層			5～10㎝の粘土ブロックが混入

（道状遺構）

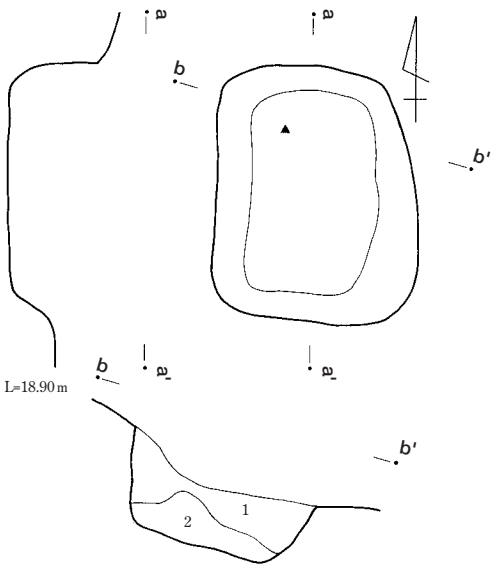
①	10YR 3/1	黒褐色	ローム小ブロック・粒少々入る　粘性・しまり普通
②	10YR 3/1	黒色	炭化物微量入る（5%）　粘性ややあり　しまり普通
③	10YR 4/2	灰黄褐色	ソフトロームブロック入る　粘性ややあり　しまり普通
④	10YR 3/3	暗褐色	ロームブロックやや多く入る　粘性ややなし　しまりあり
⑤	10YR 2/3	黒褐色	粘性・しまり普通

1号墓壙



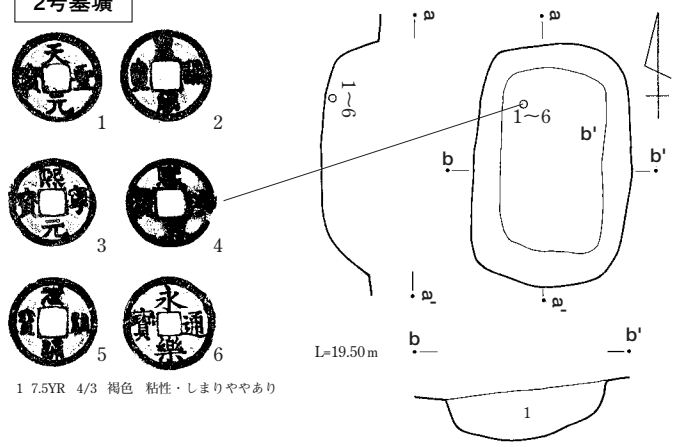
1 7.5YR 3/4 暗褐色　10㎜以上のロームブロック・黒褐色土を10%含む　粘性・しまりやや強
2 7.5YR 4/6 褐色　2～5㎜のローム粒・黒褐色土を10%含む　粘性・しまりやや強
3 7.5YR 3/4 暗褐色　5～10㎜のローム粒・黒褐色土を10%含む　粘性強　しまりやや強

3号墓壙



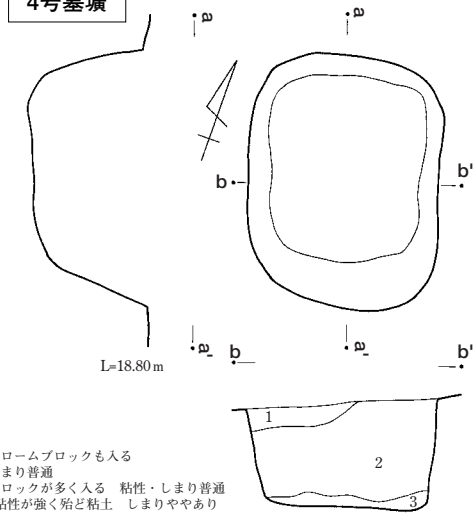
1 7.5YR 4/6 褐色　粘性普通　しまりあり
2 7.5YR 3/4 暗褐色　ローム小ブロックや粒も多いが1層に比べ　しまりがなくなっている
粘性やや強い　しまりややあり

2号墓壙



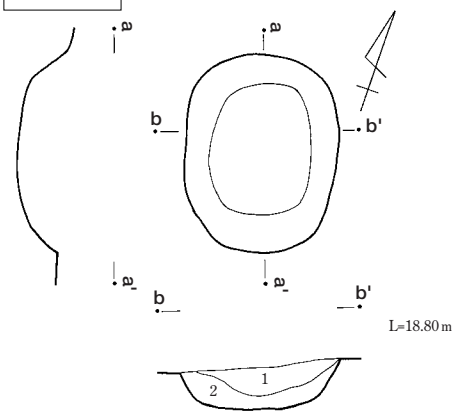
1 7.5YR 4/3 褐色　粘性・しまりややあり

4号墓壙

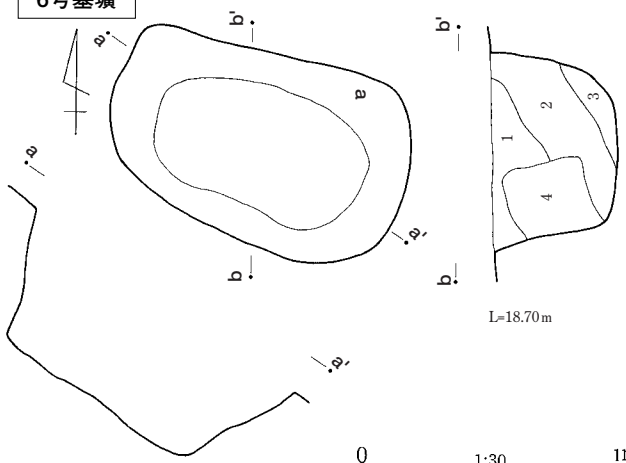


1 7.5YR 2/2 黒褐色＋3/4　暗褐色ブロック・ロームブロックも入る
粘性ややあり　しまり普通
2 7.5YR 3/2 黒褐色＋3/4　暗褐色　ロームブロックが多く入る　粘性・しまり普通
3 10YR 2/4 灰褐色　2層と似るものの粘性が強く殆ど粘土　しまりややあり

5号墓壙



6号墓壙

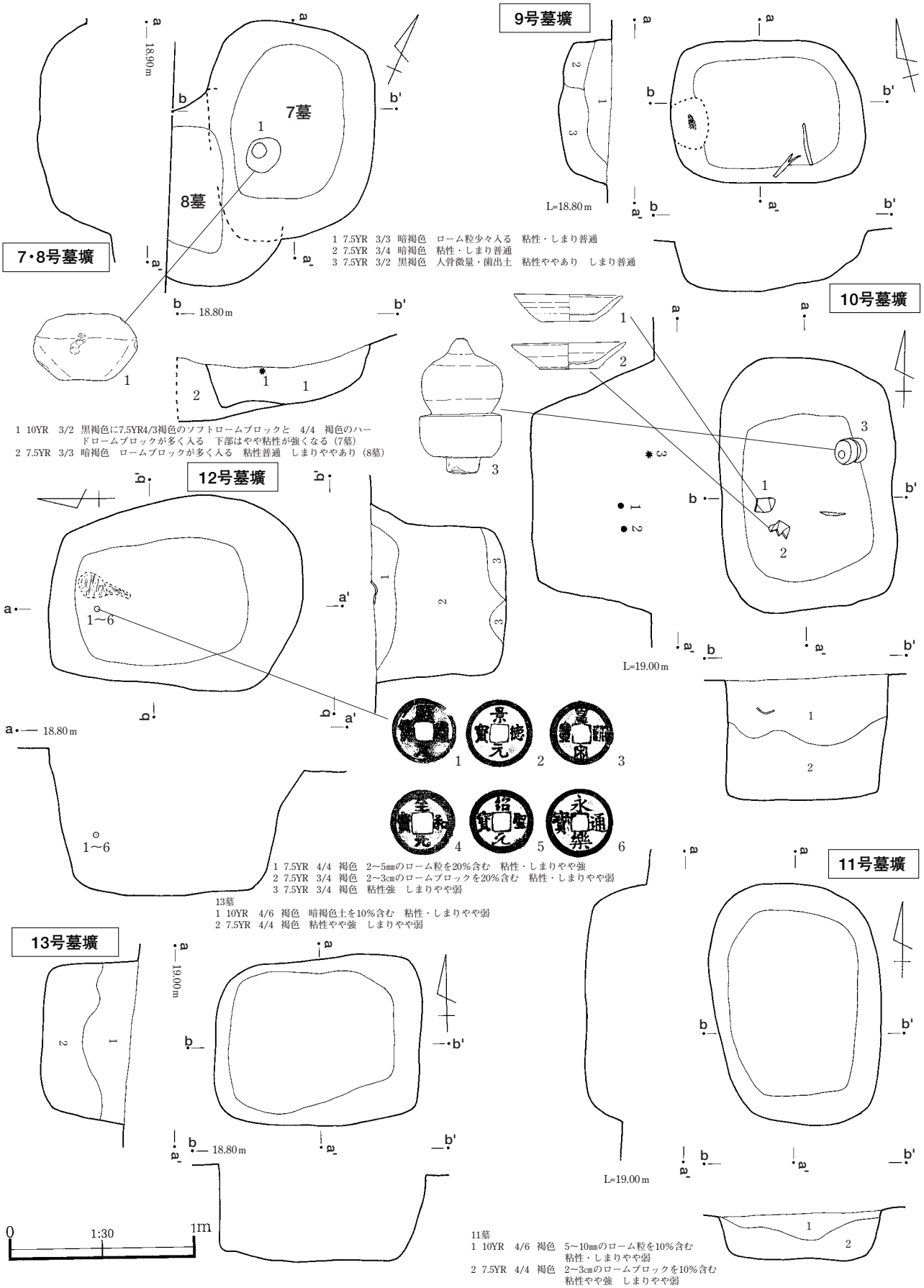


5号
1 7.5YR 2/2 黒褐色　やや砂質気味　炭化物・粘土粒を微量含む　粘性・しまり普通
2 7.5YR 3/3 暗褐色　炭化物・焼土粒を微量含む　粘性ややあり　しまり普通

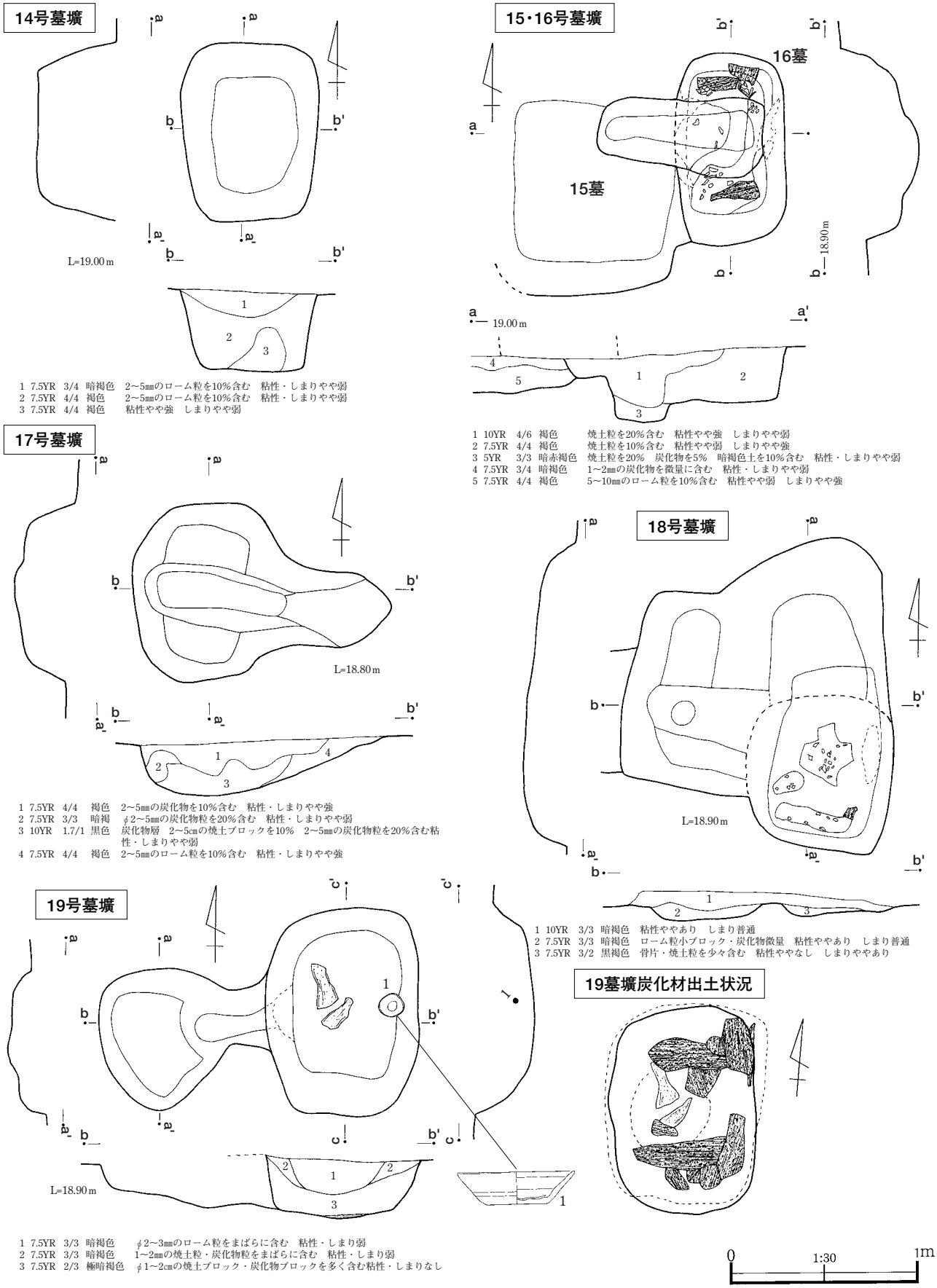
6号
1 7.5YR 3/2 黒褐色　ローム粒が全体的に散在　粘性・しまり普通
2 7.5YR 3/3 暗褐色　ローム粒・炭化物粒少量入る　粘性普通　しまりややあり
3 7.5YR 3/4 暗褐色　地山ロームブロックに近い　粘性ややなし　しまりややあり
4 7.5YR 3/3 暗褐色が主体だが灰褐色の粘土ブロック状の土が多く入る　人骨片も多い

0　1:30　1m

第７図　検出遺構　墓壙(1)



第８図　検出遺構　墓壙(2)－(７～13号)



1 7.5YR 3/4 暗褐色　2～5㎜のローム粒を10%含む　粘性・しまりやや弱
2 7.5YR 4/4 褐色　2～5㎜のローム粒を10%含む　粘性・しまりやや弱
3 7.5YR 4/4 褐色　粘性やや強　しまりやや弱

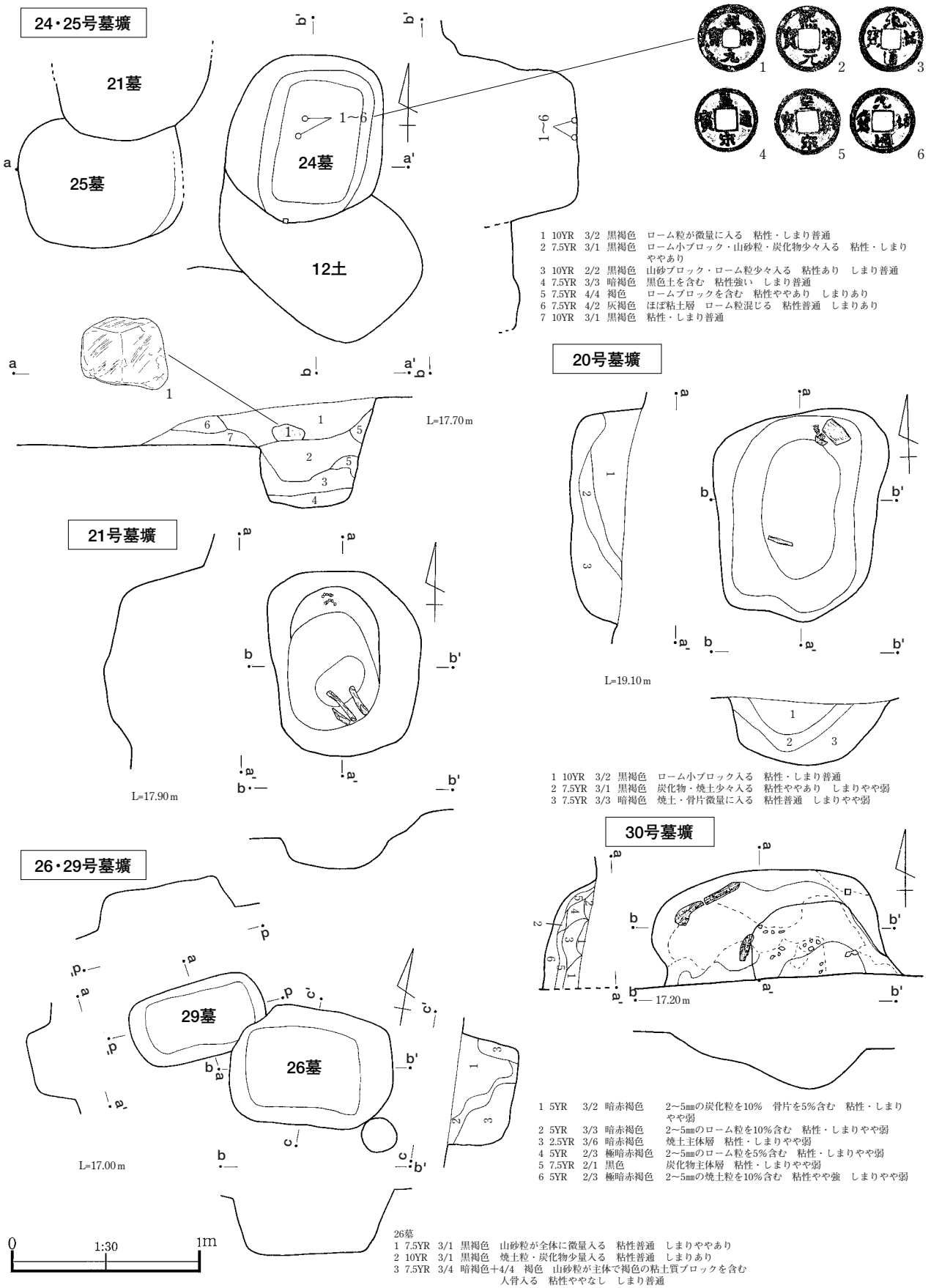
1 10YR 4/6 褐色　焼土粒を20%含む　粘性やや強　しまりやや弱
2 7.5YR 4/4 褐色　焼土粒を10%含む　粘性やや弱　しまりやや強
3 5YR 3/3 暗赤褐色　焼土粒を20%　炭化物を5%　暗褐色土を10%含む　粘性・しまりやや弱
4 7.5YR 3/4 暗褐色　1～2㎜の炭化物を微量に含む　粘性・しまりやや弱
5 7.5YR 4/4 褐色　5～10㎜のローム粒を10%含む　粘性やや弱　しまりやや強

1 7.5YR 4/4 褐色　2～5㎜の炭化物を10%含む　粘性・しまりやや強
2 7.5YR 3/3 暗褐色　φ2～5㎜の炭化物粒を20%含む　粘性・しまりやや弱
3 10YR 1.7/1 黒色　炭化物層　2～5㎝の焼土ブロックを10%　2～5㎜の炭化物粒を20%含む粘性・しまりやや弱
4 7.5YR 4/4 褐色　2～5㎜のローム粒を10%含む　粘性・しまりやや強

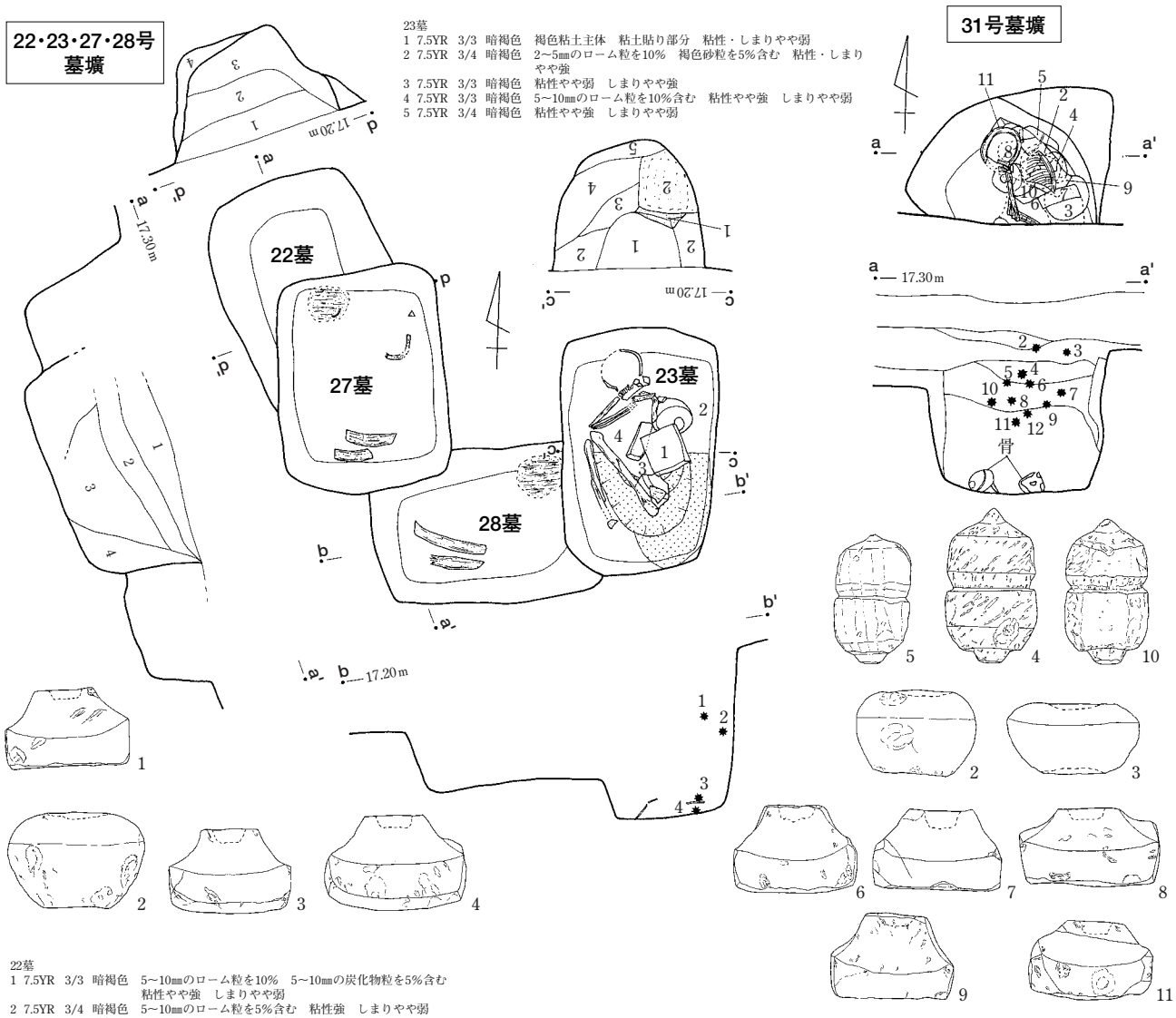
1 10YR 3/3 暗褐色　粘性ややあり　しまり普通
2 7.5YR 3/3 暗褐色　ローム粒小ブロック・炭化物微量　粘性ややあり　しまり普通
3 7.5YR 3/2 黒褐色　骨片・焼土粒を少々含む　粘性ややなし　しまりややあり

1 7.5YR 3/3 暗褐色　φ2～3㎜のローム粒をまばらに含む　粘性・しまり弱
2 7.5YR 3/3 暗褐色　1～2㎜の焼土粒・炭化物粒をまばらに含む　粘性・しまり弱
3 7.5YR 2/3 極暗褐色　φ1～2㎝の焼土ブロック・炭化物ブロックを多く含む粘性・しまりなし

第９図　検出遺構　墓壙(3)－(14～19号)



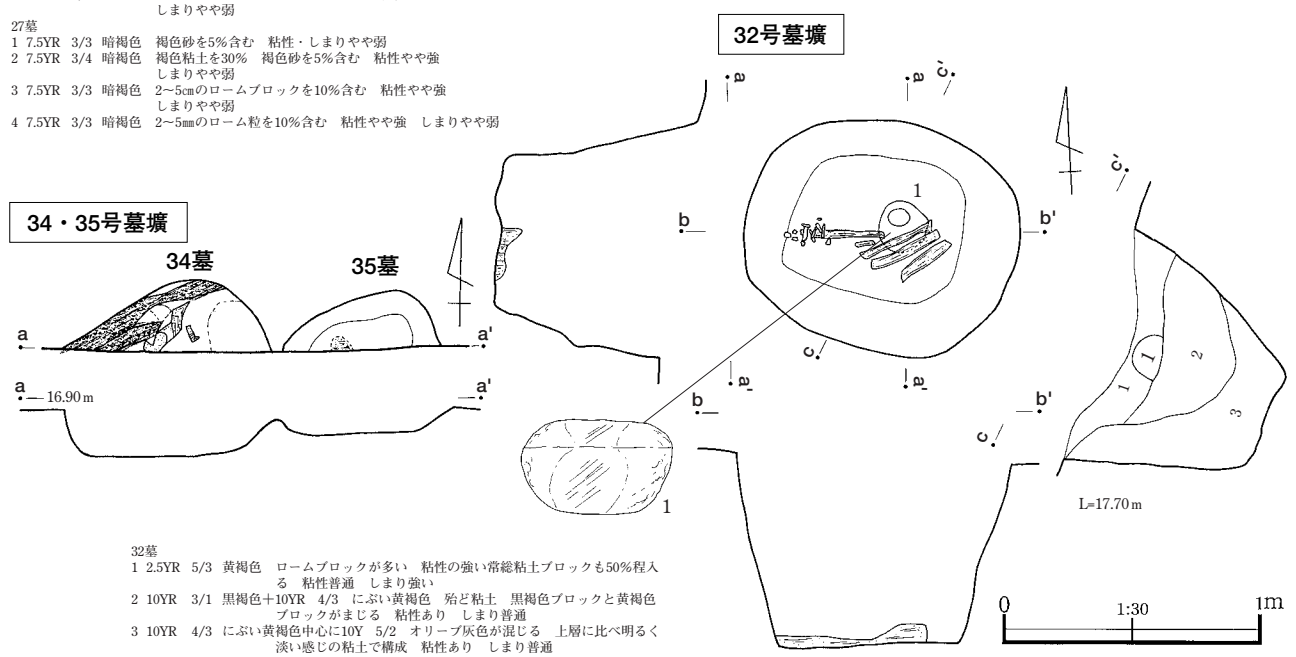
第10図 検出遺構 墓壙(4)－(20・21・24～26・29・30号)



23墓
1 7.5YR 3/3 暗褐色　褐色粘土主体　粘土貼り部分　粘性・しまりやや弱
2 7.5YR 3/4 暗褐色　2～5㎜のローム粒を10%　褐色砂粒を5%含む　粘性・しまりやや強
3 7.5YR 3/3 暗褐色　粘性やや弱　しまりやや強
4 7.5YR 3/3 暗褐色　5～10㎜のローム粒を10%含む　粘性やや強　しまりやや弱
5 7.5YR 3/4 暗褐色　粘性やや強　しまりやや弱

22墓
1 7.5YR 3/3 暗褐色　5～10㎜のローム粒を10%　5～10㎜の炭化物粒を5%含む　粘性やや強　しまりやや弱
2 7.5YR 3/4 暗褐色　5～10㎜のローム粒を5%含む　粘性強　しまりやや弱
3 7.5YR 3/3 暗褐色　2～5㎜のローム粒を5%含む　粘性強　しまりやや弱
4 7.5YR 3/3 暗褐色　2～5㎜のロームブロックを10%含む　粘性やや強　しまりやや弱

27墓
1 7.5YR 3/3 暗褐色　褐色砂を5%含む　粘性・しまりやや弱
2 7.5YR 3/4 暗褐色　褐色粘土を30%　褐色砂を5%含む　粘性やや強　しまりやや弱
3 7.5YR 3/3 暗褐色　2～5㎝のロームブロックを10%含む　粘性やや強　しまりやや弱
4 7.5YR 3/3 暗褐色　2～5㎜のローム粒を10%含む　粘性やや強　しまりやや弱

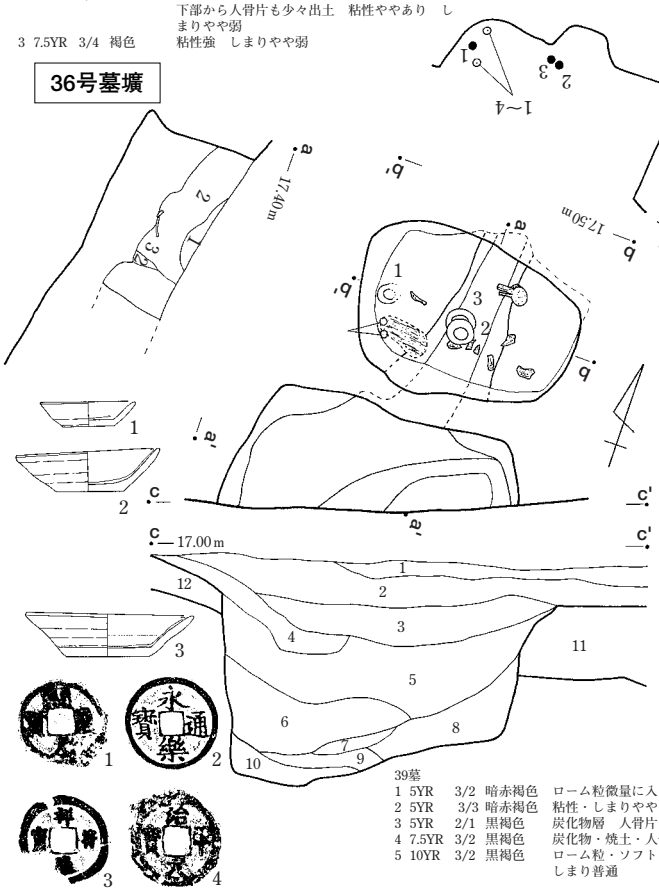


32墓
1 2.5YR 5/3 黄褐色　ロームブロックが多い　粘性の強い常総粘土ブロックも50%程入る　粘性普通　しまり強い
2 10YR 3/1 黒褐色＋10YR 4/3 にぶい黄褐色　殆ど粘土　黒褐色ブロックと黄褐色ブロックがまじる　粘性あり　しまり普通
3 10YR 4/3 にぶい黄褐色中心に10Y 5/2 オリーブ灰色が混じる　上層に比べ明るく淡い感じの粘土で構成　粘性あり　しまり普通

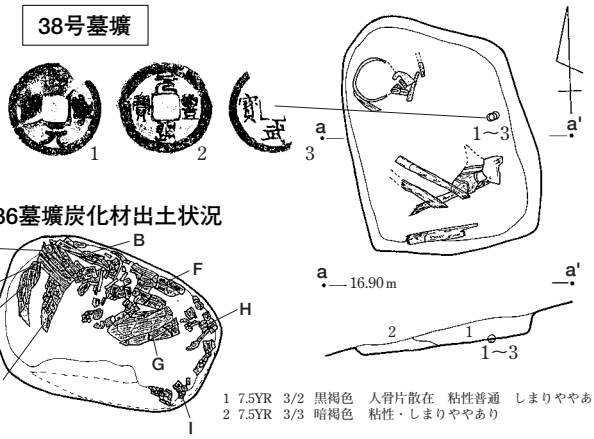
第11図　検出遺構　墓壙(5)－(22・23・27・28・31～35号)

36墓
1 10YR 3/3 暗褐色 ローム粒微量に入る 粘性・しまり普通
2 5YR 3/2 暗赤褐色 ローム小ブロック・炭化物・山砂を20%程含む 下部から人骨片も少々出土 粘性ややあり しまりやや弱
3 7.5YR 3/4 褐色 粘性強 しまりやや弱

36号墓壙

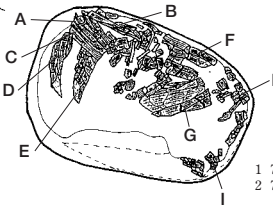


38号墓壙

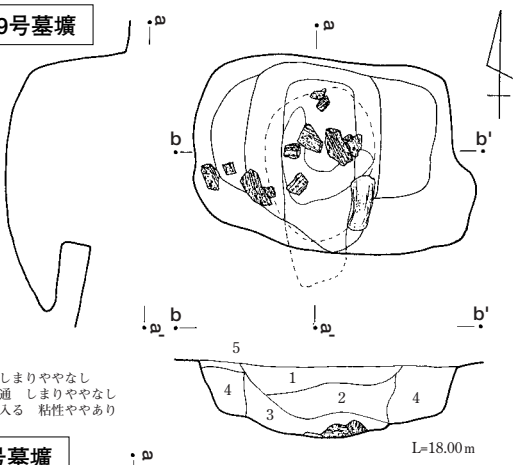


1 7.5YR 3/2 黒褐色 人骨片散在 粘性普通 しまりややあり
2 7.5YR 3/3 暗褐色 粘性・しまりややあり

36墓壙炭化材出土状況



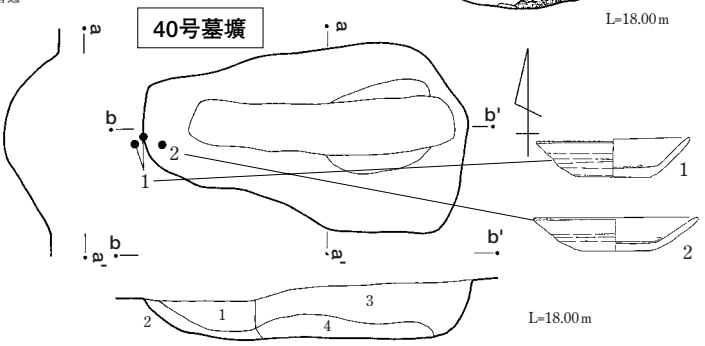
39号墓壙



39墓
1 5YR 3/2 暗赤褐色 ローム粒微量に入る 粘性・しまり普通
2 5YR 3/3 暗赤褐色 粘性・しまりややあり
3 5YR 2/1 黒褐色 炭化物層 人骨片多く含む 粘性なし しまりややなし
4 7.5YR 3/2 黒褐色 炭化物・焼土・人骨片少々入る 粘性普通 しまりややなし
5 10YR 3/2 黒褐色 ローム粒・ソフトローム小ブロック少々入る 粘性ややあり しまり普通

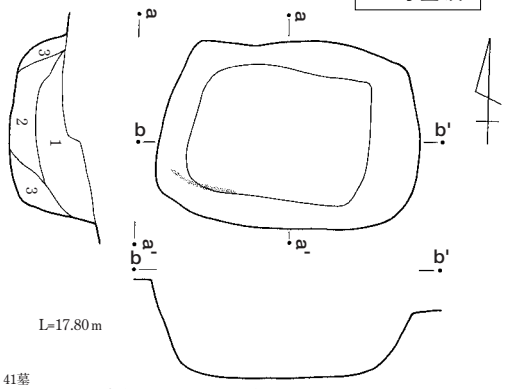
36墓
1 7.5YR 3/3 暗褐色 1～2㎜のローム粒を5% 炭化物粒を5% 赤色スコリア粒を5%含む 粘性やや弱 しまりやや強
2 7.5YR 3/3 暗褐色 2～5㎜のローム粒を5%含む 粘性やや弱 しまりやや強
3 7.5YR 3/3 暗褐色 2～5㎜のローム粒を20% 赤色スコリア粒を5%含む 粘性やや弱 しまりやや強
4 7.5YR 3/3 暗褐色 2～5㎜のローム粒を10%含む 粘性やや弱 しまりやや強
5 7.5YR 3/3 暗褐色 5～10㎜のローム粒を10%含む 粘性やや強 しまりやや弱
6 7.5YR 3/3 暗褐色 2～3㎜のローム粒を20% 赤色スコリア粒を5% 炭化物粒を5%含む 粘性やや強 しまりやや弱
7 7.5YR 3/2 黒褐色 2～5cmのロームブロックを10% 炭化物粒を5% 赤色スコリア粒を5%含む 粘性・しまりやや強
8 10YR 4/6 褐色 砂質土主体 粘性やや強 しまりやや弱
9 7.5YR 3/2 黒褐色 1～2㎜の炭化物を5%含む 粘性やや強 しまりやや弱
10 5YR 3/3 暗赤褐色 2～5㎜の炭化物を30% 焼土ブロックを10%含む 粘性やや強 しまりやや弱
11 7.5YR 4/4 褐色 粘性やや強 しまりやや弱
12 7.5YR 3/3 暗褐色 赤色スコリア粒を5%含む 粘性やや弱 しまりやや強

40号墓壙



1 2.5YR 3/3 暗褐色 粘性・しまり普通
2 10YR 3/1 黒褐色 カワラケ入る 粘性・しまり普通
3 10R 3/1 暗赤灰色 炭化物・焼土粒少々入る 人骨片も微量混じる 粘性なし しまりややあり
4 10R 1.7/1 赤黒色 炭化物が多く入る 焼土も多く含む 粘性なし しまりややあり

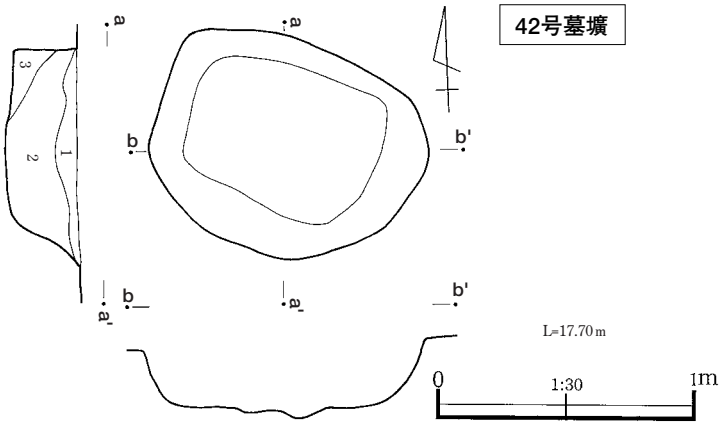
41号墓壙



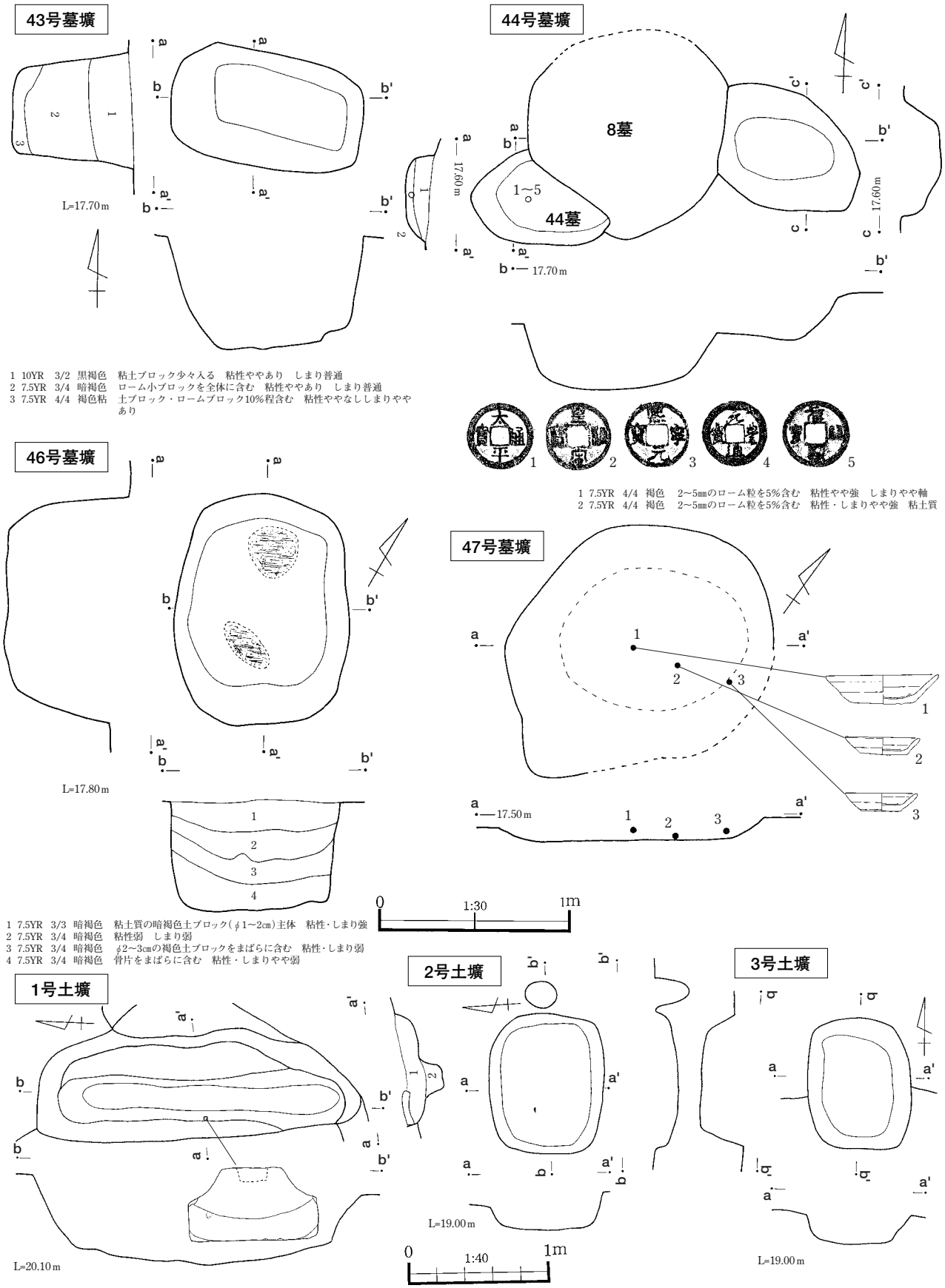
41墓
1 10YR 3/2 黒褐色 ローム小ブロック微量入る 粘性ややあり しまりややなし
2 7.5YR 3/4 暗褐色 粘土小ブロックを少々含む 粘性ややあり しまり普通
3 7.5YR 3/3 暗褐色 ロームブロックが全体に入る（20%位） 粘性ややあり しまり普通

42墓
1 7.5YR 3/4 暗褐色 粘性ややなし しまり普通
2 7.5YR 4/4 褐色 ロームブロックやや多く（60%位）入る 粘性やや弱 しまりややあり
3 7.5YR 3/3 暗褐色 黒褐色小ブロック5%程入る 粘性ややあり しまりやや弱

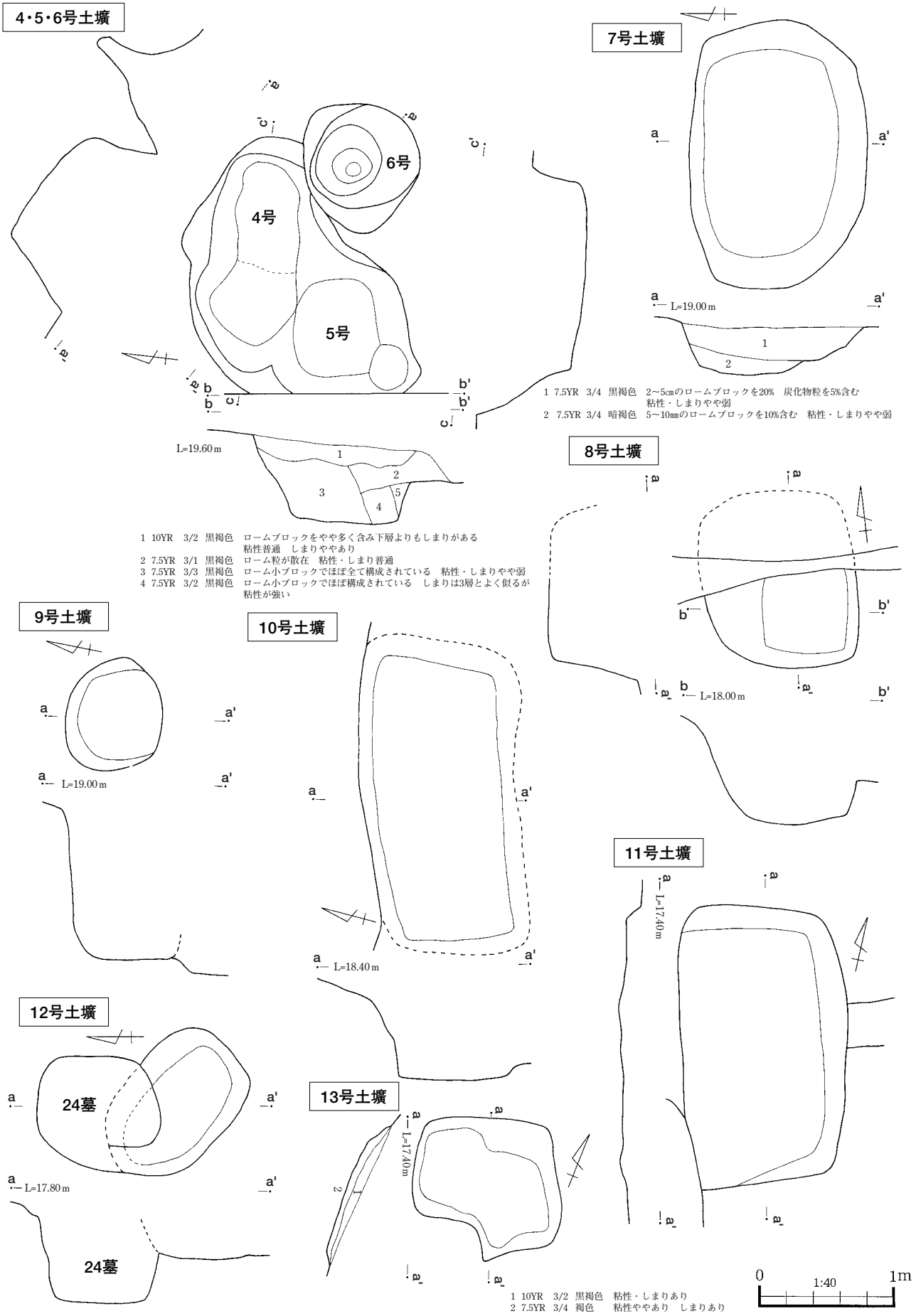
42号墓壙



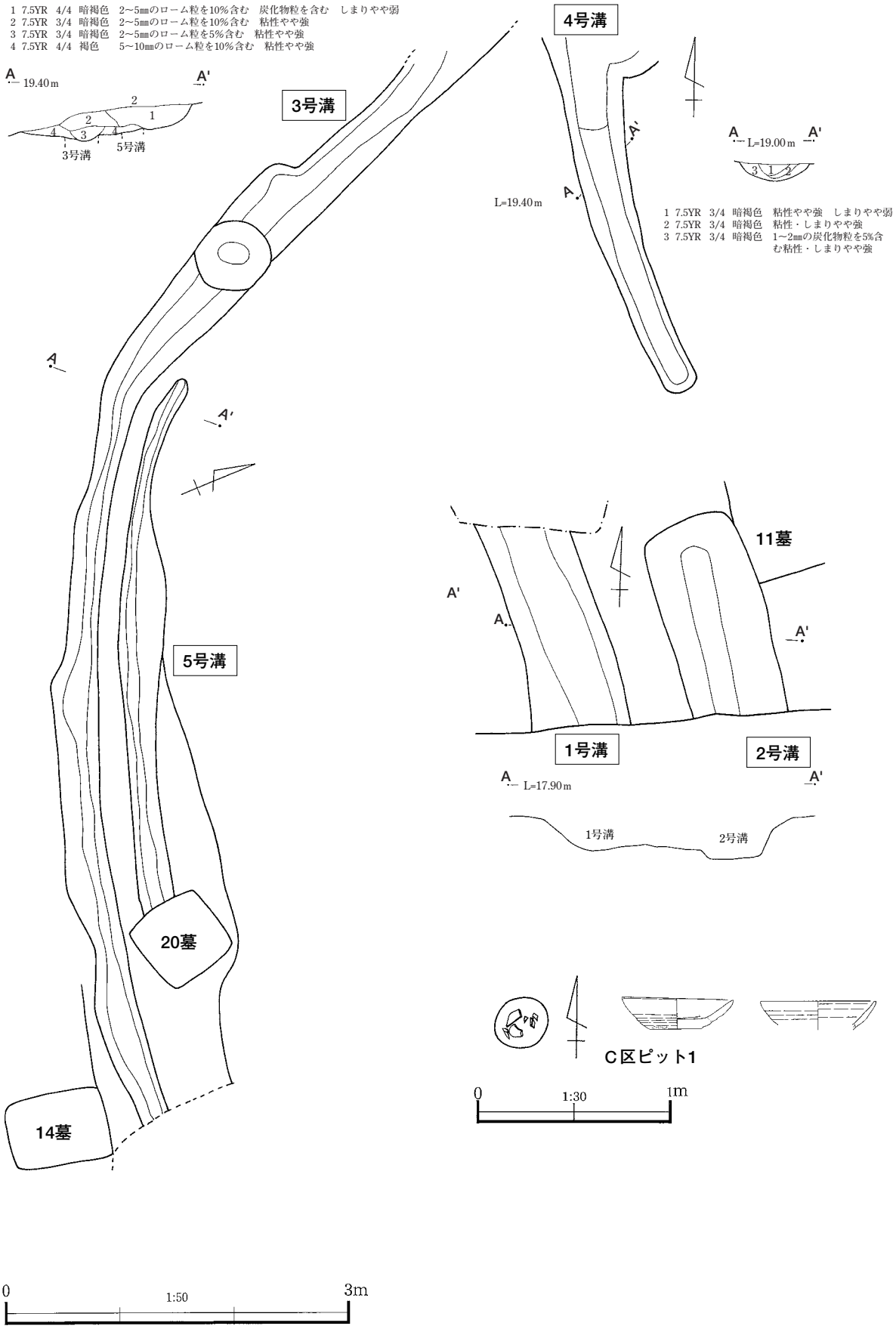
第12図 検出遺構 墓壙(6)－(36～42号)



第13図　検出遺構　墓壙(7)－(43・44・46・47号)・土壙(1)－(1～3号)



第14図 検出遺構 土壙(2)－(4～13号)



第15図　検出遺構　溝ー（１～５号）・ピット

第２表　墓壙一覧表

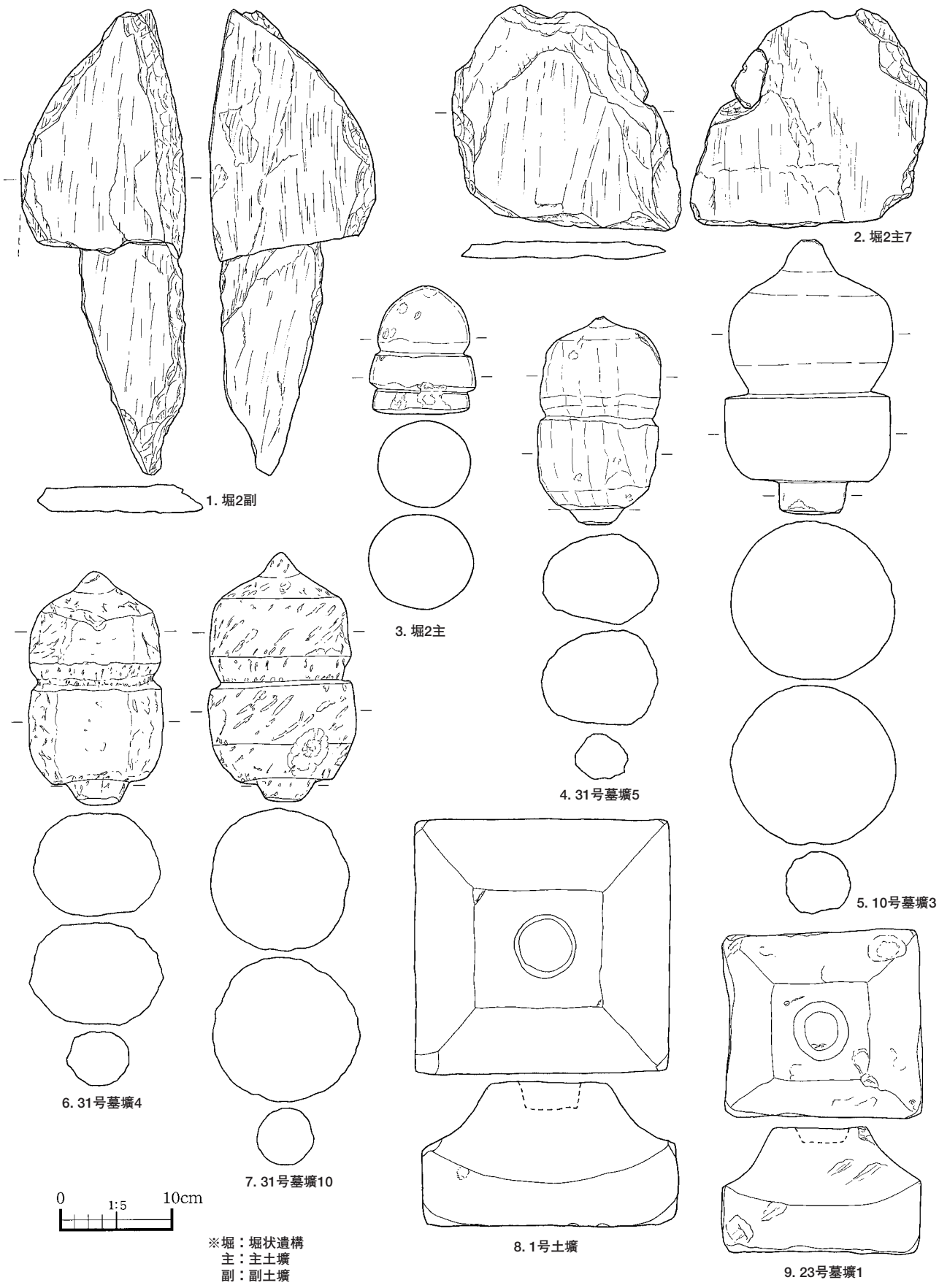
＊37号・38号・45号は欠番

No.	長軸×短軸×深さ	方　位	形　状	人　骨　の　状　態	出土遺物・備考
1	0.98×0.8×0.54	N－23°－W	隅丸方形	頭骨・歯他、頭北	銅銭６
2	0.95×0.62×0.21	N－0°	楕円形		銅銭６
3	1.0×0.8×0.35	N－0°	楕円形	骨粉（頭北）	凹地状遺構
4	1.0×0.75×0.45	N－18°－W	隅丸方形	歯	
5	0.78×0.6×0.15	N－20°－W	隅丸方形		
6	1.22×0.7×0.48	N－70°－W	楕円形	頭骨・歯	鉄片
7	1.18×0.92×0.4	N－28°－W	隅丸方形		五輪塔１
8	0.98×－×0.3	N－28°－W	隅丸方形	歯	
9	1.06×0.78×0.3	N－90°	隅丸方形	骨・歯、頭北	
10	1.37×0.92×0.67	N－0°	楕円形	骨・歯	五輪塔１・カワラケ２
11	1.32×0.92×0.27	N－0°	楕円形		
12	1.4×1.02×0.75	N－0°	楕円形	頭骨・歯、頭北	銅銭６
13	1.1×0.9×0.5	N－90°	隅丸方形	骨・歯	
14	0.96×0.72×0.42	N－0°	楕円形	骨・歯	
15	(1.15)×(1.05)×0.4	N－0°	隅丸方形	骨片少量	
16	1.0×0.6×0.3	N－0°	楕円形	火葬骨	炭
17	0.96×(0.75)×0.28	N－6°－E	楕円形	火葬骨	
18	1.68×0.8×0.23	N－0°	楕円形	火葬骨	炭
19	1.04×0.77×0.32	N－5°－E	隅丸方形	火葬骨　　確認調査Ｃ－002	炭・カワラケ１
20	1.13×0.85×0.32	N－0°	隅丸方形	頭骨・歯他、頭北	
21	1.0×0.78×0.45	N－0°	隅丸方形	骨・歯他、頭北	
22	(1.2)×0.7×0.5	N－23°－W	楕円形		
23	1.09×0.65×(0.58)	N－0°	楕円形	骨・歯、頭北、遺存状態やや良好	五輪塔４
24	0.9×0.85×0.55	N－0°	隅丸方形		石・銅銭６
25	0.88×0.83×－	N－0°	円形		
26	0.9×0.64×0.32	N－76°－E	楕円形	骨・歯他	
27	0.97×0.74×0.35	N－0°	楕円形	骨・歯他、頭北	
28	(1.0)×0.68×0.25	N－80°－E	楕円形	頭骨・歯他、頭東	
29	0.75×0.42×0.18	N－61°－E	楕円形		
30	1.2×－×0.2	N－0°	円形	火葬骨	炭
31	0.9×－×0.63	N－0°	円形	歯他、頭北、遺存状態やや良好	五輪塔10
32	1.06×0.9×0.77	N－73°－W	隅丸方形	歯．骨、頭西、遺存状態やや良好	五輪塔１・カワラケ３
33	1.0×8.3×0.08	N－20°－W	隅丸方形	歯・骨、頭北、遺存状態やや良好	銅銭３
34	0.82×－×0.18	N－0°	円形	火葬骨	炭
35	0.63×－×0.1	N－0°	円形	火葬骨	
36	0.9×0.63×0.43	N－90°	楕円形	火葬骨	炭・銅銭４・カワラケ３・常滑壺１
39	1.0×0.75×0.26	N－90°	楕円形	火葬骨	炭
40	1.27×0.75×0.23	N－90°	不正楕円形	火葬骨	カワラケ２
41	1.02×0.74×0.35	N－90°	隅丸方形		
42	1.06×0.83×0.27	N－70°－W	隅丸方形		
43	1.03×0.6×0.65	N－77°－W	楕円形	歯・骨	
44	－×0.62×0.13	N－63°－E	楕円形	頭骨・歯	銅銭５
46	1.23×0.93×0.59	N－29°－W	楕円形	骨	確認調査Ｃ－001
47	1.45×(1.26)×0.2	N－54°－E	不正円形		カワラケ３･確認調査

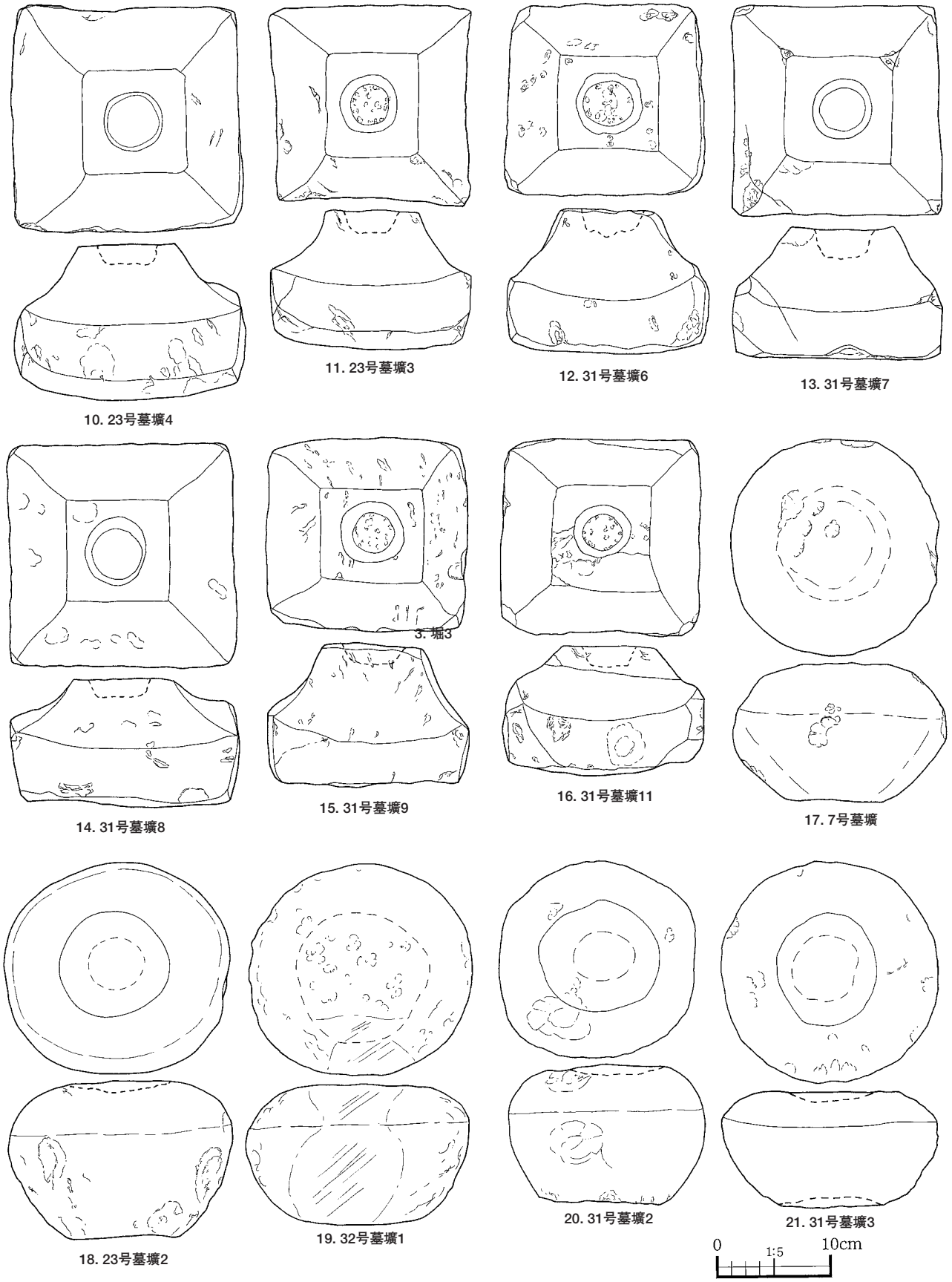
第３表　土壙一覧表

遺構番号	長軸×短軸×深さ	方　位	形　状	出土遺物	備　考
１号土壙	2.3×0.73×0.6	N－0°	長楕円形	五輪塔１	
２号土壙	1.5×1.2×0.37	N－90°	隅丸方形		東側ピット深さ0.25
３号土壙	1.42×1.1×0.47	N－0°	隅丸方形		
４号土壙	1.85×(1.0)×0.65	N－90°	楕円形		
５号土壙	1.04×(1.0)×0.57	N－9°－W	楕円形		
６号土壙	0.95×0.88×0.78	N－57°－E	円形		
７号土壙	2.0×1.33×0.34	N－90	楕円形		
８号土壙	(1.32)×1.13×0.62	N－5°－E	隅丸方形		
９号土壙	0.82×0.72×1.1	N－82°－E	円形		
10号土壙	(2.3)×(1.15)×0.6	N－73°－E	長方形		
11号土壙	2.07×(1.25)×0.14	N－13°－W	楕円形		
12号土壙	1.12×0.8×0.26	N－49°－W	楕円形		
13号土壙	1.08×1.04×0.13	N－70°－E	不正方形		

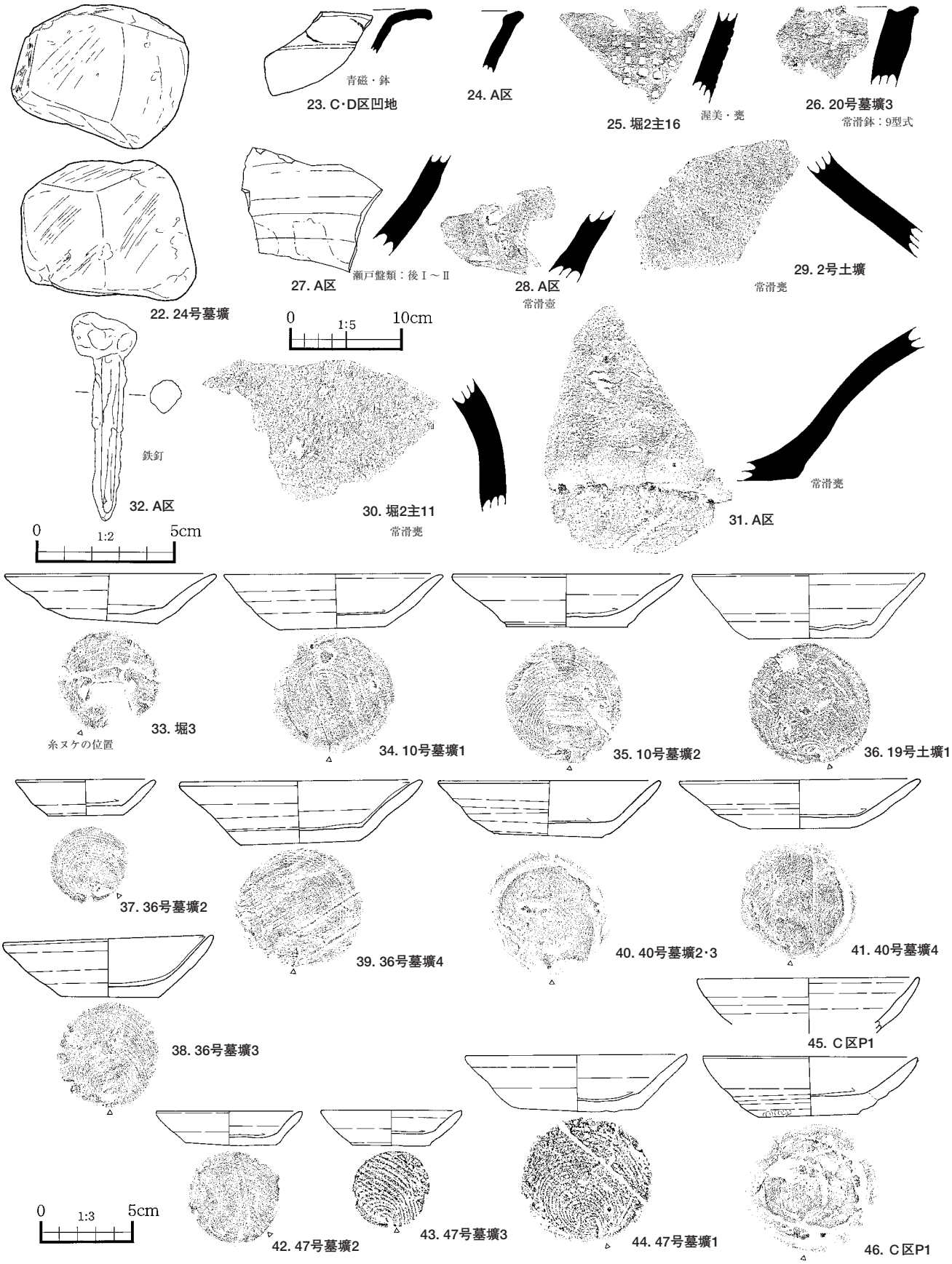
※単位：m



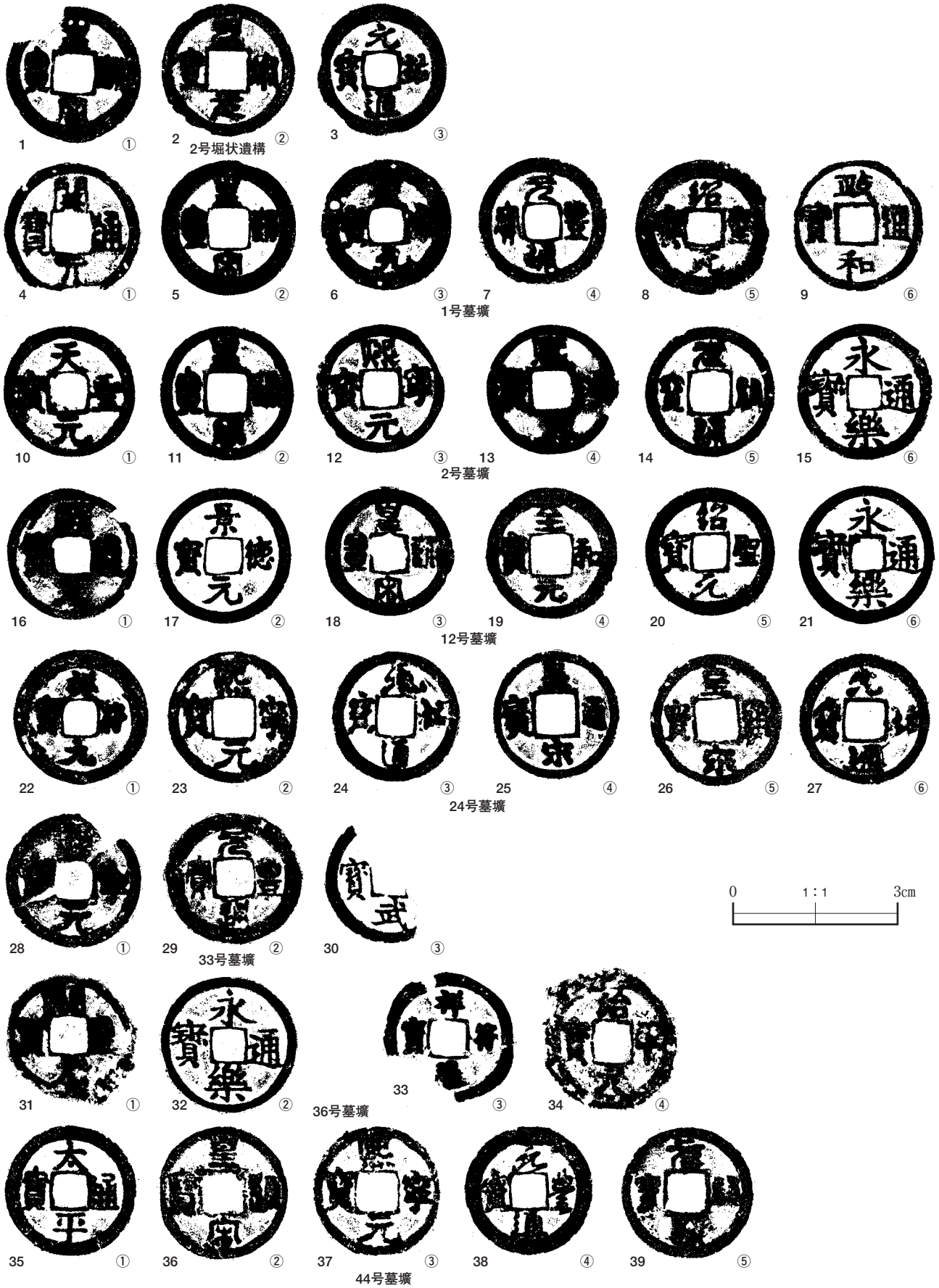
第16図　出土遺物　石塔類（１）



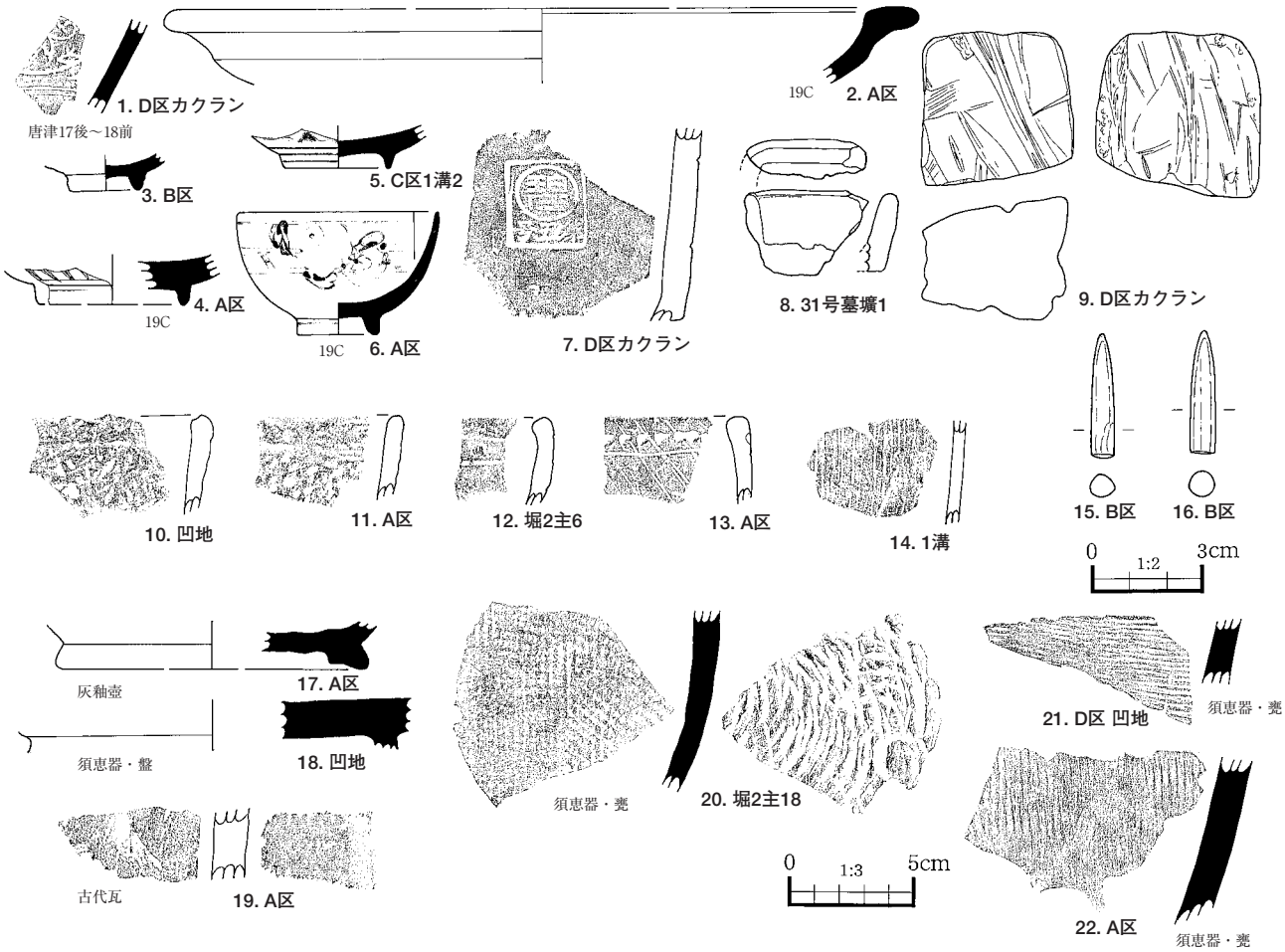
第17図　出土遺物　石塔類(2)



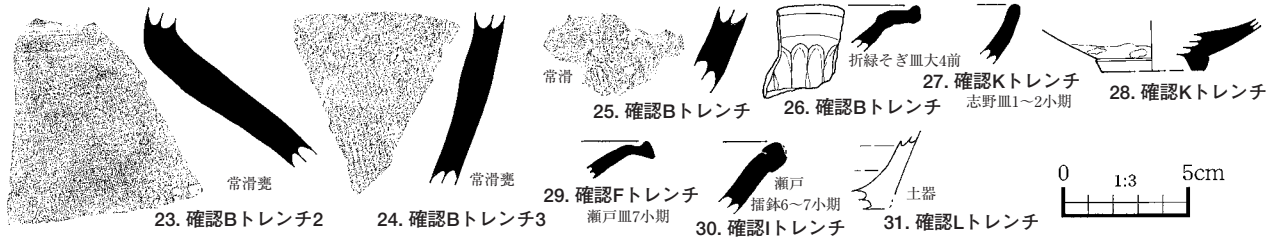
第18図　出土遺物　中世陶磁器・カワラケ他


1 ①
2 ②
2号堀状遺構
3 ③
4 ①
5 ②
6 ③
7 ④
8 ⑤
9 ⑥
1号墓壙
10 ①
11 ②
12 ③
13 ④
14 ⑤
15 ⑥
2号墓壙
16 ①
17 ②
18 ③
19 ④
20 ⑤
21 ⑥
12号墓壙
22 ①
23 ②
24 ③
25 ④
26 ⑤
27 ⑥
24号墓壙
28 ①
29 ②
33号墓壙
30 ③
0 1：1 3cm
31 ①
32 ②
36号墓壙
33 ③
34 ④
35 ①
36 ②
37 ③
38 ④
39 ⑤
44号墓壙

第19図　出土遺物　銅銭



確認調査の遺物



第20図　出土遺物　近世陶磁器・古代土器・確認調査遺物他

第４表　出土銭一覧表

No	銭　種	出　土　位　置	重量	No	銭　種	出　土　位　置	重量
1	皇宋通宝	２号堀状遺構１	2.5	21	永楽通宝	12号墓壙６	3.2
2	熙寧元宝	〃　２	3.5	22	祥符元宝	24号墓壙１	3.4
3	元祐通宝	〃　３	2.6	23	熙寧元宝	〃　２	2.8
4	開元通宝	１号墓壙１	2.8	24	元祐通宝	〃　３	2.6
5	皇宋通宝	〃　２	3.0	25	皇宋通宝	〃　４	2.4
6	熙寧元宝	〃　３	3.6	26	皇宋通宝	〃　５	2.1
7	元豊通宝	〃　４	2.9	27	元祐通宝	〃　６	2.3
8	紹聖元宝	〃　５	3.5	28	熙寧元宝	33号墓壙１	1.6
9	政和通宝	〃　６	2.4	29	元豊通宝	〃　２	3.2
10	天聖元宝	２号墓壙１	2.3	30	洪武通宝	〃　３	0.8
11	皇宋通宝	〃　２	3.7	31	開元通宝	36号墓壙１	1.7
12	熙寧元宝	〃　３	2.3	32	永楽通宝	〃　２	2.7
13	熙寧元宝	〃　４	4.4	33	祥符通宝	〃　３	1.6
14	元祐通宝	〃　５	2.8	34	治平元宝	〃　４	2.5
15	永楽通宝	〃　６	5.3	35	太平通宝	44号墓壙１	2.6
16	開元通宝	12号墓壙１	3.0	36	皇宋通宝	〃　２	3.2
17	景徳元宝	〃　２	3.6	37	熙寧元宝	〃　３	3.0
18	皇宋通宝	〃　３	2.7	38	元豊通宝	〃　４	3.7
19	至和元宝	〃　４	2.6	39	元祐通宝	〃　５	3.7
20	紹聖元宝	〃　５	4.7				

単位：ｇ

第５表　出土銭集計表

銭　種	初鋳年	点数
開元通宝	唐　621	3
太平通宝	北宋　976	1
景徳元宝	北宋1004	1
祥符通宝	北宋1009	1
祥符元宝	北宋1009	1
天聖元宝	北宋1023	1
皇宋通宝	北宋1038	7
至和元宝	北宋1054	1
治平元宝	北宋1064	1
熙寧元宝	北宋1068	7
元豊通宝	北宋1078	3
元祐通宝	北宋1086	5
紹聖元宝	北宋1094	2
政和通宝	北宋1111	1
洪武通宝	明　1368	1
永楽通宝	明　1408	3
合　計		39

第６表　石塔類一覧表

番号	遺物番号	種　　別	大　　き　　さ　　(cm)	石　材	備　　考
1	２号堀状遺構	板碑	① 42.0　② 14.9　③　2.5	緑泥片岩	２点接合・副土壙
2	２号堀状遺構	〃	① 19.5　② 18.5　③　1.4	緑泥片岩	主土壙
3	２号堀状遺構	宝篋印塔相輪	①　8.4　②　8.4　③　9.7	砂岩	先端部片・主土壙
4	31号墓壙5	五輪塔空風輪	① 18.7　② 10.6　③ 10.7　④　4.7	安山岩	
5	10号墓壙3	〃	① 24.3　② 14.7　③ 15.1　④　5.7	砂岩	
6	31号墓壙4	〃	① 21.0　② 10.4　③ 12.0　④　5.5	安山岩	
7	31号墓壙10	〃	① 22.0　② 12.3　③ 13.2　④　5.0	安山岩	
8	１号土壙	五輪塔火輪	① 23.0　② 22.9　③ 11.6　④ 10.5　⑤　5.6　⑥ 13.2	安山岩	
9	23号墓壙1	〃	① 16.6　② 17.2　③　8.8　④　8.6　⑤　4.7　⑥ 11.1	安山岩	
10	23号墓壙4	〃	① 19.9　② 20.1　③　9.2　④　9.1　⑤　5.2　⑥ 13.7	安山岩	
11	23号墓壙3	〃	① 16.9　② 16.8　③　9.2　④　8.2　⑤　5.2　⑥ 12.3	安山岩	
12	31号墓壙6	〃	① 17.3　② 16.9　③　9.0　④　8.3　⑤　5.4　⑥ 12.7	安山岩	
13	31号墓壙7	〃	① 18.7　② 18.1　③　9.4　④　9.5　⑤　5.0　⑥ 11.4	安山岩	
14	31号墓壙8	〃	① 20.0　② 19.5　③　9.3　④　9.0　⑤　6.0　⑥ 11.3	安山岩	
15	31号墓壙9	〃	① 17.9　② 16.9　③　8.2　④　9.2　⑤　5.7　⑥ 12.9	安山岩	
16	31号墓壙11	〃	① 17.1　② 17.3　③　9.4　④　8.7　⑤　4.7　⑥ 11.5	安山岩	
17	７号墓壙	五輪塔水輪	① 19.2　② 18.5　③ 12.0	安山岩	
18	23号墓壙2	〃	① 18.7　② 19.9　③ 13.7	安山岩	
19	32号墓壙1	〃	① 18.5　② 19.7　③ 12.5	安山岩	
20	31号墓壙2	〃	① 17.5　② 17.2　③ 12.3	安山岩	
21	31号墓壙3	〃	① 19.5　② 19.2　③ 10.3	安山岩	
22	24号墓壙	自然石	① 13.9　② 16.0　③ 12.5	安山岩	一部摩滅

第７表　カワラケ計測表

番号	遺物番号	法量①口径②底径③器高	胎　　土	調　　整	備　　考
33	２号堀状遺構主土壙	① 11.5　②　5.2　③　2.9	暗褐色,長石･骨針･石英含む	底部右回転糸切り	ほぼ完形
34	10号墓壙1	① 11.8　②　5.7　③　3.1	明褐色,長石･骨針･石英含む	見込みナデ３回，底部右回転糸切り・圧痕有り	2/3
35	10号墓壙2	① 12.3　②　6.5　③　3.2	黄褐色,長石･骨針･石英含む	見込み弱いナデ，底部右回転糸切り・圧痕有り	ほぼ完形
36	19号土壙1	① 12.7　②　6.6　③　3.5	黄褐色,長石･骨針･石英少し含む	見込み全面弱いナデ，底部右回転糸切り，体部弱く外反	完形，確認Ｅトレｃ−2･1
37	36号墓壙2	①　7.6　②　4.1　③　2.0	赤褐色～暗赤褐色,長石･骨針･石英少し含む	見込み弱いナデ，底部右回転糸切り・切りっぱなし	ほぼ完形
38	36号墓壙3	① 11.4　②　5.3　③　3.4	黄褐色,長石･骨針･石英少し含む	見込み１回口縁部までナデ上げ，底部右回転糸切り・切りっぱなし，外底取り上げ指頭痕有り	完形
39	36号墓壙4	① 13.1　②　6.8　③　3.5	同上	見込みナデ強め１回口縁部までナデ上げ，底部右回転糸切り・圧痕有り，体部弱く外反，外底取り上げ指頭痕有り	完形
40	40号墓壙2･3	① 12.0　②　5.4　③　3.2	同上	見込みナデ１回，底部右回転糸切り，体部ロクロ目強め	ほぼ完形
41	40号墓壙4	① 13.0　②　5.5　③　2.6	同上	見込みナデ,底部右回転糸切り･圧痕有り	1/2
42	47号墓壙2	①　7.9　②　4.9　③　1.9	黄褐色,長石･骨針･石英･赤褐色の混和材含む。	見込み全面弱いナデ，底部右回転糸切りか，体部弱く外反	完形 確認Ｆトレ２
43	47号墓壙3	①　7.7　②　4.2　③　1.9	黄褐色,長石･骨針･石英少し含む	見込み全面弱いナデ，底部右回転糸切り・圧痕有り	ほぼ完形 確認Ｆトレ３
44	47号墓壙1	① 12.0　②　6.4　③　3.1	42と同じ	見込み弱いナデ，底部右回転糸切り，体部弱く外反	完形
45	C区P-1	① 12.0　②　−　③　3.8	黄褐色,長石･骨針･石英少し含む	口縁部内湾段ナデ	1/4
46	C区P-1	① 11.6　②　5.2　③　3	黄褐色,長石･骨針･石英少し含む	見込みやや強いナデ，底部切り離し不明	4/5 焼きムラ有り

５．付編(1)　猪鼻城跡中世墓壙の炭化材樹種同定

植　田　弥　生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

ここでは，千葉市中央区亥鼻３丁目に所在する猪鼻城跡の公園整備に関わる発掘調査時に出土した墓壙の炭化材樹種同定結果を報告する。墓壙は出土遺物などから15世紀の遺構と考えられ，炭化材は火葬時の薪と推定されるものである。炭化材樹種を明らかにすることは，当時の葬送に関わる燃料材樹種の選択性を知る資料のひとつとなる。

２．試料と方法

炭化材は，同一物として取上げた試料中でも異なる樹種の破片が含まれている場合があるので，複数の破片を観察し確認する必要がある。先ず，炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で観察し，分類群のおおよその目安をつけ，複数のタイプが含まれる場合はタイプ分けを行う。次に典型試料や確認を要する試料を，走査電子顕微鏡で材組織を拡大して観察し同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は，３断面を５㎜角以下の大きさに整え，直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し，その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後，金蒸着を施し，走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。同一試料から複数の樹種が検出されたものは，各分類群ごとにチャック袋に分けた。

３．結果

各遺構の同定結果を，表１に示した。

炭化材樹種　36号墓壙から検出された分類群は，イヌシデ節･クリ･ケヤキ･サクラ属･イヌエンジュ･ミズキ属の落葉広葉樹６分類群と，タケ亜科であった（炭化材の位置は本文第12図参照）。36号墓壙ではすべての試料から，イヌシデ節かサクラ属，またはイヌシデ節とサクラ属が共に検出されたことから，この２種が主要な燃料材として使用されたと推測される。39号墓壙･16号墓壙およびＥトレンチの炭化材は，ケヤキであった。なお，39号墓壙からもタケ亜科がケヤキと共に検出された。タケ亜科と同定されたものは，稈（茎）の太さ･形状や横断面組織の特徴などから，笹類ではなく竹類である。検出された樹種は，当時周辺地に生育していたと予想される。なお燃料材として有用であり，当遺跡の立地環境からも入手容易と思われるクヌギやコナラの材は，まったく検出されなかった。

炭化材の形状　樹種に関わらず，炭化材は比較的大きな破片が多数取上げられていた。破片の大きさは，放射方向の径が３～５㎝のものが多く，直径10㎝前後またはそれ以上の太さの材が使用されていたようである。分枝した部位や，直径1.5～2.5㎝の細い丸木も含まれていたことから，大木ではない木の全体か，または木の第二～第三枝以降の部位から伐採して，燃料材としたのではないかと類推される。また，どの樹種の年輪幅も３㎜前後で，通常または成長の良い方ではないかと思われた。荒く切られた斜めの切削痕が，ほとんどの樹種において複数の破片から観察された。このことから，炭化材は墓に関わる構造材の可能性は少なく，燃料材として伐採して利用されたと考えてよいと思われる。ただし，36号と39号から検出されたタケ亜科（いわゆる竹）は，火力や燃焼持続性などの点から，燃料材以外の役割があった可能性が残る。

材組織記載

(1) クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus* sect. *Eucarpinus*　カバノキ科　図版１　1a－1c（36号墓壙Ａ）

放射組織が集合する部分と２～数個の小型の管孔が放射方向に複合し散在する部分がある放射孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在，穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性，１～３細胞幅，道

管との壁孔の孔口はやや大きく開いている。

(2) クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版１　2a－2b（36号墓壙Ｇ）

年輪の始めに大型の管孔が数層配列し除々に径を減じてゆき，晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状，穿孔は単一である。放射組織は単列同性のみで，道管との壁孔は孔口が大きく交互状や柵状である。

(3) ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科　図版１　4a－4c（39号墓壙）

年輪の始めに大型の管孔が１～２層配列し，その後は多数の小型や非常に小型の管孔が塊状に集合し接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状，穿孔は単一，小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性，１～５細胞幅の紡錘形，上下端や縁に大型の結晶細胞がある。

(4) サクラ属　*Prunus*　バラ科　図版２　5a－5c（36号墓壙Ｆ）

小型の管孔が放射方向・接線方向・斜状に複合して分布し，年輪始めは接線方向に１層が並ぶ傾向が見られた散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状，穿孔は単一，内腔にやや不規則に走行するらせん肥厚がある。放射組織は同性に近い異性，１～５細胞幅である。

(5) イヌエンジュ　*Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. subsp. *buergeri* (Maxim.) Kitamura　マメ科　図版２　6a－6c（36号墓壙Ｇ）

年輪の始めに大型の管孔が配列し徐々に径を減じ，晩材部では非常に小型から極めて小型の管孔が塊状や集合帯となる環孔材。周囲状・帯状の柔組織が顕著で，接線断面では層階状を示す。道管の壁孔は交互状，穿孔は単一，小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は異性，１～３細胞幅である。

(6) ミズキ　*Cornus controversa* Hemsl.　ミズキ科　図版２　7a－7c（36号墓壙Ｃ）

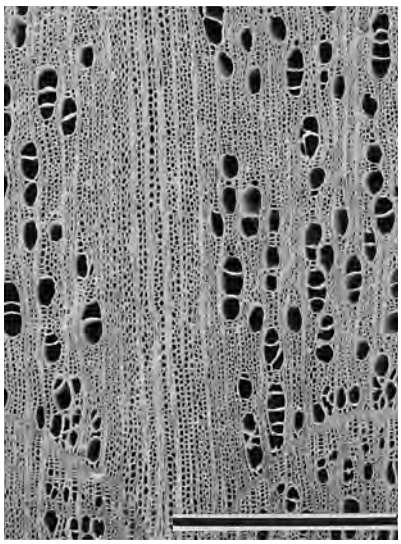
小型の管孔が単独または２～３個が複合して均一に分布し，年輪界は波うっている散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状，穿孔は横棒数が20本以上の階段穿孔である。放射組織は異性，１～４細胞幅，多列部は平伏細胞からなりその上下端に方形・直立細胞がある。

(7) タケ亜科　Gramineae subfam. Bambusoideae　イネ科　図版１　3（36号墓壙Ｃ）

最大破片の厚みは約６㎜で幅は約2.5㎝，節は明瞭，稈の中心部は中空，硬質の稈の破片である維管束は不整中心柱，多数が同心円状に均質に配置し，稈の外周に位置する維管束鞘は特に厚く発達し，厚壁の繊維細胞だけの塊も島状に密在し，稈を堅く支持している様子がわかる。稈が太く，維管束鞘が非常に発達している事から，竹類の稈である。

表１　猪鼻城跡の墓壙出土炭化材樹種同定結果

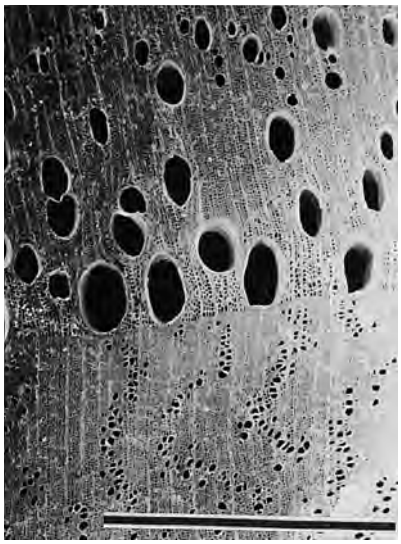
遺　構	試　料	検　出　樹　種
36号墓壙	A	イヌシデ節
36号墓壙	B	イヌシデ節
36号墓壙	C	サクラ属≧イヌシデ節＞ミズキ属＞タケ亜科
36号墓壙	D	イヌシデ節
36号墓壙	E	サクラ属
36号墓壙	F	サクラ属≧イヌシデ節
36号墓壙	G	イヌシデ節＞クリ＞サクラ属＞ミズキ属≧イヌエンジュ
36号墓壙	H	イヌシデ節≧サクラ属＞クリ
36号墓壙	Ｉその１	サクラ属≫イヌエンジュ
36号墓壙	Ｉその２	サクラ属
39号墓壙	一括採取	ケヤキ≫タケ亜科
16号墓壙		ケヤキ
Ｅトレンチ	Ｃ－002	ケヤキ



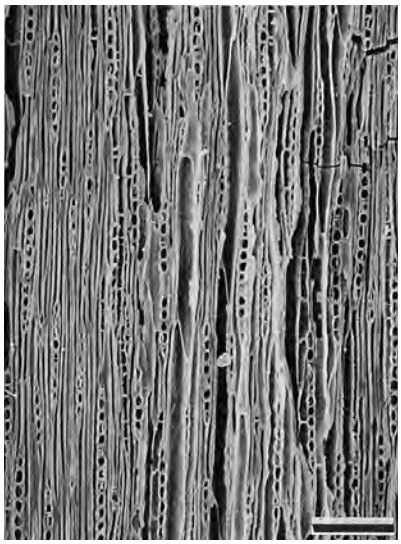
1a　イヌシデ節（横断面）
36号墓壙Ａ　bar:0.5㎜

1b　イヌシデ節（接線断面）
36号墓壙Ａ　bar:0.1㎜

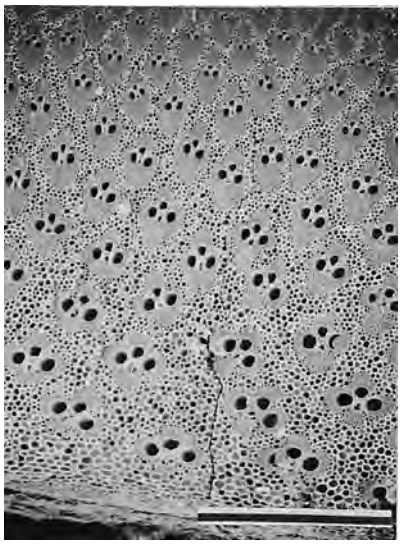
1c　イヌシデ節（放射断面）
36号墓壙Ａ　bar:0.1㎜



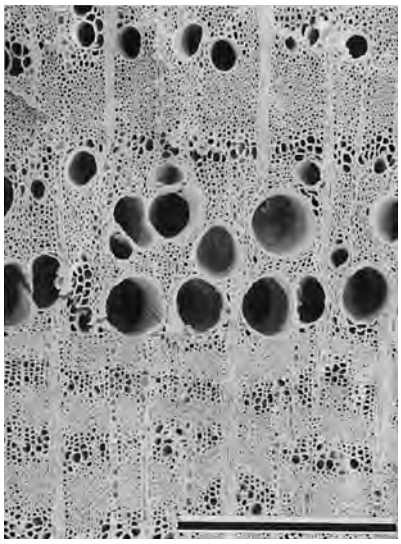
2a　クリ（横断面）
36号墓壙Ｇ　bar:1.0㎜



2b　クリ（接線断面）
36号墓壙Ｇ　bar:0.1㎜

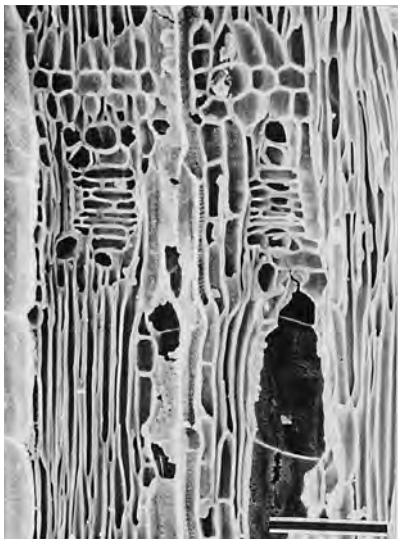


3　タケ亜科（竹類　横断面）
36号墓壙Ｃ　bar:1.0㎜



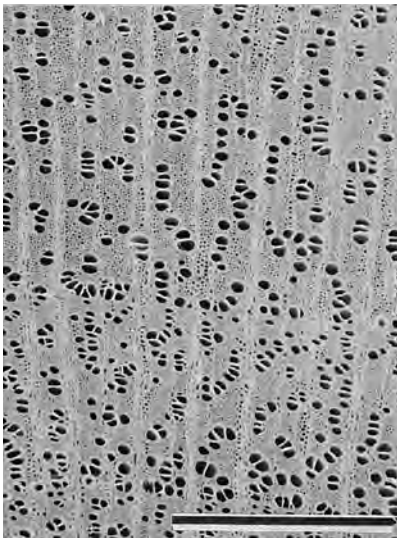
4a　ケヤキ（横断面）
39号墓壙　bar:0.5㎜

4b　ケヤキ（接線断面）
39号墓壙　bar:0.1㎜



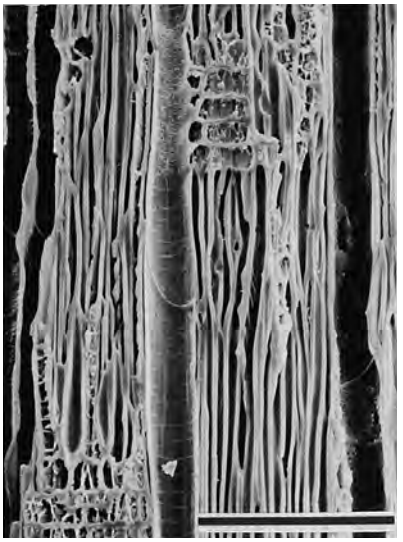
4c　ケヤキ（放射断面）
39号墓壙　bar:0.1㎜

図版１　猪鼻城跡の墓壙出土炭化材樹種

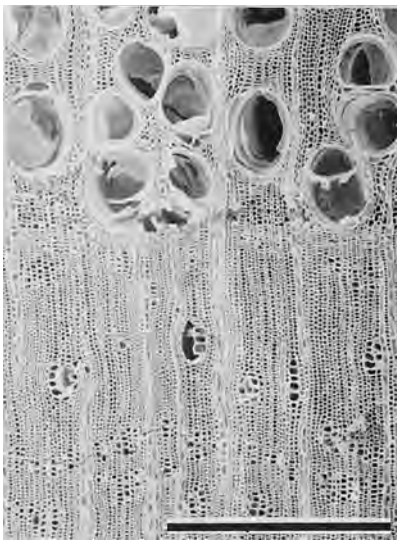


5a　サクラ属（横断面）
36号墓壙Ｆ　bar:0.5㎜

5b　サクラ属（接線断面）
36号墓壙Ｆ　bar:0.1㎜



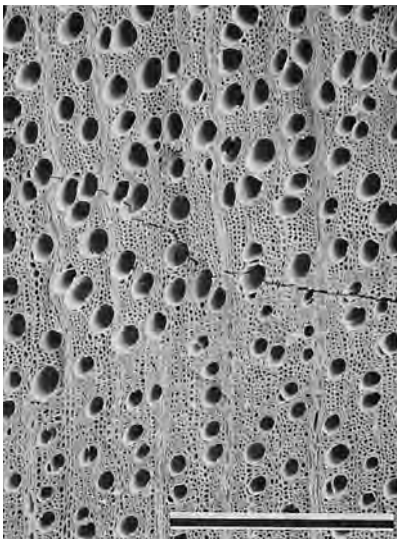
5c　サクラ属（放射断面）
36号墓壙Ｆ　bar:0.1㎜



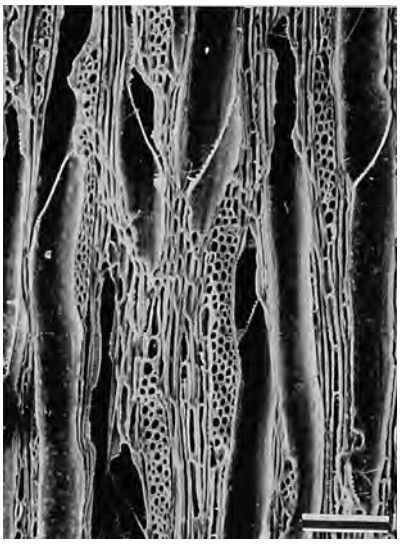
6a　イヌエンジュ（横断面）
36号墓壙Ｇ　bar:0.5㎜

6b　イヌエンジュ（接線断面）
36号墓壙Ｇ　bar:0.1㎜

6c　イヌエンジュ（放射断面）
36号墓壙Ｇ　bar:0.1㎜



7a　ミズキ属（横断面）
36号墓壙Ｃ　bar:0.5㎜



7b　ミズキ属（接線断面）
36号墓壙Ｃ　bar:0.1㎜

7c　ミズキ属（放射断面）
36号墓壙Ｃ　bar:0.1㎜

図版２　猪鼻城跡の墓壙出土炭化材樹種

６．付編(2)　猪鼻城跡土塁中出土の蔵骨器群について

今回，亥鼻３丁目の発掘調査の成果を報告するにあたり，埋蔵文化財センター所蔵の過去の調査の出土遺物も再検討を行った。さらに昭和48年に主郭土塁中から出土した蔵骨器他の千葉市立郷土博物館蔵の資料についても検討する機会を得た。そのうち２点の蔵骨器は郷土博物館に常設展示されているが，同時に出土したその他の土器・陶器類は一部紹介されているのみである（簗瀬1998)。特に破片となっていた性格不明の１個体分の陶器については，これまでまったく注目されることがなかったが，今回，接合・復元を行い，詳細に検討し，山本信夫氏にご教示いただいた結果，中国製の褐釉四耳壺であることが確認された。このような遺物が出土していたということは，この地域の歴史理解にとって重要な知見である。これまで正式な報告がないこれらの昭和48年の出土遺物について，ここに掲載することとした。今回確定した出土遺物は，古瀬戸灰釉四耳壺１点，常滑壺１点，褐釉四耳壺１点，常滑甕胴部片１点，蔵骨器蓋３点である。この他，３点の蔵骨器に内蔵されていた火葬骨については，３丁目公園地点の人骨と共に鑑定を依頼した（付編(3)参照)。

１．出土状況

昭和48年（1973）11月に主郭の南側の土塁上に無線受信塔を設置するために，直径１ｍ程度の穴を掘削したところ，地下約1.1ｍのところから蔵骨器が出土した。取り上げられたのは完形品２点と破片資料などだが，もう一点常滑窯製の蔵骨器（6b型式相当）が横穴状の空間に存在することが確認されたが，これは取り上げずに埋め戻された。取り上げられたほぼ完形の２点の蔵骨器にはいずれも八分目ほどの火葬骨が入っており，カワラケの小皿を蓋としていたという。当初，不明確だった蓋と本体の組み合わせは，今回蔵骨器内の火葬骨中からカワラケの破片が回収されたため，その組み合わせが確定できた。

２．出土遺物（第21図）

１・２はカワラケの小皿で，１が１号蔵骨器，２が３号蔵骨器の蓋として使われていたものである。２点とも大きさや製作技法・胎土など非常に共通性の高いもので，同じ産地のものと思われる。底部には右回転の糸切り痕が確認でき，内面には横ナデは加えられない。口縁部を斜め上方に立ち上げ，やや口唇が薄く作り出される。２は口縁の屈曲がやや強く，こちらの方が古いタイプとなるかもしれない。３は，２号蔵骨器の蓋である。土師質土器の底部で，胎土は古代の土師器と類似性が強い。右回転の糸切りにより底部が切り離されている。これらの蔵骨器の蓋はいずれも壺の口径よりも大きさが小さく，落とし蓋として使われていたものである。４は古瀬戸の灰釉四耳壺である。瀬戸の編年では前期様式Ⅱｂ期（13世紀前半）に比定される。５は褐釉四耳壺で，12世紀代に製作されたもので（山本・山村1997)，中国南部浙江省付近が生産地という。太宰府の分類では，耳壺（四耳壺）Ｖ類に相当する（太宰府市教育委員会2000)。内外面に釉薬がかけられているが，焼成が良くないため内面などは発色が悪い。体部下部には，焼成時の白っぽい粘土による目跡がみられる。底部は内側を削り込んだ高台になっている。口縁のつくりや四耳のある肩の沈線も簡略化が認められ，また全体のフォルムもシャープさが失われつつあるので，同じタイプの四耳壺のなかでは少し新しいものとなる。この蔵骨器は火熱を受けているが，割れ口との関係から破片となってから火を受けたことが確認できる。このため，この蔵骨器は本来の埋納場所から動かされている可能性がある。火葬骨も量的に少ない。６は常滑窯の壺で常滑の編年では，6a型式（13世紀第３四半期）に比定される。なお，内蔵されていた火葬骨は，鑑定の結果，成人女性のものであることが明らかになっている。７の常滑甕は，接合してひとつの大きな破片となったものである。

３．蔵骨器中の混貝土について

保存されていた蔵骨器中の火葬骨は，一部の砂を除くとローム層の小ブロックが少し含まれている以外は，ほぼ火葬骨のみからなり，埋没中の土砂の流入がほとんどない状態で埋納されていたことが推定できる。蔵骨器の上部を覆うか蓋をしていたものと思われるが，供伴したカワラケはいずれも口径より小さく，土砂流入を防ぐ役にはたたないので，伴出した常滑甕の破片が蔵骨器の上部を覆っていた可能性もあろう。火葬骨を仕分けていった結果，蔵骨器内にはハマグリや巻貝などの貝殻と若干の砂が含まれていることが確認できた点も重要な所見である。当初，周辺の土壌の混入であろうと考えていたが，成田層中の自然貝層に由来すると思われる貝殻が，周辺の状況から自然に蔵骨器内に混入する状況は想定できない。蔵骨器には意図的に土砂を加える作法があるとされるので（『吉事次第』『吉事略儀』群書類従雑部所収，福山1983），猪鼻城跡の蔵骨器の土砂も意図的に納入されたものであろう。しかし，これが上述の文献にみえる土砂加入の作法の事例に相当するのかは，もう少し他の資料の検討が必要である。

４．蔵骨器群の歴史的意義

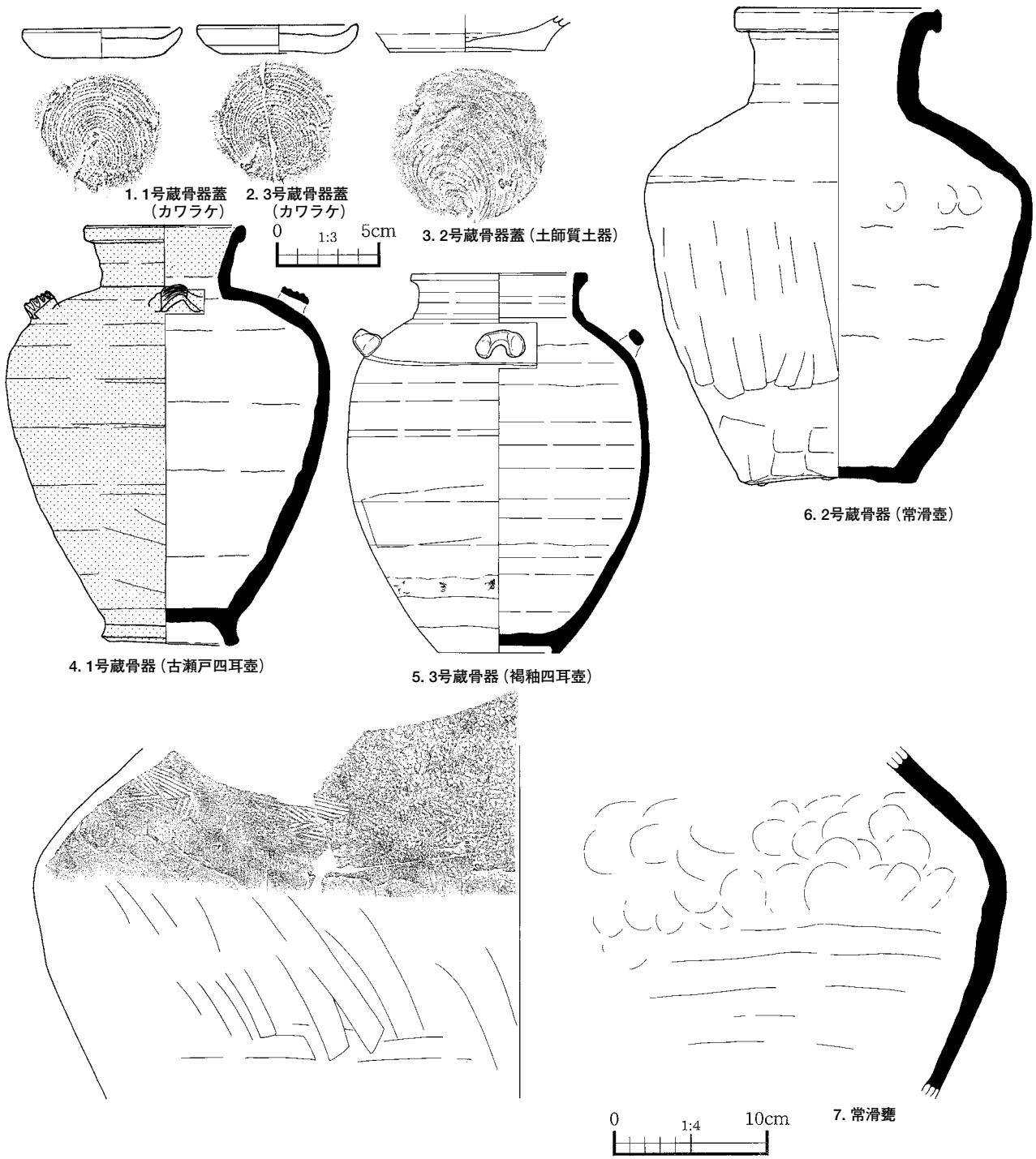
猪鼻城跡の蔵骨器については，従来より千葉氏との関連が推定されていたが，今回確認された褐釉四耳壺の存在により，猪鼻城跡の墓地は，千葉氏のものである可能性がさらに高くなった。特に褐釉四耳壺はその希少性からみて，そうしたものを手に入れる機会があったのは，この地の領主千葉氏以外には考えにくい(注)。褐釉四耳壺がどのような経緯で千葉に招来されたのかは不明であるが，おそらく中央との繋がりがあった千葉氏が，その地位により手に入れたものであろう。したがって，ここの墓は千葉氏のものとみて大過あるまい。

『千葉大系図』によれば，千葉常胤は正治３年（1201）３月24日に83才で卒し，「下総国千葉山」に葬られたという。それを千葉市稲毛区園生町の長者山とする説もあり，大日寺にあった千葉氏歴代の墓といわれる五輪塔群についても園生町または萩台町から移されたものともされるが，そこは千葉氏の本拠堀内から離れすぎていると思われる。素直に考えるなら，『千葉大系図』でいう千葉山とは猪鼻山のことであった可能性が高く，千葉氏の墓は，千葉氏の本拠を見下ろす猪鼻の地がふさわしいといえよう。

３点の蔵骨器は，製作された時期がそれぞれ３号：12世紀，１号：13世紀前半，２号：13世紀後半であり，製作時期は一定ではない。しかし，１号と３号の蔵骨器は，蓋に使われていたカワラケの小皿はほぼ同時期のもので，13世紀の前半の埋納とみることができる。２号はそれらよりやや新しくなるが，それでも13世紀の中頃に埋められたとみてよい。つまりこれらの蔵骨器が埋納されたのは，鎌倉幕府創設からさほど時間的へだたりのない千葉氏の最盛期ともいえる時期に対応する。当時の千葉氏に関連する遺物は，現在千葉にはほとんど残されていない状況にあって，千葉氏との関連が推定されるこの蔵骨器群は非常に貴重なものといえる。１号と２号蔵骨器は既に平成13年６月20日付けで千葉市文化財に指定されているが，今回確定したすべての遺物を一括して指定がなされるべきであろう。

（注）　現在，千葉県内で中世前半期の褐釉壺の出土例としては，千葉市黒ハギ遺跡（未報告）・光町笹本城跡（道澤2000），鋸南町下ノ坊遺跡Ｂ地点（高梨他1990），成田市小管天神台Ｉ遺跡（小牧他1998）があげられる。

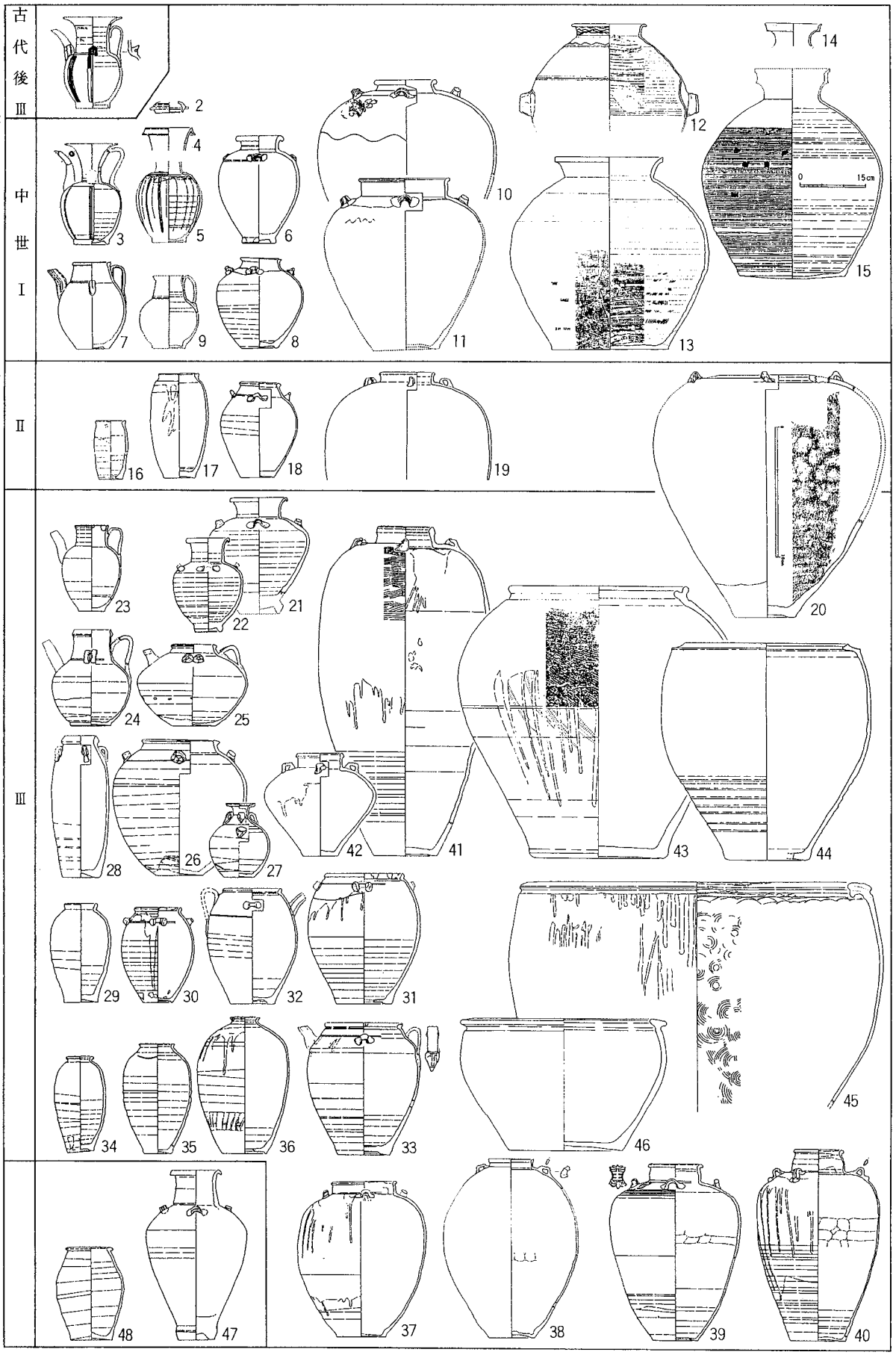
道澤　明　2000『笹本城跡・城山遺跡－ひかり工業団地内埋蔵文化財調査報告２－』（財）東総文化財センター
高梨　俊夫他　1990『下ノ坊遺跡Ｂ地点発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター
小牧美知枝他　1998『成田ビューカントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター



第21図　猪鼻城跡土塁中出土蔵骨器他

表１　土塁中出土蔵骨器関連遺物観察表

番号	種　別	大きさ(cm)	焼成・胎土等	備　考
1	カワラケ	口径7.8,底径5.4,高さ1.3	焼成やや良・明褐色胎土・やや緻密	１号蔵骨器蓋・底部右回転糸切り・２と大きさ・胎土・形態がほぼ同じ
2	カワラケ	口径7.8,底径5.4,高さ1.3	焼成やや良・明褐色胎土・やや緻密	３号蔵骨器蓋・底部右回転糸切り
3	土師質土器	口径−,底径7.5,高さ(1.7)	焼成やや良・明褐色胎土	２号蔵骨器蓋・底部右回転糸切り・見込み少しへこむ・碗形の土器か。
4	古瀬戸四耳壺	口径10.6,底径9.1,高さ27.4,最大径21.1	灰釉	完形品・古瀬戸前Ⅱb期（13世紀前葉）
5	褐釉四耳壺	口径11.3,底径8.0,高さ24.7,最大径19.5	明茶褐色・茶褐色～暗緑色釉・胴部下部に目跡	全面施釉。内面にも施釉しているが，焼成不良のため，ガラス化せず。遺存率約60%。底部削り出し高台。破損後に火熱を受けている。中国南部産（12世紀）
6	常滑壺	口径13.5,底径11.6,高さ31.0,最大径25.3		完形品・６a型式（13世紀第３四半期）
7	常滑甕	口径−,底径−,高さ(23.4),最大径63.6	灰褐色	胴部片・７点破片接合・肩に押印文・体部縦方向ハケ目



No.8（福岡県京都郡勝山町松田経塚）が猪鼻城跡3号蔵骨器と同タイプ

第22図　貿易陶磁・貯蔵具編年図（山本・山村1997より）

７．付編(3)　猪鼻城跡出土の人骨について

松　村　博　文（札幌医科大学）
山　上　実　紀（　同　　上　）

千葉市中央区１丁目に位置する猪鼻城跡の主郭土塁中から中世初期の蔵骨器と，亥鼻３丁目公園地点の墓壙群から15世紀の人骨が検出された。人類学的所見を記す。人骨の保存状態は，火葬骨は骨片化しており，墓壙の人骨も良好ではなく，歯のみしか検出されていないものがほとんどであった。比較的多くの人骨部位あるいは歯種が残存するものについては，図版１を掲載した。年齢表記は，青年（15－20歳），壮年（20－40歳）熟年（40－60歳）に概ね相当する。

性別判定は，残存する歯種が多い場合に限って，歯冠計測値を用いた判別分析によりおこなった。本墓壙人骨の歯冠計測値は表１に示した。性判別分析の基準資料として，性別が明らかになっている中世人のデータを用い，歯の遺存状態に応じて，次の２つの判別関数のいずれかを適用した。（MD歯冠近遠心径，BL歯冠頰舌径，Ｕ上顎，Ｌ下顎）

判別関数１：－1.5487×MD.LP2＋0.1466×MD.LM1－0.8155×MD.LM2
＋0.8794×BL.LP2＋0.2558×BL.LM1＋1.3307×BL.LM2－16.9958
（正答率80.2%）

判別関数２：1.5337×MD.UC＋1.2503×BL.UM2－1.0519（MD.UM2）
＋2.7234×BL.UP－0.7979×MD.UP1－17.0833　（正答率78.0%）

個々の所見の性別・年齢の推定結果は以下に記すとおりであるが，全体的な傾向として墓壙の人骨は熟年女性が多いという推定結果が得られた。

１号蔵骨器　壮年ないし熟年　性別不明

砕片となった火葬骨が検出されている。重量は1860ｇほどである。成人１体を高温で火葬した場合，およそ２kgになることが知られている。従ってこの蔵骨器には，ほぼ成人１体分の火葬骨が含まれているとみてよい。頭蓋片の主縫合に相当する部分には，縫合の癒合は認められない。椎骨にも加齢現象は認められないので，おそらく壮年ないし熟年の個体と推定される。性別は不明であった。

２号蔵骨器　成人　女性

火葬骨の重量は1880ｇほどであった。従ってこの蔵骨器にも，ほぼ成人１体分の火葬骨が含まれているとみてよい。寛骨大坐骨切痕部が残っており，切痕は大きく開いていることから女性のものとみられる。年齢は不明である。

３号蔵骨器　年齢・性別不明

火葬骨およそ200ｇが検出されている。頭蓋の破片も残存するが，年齢は不明。性別も明らかではない。

１号墓壙　熟年後半　女性

少量の頭蓋の細かな骨片と上腕骨の小さな破片のみ残存する。歯は以下の歯式に示される歯種が保存されている。

／７６５／／／／	／／／／／６７／
／／６５／／／／	／／／４５６７／

／：欠損

咬耗は２度強ないし３度である。従って年齢は熟年後半と推定される。両側の下顎第１大臼歯と第２大臼歯にカリエスが認められる。歯石はない。判別関数１により75.6%の確率で女性と判定された。

3号墓壙　年齢・性別不明

微小な骨片が微量に検出されている。部位は不明。

4号墓壙　壮年　男性

歯のみ残存する。

8 7 / / / / / /	/ / 3 / 5 6 7 8
8 7 6 5 / / / /	/ / / / 5 / / /

咬耗は1度強である。従って年齢は壮年と推定される。カリエスおよび歯石はない。判別関数1により76.6%の確率で男性と判定された。

6号墓壙

歯のみ残存する。

/ 7 6 5 4 3 / /	/ / / / 5 / / /
/ / / / / / / /	/ / / / / / / /

咬耗度は1度強である。従って年齢は壮年と推定される。カリエスおよび歯石はない。

8号墓壙　熟年後半　性別不明

歯のみ残存する。

/ / / / / / / 1	1 2 3 4 / / / 8
8 7 6 5 / / / 1	/ / / 4 5 6 7 /

咬耗は2度強である。従って年齢は熟年後半と推定される。左下顎第1大臼歯にカリエスが認められる。歯石はない。判別関数1により女性と判定されたが，確率は63.3%と低いため性別は保留する。

9号墓壙　熟年　女性

四肢骨の骨片少量と歯が残存するにすぎない。

/ 7 6 5 4 3 / /	/ / 3 4 / 6 7 /
8 7 / 5 4 / 2 /	/ 2 3 4 5 6 / /

咬耗は2度ほどである。従って年齢は熟年と推定される。両側の上顎および下顎第1大臼歯と第2大臼歯にカリエスが認められる。歯石はない。判別関数2により79.85%の確率で女性と判定された。

10号墓壙　壮年前半　性別不明

四肢骨の骨片少量と歯が残存するにすぎない。

/ 7 6 / 4 3 2 /	1 / 3 4 5 6 / /
/ / 6 / / / / /	/ / 3 4 5 6 / /

咬耗は1度である。従って年齢は壮年前半と推定される。カリエス，歯石はない。判別関数1により女性と判定されたが，確率は64.5%と低い。

12号墓壙　熟年　男性

右側頭骨の岩様部から顎関節にかけての部分，四肢骨の骨片が少量，ならびに歯が検出されている。

/ 7 6 5 4 / / /	/ / / / / / / 7 /
8 7 6 5 4 3 / /	/ / / 4 5 6 / /

咬耗は2度強ほどである。従って年齢は熟年と推定される。両側の上顎左第1大臼歯にカリエスが認められる。歯石はない。判別関数1により80.3%の確率で男性と判定された。

13号墓壙　熟年　性別不明

四肢骨の微小骨片がわずかと歯のみ残存する。

／／／／／／／／	／2／／／／7／
／／／／／／／／	／／／／／／7／

咬耗は２度である。従って年齢は熟年と推定される。左上顎第２大臼歯の咬合面にカリエスが認められる。歯石はない。

14号墓壙　熟年　性別不明

歯のみ検出されている。

／／／／／／／／	／2／／／／7／
／／／／／／／／	／／／／／／／／

咬耗度は２度である。従って年齢は熟年と推定される。カリエス，歯石はない。

15号墓壙　年齢・性別不明

部位不明の微小骨片が少量検出されている。

16号墓壙　年齢・性別不明

火葬骨となっている。検出されているのは四肢骨の骨片が200ｇほどである。

18号墓壙　年齢・性別不明

ごく微量の火葬骨骨片のみ残存する。

19号墓壙　年齢・性別不明

火葬骨となっている。検出されているのは四肢骨の骨片が170ｇほどである。

20号墓壙　熟年前半　男性？

微量の頭蓋の骨片ならびに左右不明の上腕骨骨体中央部のみ残存する。骨体は太く頑丈であり，男性のものと推定される。歯は以下の歯種が残存する。

8 7 6／4 3 2 1	1／／4 5 6 7／
／／6 5 4 3 2 1	／／3 4 5 6／／

咬耗は１度強ないし２度ほどである。従って年齢は熟年前半と推定される。左下顎第１大臼歯の遠心隣接面にカリエスが認められる。歯石はない。上顎中切歯は強度のシャベル型を呈する。判別関数２で女性と判定されたが，53.5％の確率でしかない。四肢骨が頑丈であることから男性の可能性のほうが大きい。

21号墓壙　成人　男性

左右不明の上腕骨骨体中央部およびその他の四肢骨破片のみ検出されている。上腕骨体は太く頑丈であり，男性のものと推定される。

23号墓壙　熟年後半　女性

頭蓋の比較的大きな断片と大腿骨近位端が良好に保存されている。頭蓋は右側頭骨が良く残っている。乳様突起は比較的小さく女性的である。大腿骨も華奢である。

／7 6 5 4 3 2 1	1 2 3／／／／／
8 7 6 5 4 3 2／	／／／／／／／／

咬耗は２度強である。従って年齢は熟年後半と推定される。カリエスおよび歯石はない。判別（関数１）の結果は63.2％の確率で女性であった。

26号墓壙　熟年前半　性別不明

頭蓋の骨片が微量に残存する。歯は以下の歯種が検出されている。

／７／／／／／／	１／３／５／７８
／／／／／／／／	／／／／／／／／

咬耗は２度弱である。従って年齢は熟年前半と推定される。カリエスおよび歯石はない。

27号墓壙　熟年後半　性別不明

砕片となった頭蓋および四肢骨の骨片が微量に残存する。歯は以下の歯種が検出されている。

／／／／／／１	／／／／５／／８
／７６５／／／／	／／／４５６／／

咬耗度は２強ないし３度である。従って年齢は熟年後半と推定される。カリエス，歯石はない。上顎中切歯のシャベルは強い。判別の結果（関数１）は男性であるが，確率は59.3％と低い。従って性別は保留すべきである。

28号墓壙　青年　性別不明

砕片となった頭蓋の骨片が微量と歯が残存する。

８７６５／３２１	１２３／５６７／
８／６５／／／／	／２３４５／７８

咬耗度は１度弱である。第３大臼歯は歯根が完成されていない。従って年齢は青年と推定される。カリエスおよび歯石は認められない。

30号墓壙　年齢・性別不明

ごく微量の火葬骨骨片のみ残存する。

31号墓壙　熟年　女性

頭蓋は比較的多くの部位が残存するが復元には至らなかった。前頭骨の右側が残存している。眉弓隆起は弱い。側頭骨乳様突起部も観察可能であったが，乳様突起は小さい。下顎骨は左側が良好に残存し，下顎体は小さく低い。上腕骨の骨体および大腿骨の後面の一部，その他部位不明の四肢骨の微小骨片が少量検出されている。上腕骨は華奢である。以上の所見から被葬者は女性とみてほぼまちがいない。歯は以下の歯種が検出されている。

８７６／／３２１	１２３４５６７／
８７６５４３２１	１２３４５６７８

咬耗は前歯が２度，後歯が３度強まで進行している。従って年齢は熟年と推定される。カリエスおよび歯石は認められない。判別関数１で74.6％の確率で女性と判定された。

32号墓壙　壮年後半　男性

大腿骨の一部および微小な四肢骨の骨片が少量検出されている。大腿骨骨体はさほど太くはない。ピラスターは中世人骨としては比較的良好に発達している。歯は以下の歯種が残存する。

８７６５４／／１	１２３４５６／／
８７６５／３２／	／２３４５６７８

咬耗度は１度強ないし２度弱ほどである。第３大臼歯の萌出を認める。年齢は壮年後半と推定される。カリエスおよび歯石はない。判別関数１で87.5％の確立で男性と判定された。

33号墓壙　青年　女性

頭蓋の骨片が少量と歯が残存する。頭蓋冠は薄い。下顎体は右オトガイ孔付近の破片のみ保存されている。オトガイは発達しているが，下顎体は比較的低く薄い。女性の可能性あり。四肢骨は砕片と

なっているが，大腿骨の骨体中央付近が比較的大きな断片として残存する。

／７６５４３２１	１２３４／／７／
／／６５４３２１	／／／４５６７／

咬耗度は１度弱ほどであり，第３大臼歯は未だ萌出していないことから，年齢は青年と推定される。右上顎第１大臼歯の咬合面にカリエスが認められる。歯石はない。上顎中切歯は中程度のシャベル型を呈する。判別関数１で93.9％の確率で女性と判定された。

34号墓壙　年齢・性別不明

ごく微量の火葬された四肢骨の骨片のみ残存する。

35号墓壙　年齢・性別不明

ごく微量の火葬された頭蓋の骨片のみ残存する。

36号墓壙　年齢・性別不明

火葬骨となっている。検出されているのは頭蓋と四肢骨の骨片が130ｇほどである。

39号墓壙　年齢・性別不明

火葬骨となっている。検出されているのは頭蓋と四肢骨の骨片が120ｇほどである。

43号墓壙　熟年前半　性別不明

歯のみ残存する。

／６５／／／／	／／／／／６／／
７／／／／／／／	／／／／５６／／

咬耗は１度強ないし２度ほどである。従って年齢は熟年前半と推定される。左下顎第１大臼歯の遠心隣接面にカリエスが認められる。歯石はない。

46号墓壙　熟年前半　女性

わずかな頭蓋の破片と上腕骨の骨片少量，ならびに以下の歯式に示す歯が検出されている。

８７／５４３２／	１／／４／／７／
／／６５４／２／	／２／４／６／／

咬耗は１度強ないし２度ほどである。従って年齢は熟年前半と推定される。カリエスおよび歯石はない。判別関数３で82.5％の確率で女性と判定された。

参考資料

１区370（1982年度調査区）　成人　女性

女性とみられる華奢な右脛骨が検出されている。

投光器トレンチ（1984年度調査区）シカ

シカの脛骨が検出されている。

千葉寺常滑壺蔵骨器（鎌倉時代）年齢・性別不明

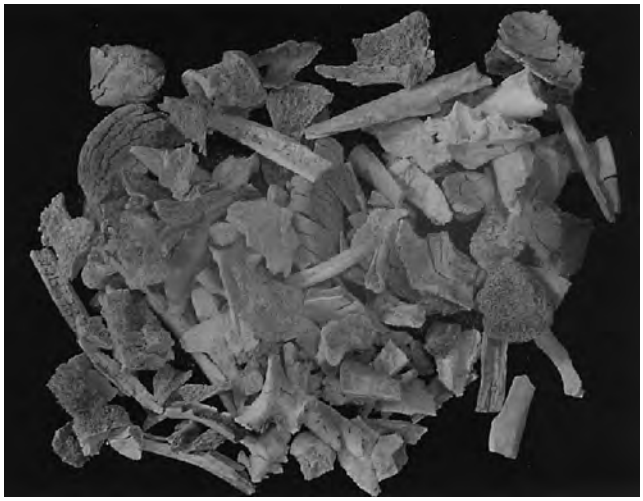
400ｇほどの火葬骨が検出されている。砕片となっており，性別，年齢は不明であった。

表１　墓壙出土人骨の歯冠計測値（mm）

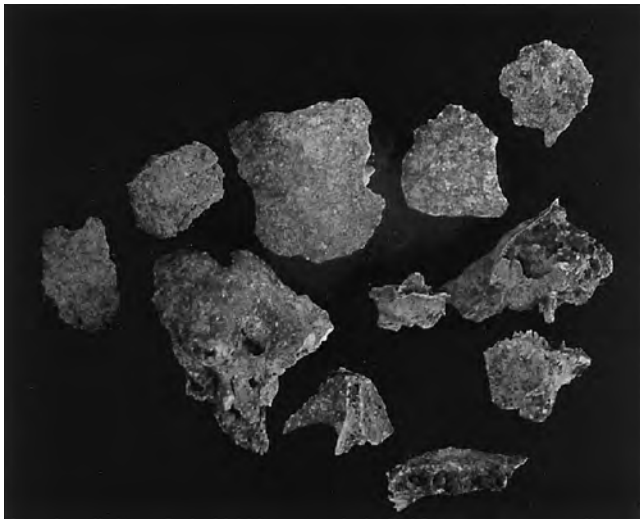
墓壙番号		1			4			6			8			9			10		
		Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL
上顎	中切歯										L	8.36	7.42				L	8.30	6.69
	側切歯										L	6.69	6.27				R	6.53	
	犬歯				L	7.63	7.09	R	8.37	8.03	L	7.47	7.97	L	7.84	8.06	R	7.34	7.85
	第1小臼歯							R	7.17	9.45	L	7.05		R	7.44	9.17	R		
	第2小臼歯	R	7.48	9.02	L	7.83	10.38	R	6.76	8.45				L	6.83	9.11	R	6.31	8.27
	第1大臼歯	L	10.35	12.53	L	10.93	12.19	R	9.89	11.23				L	10.33	11.56	R	10.39	11.12
	第2大臼歯	L	10.12	11.72	L	9.86	10.97	R	9.41	10.62				L	9.45	10.43	R	8.84	10.91
下顎	中切歯										R	5.47	5.35						
	側切歯													L	5.71	7.06			
	犬歯													L	6.59	7.32	L	6.57	7.55
	第1小臼歯	L	7.45	7.80							L	7.10	7.99	L	6.81	7.45	L	7.07	7.33
	第2小臼歯	L	7.68	8.58	R	7.71	8.44				L	6.82	8.19	L	7.04	8.40	L	6.92	8.09
	第1大臼歯	L	11.45	11.39	R	12.06	11.27				L	10.85	10.62	L		10.87	L	11.13	10.25
	第2大臼歯	L	10.82	9.84	R	10.89	10.81				L	10.96	10.17	R	10.18	9.70	L	10.81	10.06

墓壙番号		12			20			21			23			26			27		
		Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL
上顎	中切歯				R	9.39	7.52				R	8.83	7.35	L	8.14	7.18	R	7.24	
	側切歯				R	8.18	7.12				R	7.04	6.61						
	犬歯				R	7.67	8.46	L	7.23	8.47	R	8.04	8.63	L	7.40	8.05			
	第1小臼歯	R	6.96	8.67	R	7.96	9.90	L	7.22	9.55	R	7.48	9.47						
	第2小臼歯	R	7.14	9.37	L	7.43	9.75				R	6.55	9.11	L	6.62	8.74	L	6.88	9.18
	第1大臼歯	R	10.30	11.99	R	10.47	11.07	L	10.17	11.82	R	10.18	11.66						
	第2大臼歯	R	9.32	12.19	R	9.81	11.66				R	9.99	11.81	L	9.68	11.23			
下顎	中切歯				R	5.36	6.15												
	側切歯				R	6.53	6.72	L	6.46		R	5.95	6.33						
	犬歯	R	6.85	7.31	L	6.85	7.52	L	7.36		R	6.96	7.61						
	第1小臼歯	R	6.87	7.55	L	7.75	8.29	R	7.34	7.80	R	6.79	8.06				L	7.04	7.70
	第2小臼歯	R	6.90	8.12	L	7.42	8.48				R	7.29	8.75				R	7.11	8.23
	第1大臼歯	R	12.04	11.42	L	11.46	10.81				R	11.52	11.43				R	10.76	11.46
	第2大臼歯	R	11.17	10.36							R	11.91	10.81				R	9.87	10.25

墓壙番号		28			31			32			33			46		
		Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL	Side	MD	BL
上顎	中切歯	R	7.98	6.58	L	8.56	7.18	R	9.34		R	8.48	6.23	L	8.04	
	側切歯	R	6.21	6.07	L	6.86	6.43	L	6.98	7.10	R	6.91	5.94	R	6.66	6.02
	犬歯	R	7.10	7.53	L	8.13	8.46	L	8.49	9.46	R	8.14	7.60	R	7.42	8.22
	第1小臼歯				L	7.67	9.50	R	7.53	9.87	R	7.09	8.88	R	6.67	8.65
	第2小臼歯	R	6.48	8.12	L	7.22	9.26	R	7.21	9.85	R	6.36	7.97	R	6.63	8.85
	第1大臼歯	R	9.53	10.40	L	10.03	11.48	R	10.91	11.66	R	9.37	10.14			
	第2大臼歯	R	9.13	10.64	L	10.09	1.48	R	9.55	11.18	R	9.22	10.31	R	9.24	11.15
下顎	中切歯				R	5.18	5.72									
	側切歯	L	5.49	5.67	R	6.26	6.52	R	6.39					R	5.50	
	犬歯	L	6.33	7.01	R	7.79	8.16	R	7.61	8.56	R	6.93	6.83			
	第1小臼歯	L	6.29	6.86	R	7.83	8.39	L	7.45	8.24	R	6.72	6.75	R	6.49	7.42
	第2小臼歯	R	6.97	7.43	R	7.75	8.13	R	7.42	8.73	R	6.83	6.91	R	6.64	7.73
	第1大臼歯	R	10.71	9.93	R	10.98	10.58	R	11.97	11.49	R	10.41	9.88	R	11.29	11.62
	第2大臼歯	L	10.41		R	11.16	11.01	R	11.47	11.11	L	9.94	9.68			



2号蔵骨器



23号墓壙

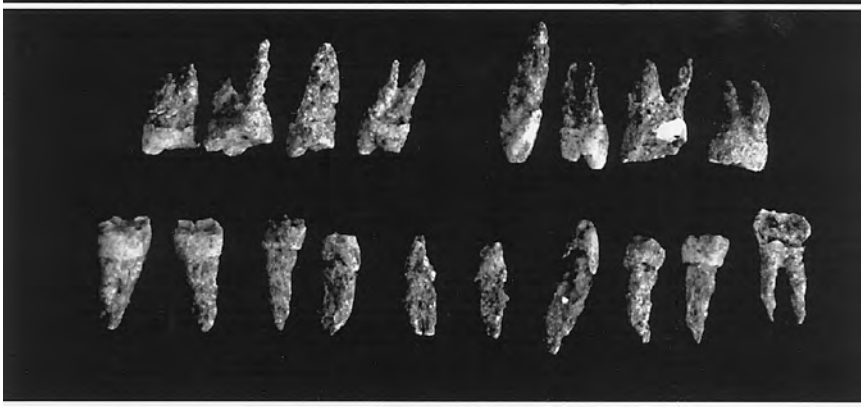
31号墓壙

図版１　猪鼻城跡出土人骨

1 号墓壙

4 号墓壙

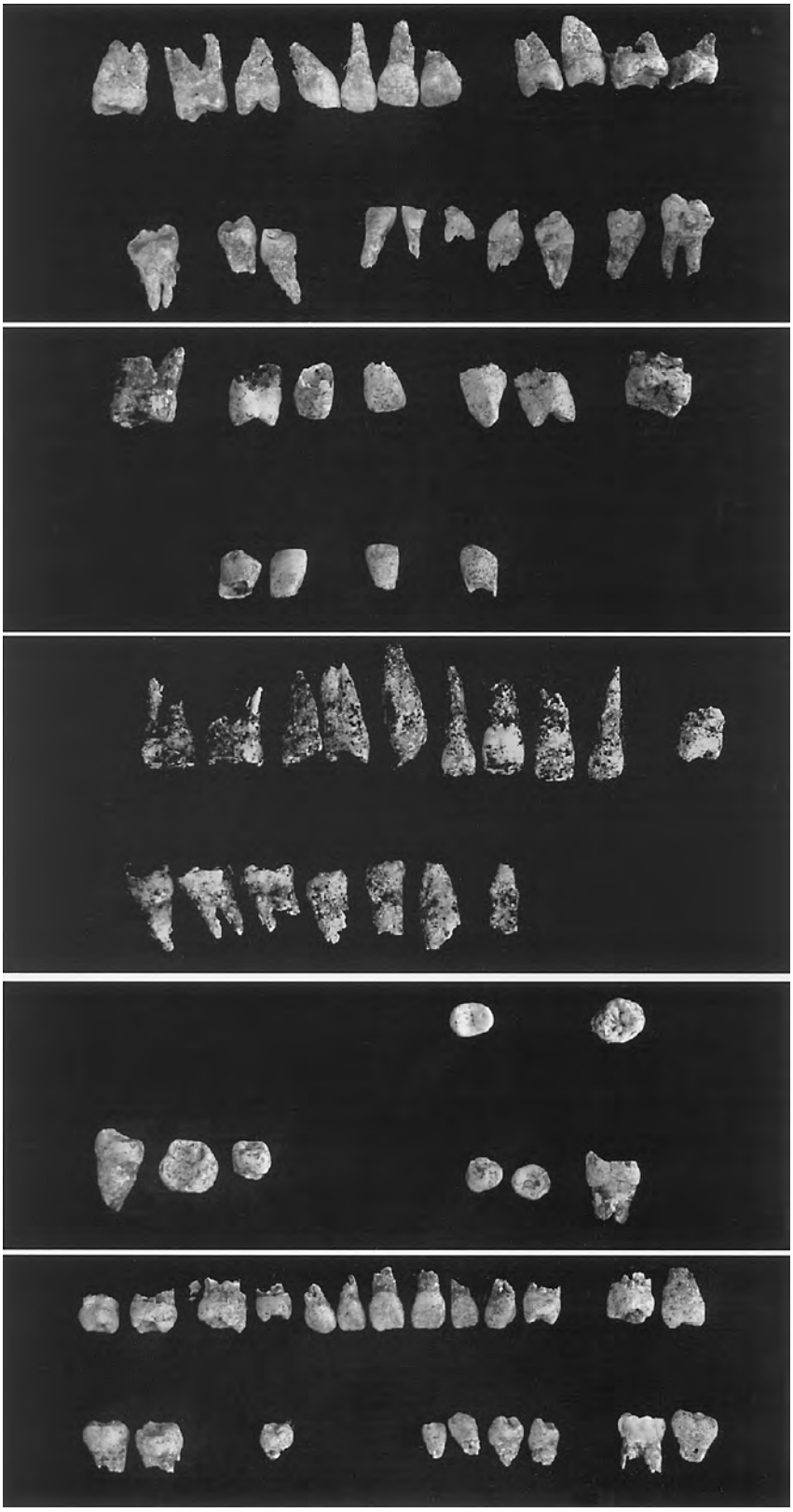
8 号墓壙



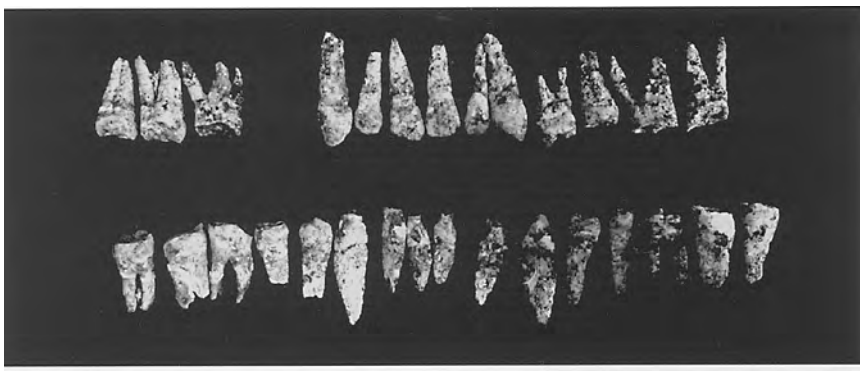
9 号墓壙

12号墓壙

図版 2　猪鼻城跡出土人骨（歯 1 ）



図版３　猪鼻城跡出土人骨（歯２）



31号墓壙

32号墓壙

33号墓壙

46号墓壙

図版４　猪鼻城跡出土人骨（歯３）

8．考　察　ー猪鼻城跡の調査成果についてー

1．堀状遺構について

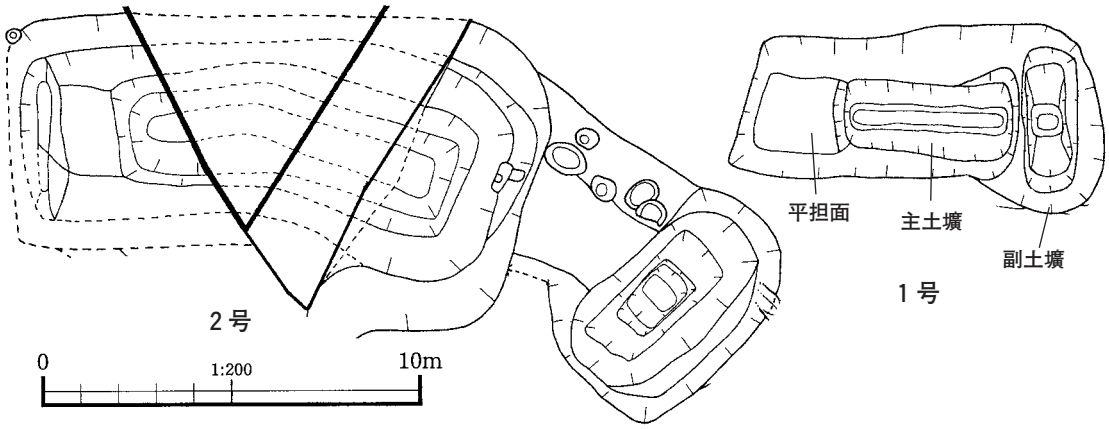
調査時点で堀としたものは，中世の城に伴う空堀ではなく，落とし穴のようなものであろうと考えるにいたった。その理由は次の通りである。

① 空堀とみた場合，その長さが短く，しかも１号と２号の間は大きな空間があり，防御施設としての用をなさない。

② １号と２号は規模は異なるが，全体としての構造に共通性が認められる。いずれも長大な土壙（主土壙）の片方に，それと直交する方向に別の土壙（副土壙）を配置している。１号では副土壙が主土壙に接しているのに対し，２号においては主土壙と副土壙の間に土橋状の部分があるが，これは規模の違いによるものであろう。さらに主土壙の片側には，一段テラス状の部分が作り出されていることも共通する。２号の方ではテラス部分はやや不明確にみえるが，１号では明瞭な平坦部分が作り出されており，これは通常の堀にはみられないものである。

③ 空堀なら掘り出した土で片側に土塁を築くことが多いが，埋土の所見では土塁が存在した痕跡は認められなかった。一部人為的な埋没土も存在するが，多くは自然埋没の黒色土であった。

決定的な根拠には欠ける面があるが，以上の点からこれらの堀状遺構は堀跡ではないと考えている。その機能は，現在，落とし穴（猪落とし・シシ穴）以外には想定できるものがないので，落とし穴をこの遺構の用途と考えておきたい。規模的にみれば，深さは落とし穴としては特に深いものとはいえないが，長さは相当に大きいといえる。しかし，成田市瓜生池遺跡NO.４では，長軸が10mにもなる大きな落とし穴が検出されており（斎木1985），配置は異なるものの落とし穴の中にはかなり大きなものもみられる。その時期は，墓跡よりは新しいことが調査により明らかになっており，15世紀の後半以降と考えられるが，遺構の底面近くから検出されたカワラケからみると16世紀までは下がらないと推定される。少なくともこの遺構は中世のものであることは確実で，それが落とし穴ということであれば，土壙を複数配して構成される中世の複合構造の落とし穴といえよう。



第23図　１号・２号堀状遺構

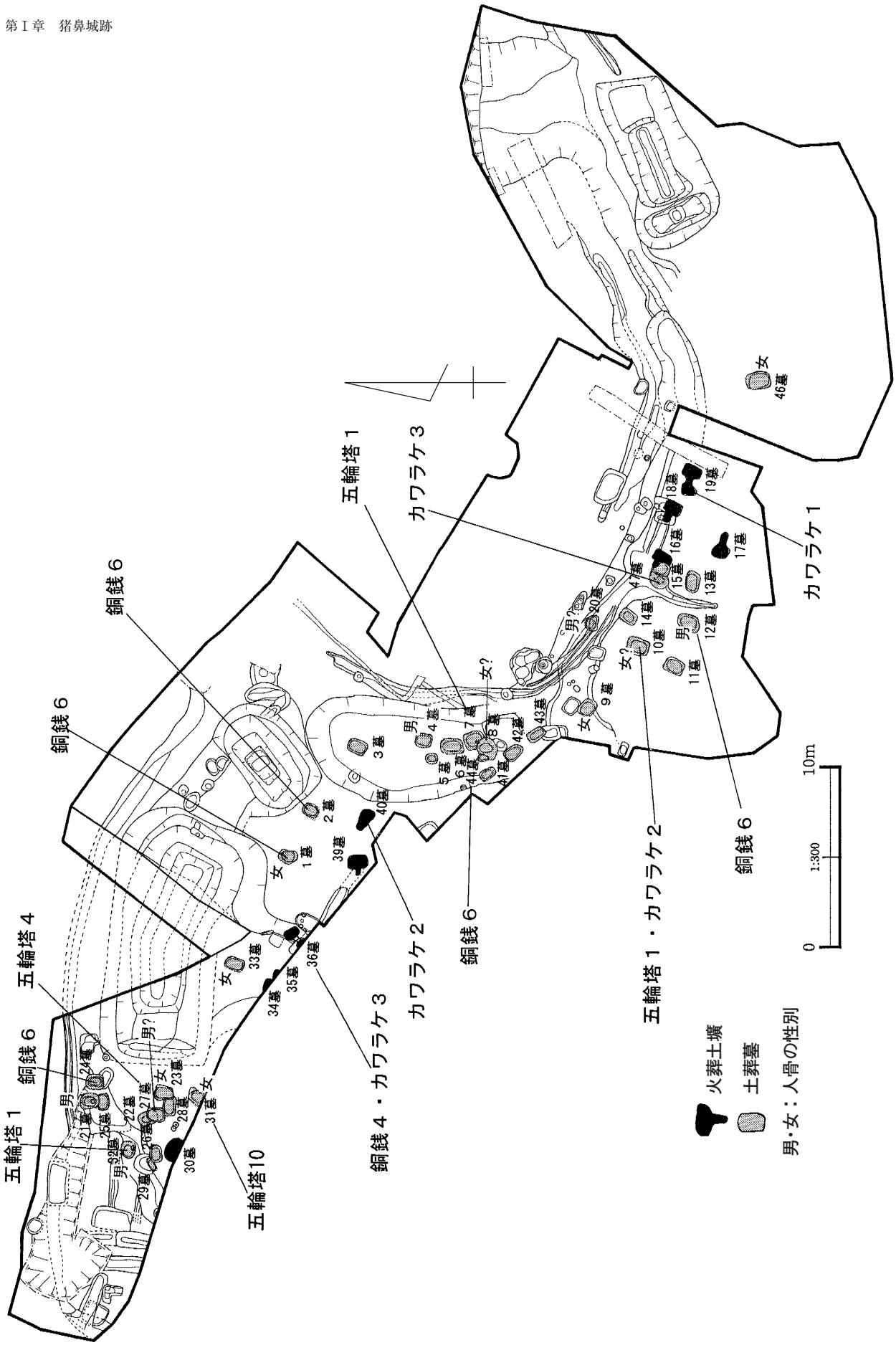
２．中世墓地について

今回の調査により検出された遺構は，堀状遺構を除くと，人骨の残らなかった墓壙と推定される土壙を含め，その主体は墓壙群であり，造成された平場に展開する墓地であったということになる。前述の堀状遺構との関係から，この墓跡は，15世紀以前のものである可能性が大きい。

この調査地点付近の土地利用について，明治９年の『千葉町反別帳』（和田1972）を参照すれば，調査区の地目は大部分が畑地であり，一部は東禅寺所有の山林も含まれる可能性がある。少なくともこの付近には東禅寺の所有地があり，調査地点も東禅寺にほど近い場所にある点からすれば（寺から東へ約100m），中世の墓地も東禅寺との関係を推定することも可能であろう。東禅寺は，猪鼻山の南麓の谷津（東禅寺作）にある曹洞宗寺院で，かつては臨済宗に属し，夢窓疎石像を蔵していたという（和田1984，千葉市教育委員会1992）。この寺は，千葉貞胤が嘉暦二年（1327）に建立したとされ，「県内中世彫刻の中でも抜群の作行」（千葉市教育委員会1992）とされる評価の高い本尊造薬師如来坐像を有している。この地点の調査成果を理解する手がかりとなるのが，かつて宗胤寺が所有していた元徳３年（1331）銘の東禅寺の鐘である。この鐘の銘文には，「滄海前陳…残山後接…」という一節がある（『千葉県史料』金石文篇１）。これは，前に東京湾を臨み，後ろに猪鼻山を背負った東禅寺の立地を，詩的に表現したものである。「残山」とは，「そこなわれて残っている山。戦乱の後に残っている山。亡国の山」（諸橋轍治『大漢和辞典』大修館）とされ，もし猪鼻に，千葉氏の館があったのであれば，このように表現しなかったであろう。このように猪鼻を「残山」と表現したことは，寂れた墓域のイメージに近いと思われる。ただし，ここの中世の墓地は，鐘にみえる元徳３年という時期には，３丁目公園地点の墓地はまだ形成されてはいなかったはずであり，直接関係はないかもしれない。猪鼻山はその全体が，中世千葉の墓域ないしは葬送の地であったと考えた方が適切で，時期によりその墓地も地点を変えたのであろう。付編(2)で取り上げた蔵骨器群が主郭土塁中から検出されており，文化会館建設の時には，人骨が沢山出たというし，千葉市立郷土博物館周辺の発掘調査でも人骨の検出をみている点も，墓域としての猪鼻山の性格を示すものといえよう。主郭付近では，発掘調査により五輪塔も検出されており，七天王塚の一部にも五輪塔の残欠が今でも確認できるように，広範囲に五輪塔の分布が確認でき，墓域としての猪鼻は，城跡とされてきた範囲全体におよぶ可能性がある。

１）墓壙　人骨の遺存状態が比較的良く，埋葬状態が確認できた墓壙では，いずれも横向きの屈葬であった。頭位は北向きが多いが，西に向くものもある。墓壙の方向は，①北向き②北東向き③北西向き④西向きの４群に大別できるが，①が最も多い。分布の上では，これらは特に分かれている傾向は見いだせないので，時期的な変化かもしれない。なお，火葬土壙の焼成室の方向ではＣ区で②の北東方向がまとまりをみせるが，全体的には方位の統一性は小さい。また，土葬と火葬の重複が確認できた事例では，火葬（16号）のほうが土葬（15号）よりも新しいことが確認されている。全体に火葬土壙は，土葬墓の空白地点に分布しており，火葬土壙のほうが，土葬墓よりも新しい傾向がうかがえる。なお，人骨の鑑定から埋葬されていたのは，成人の女性がやや多いことが明らかになっている（第24図）。ただし，副葬品等を含めた埋葬法については性別による違いは認められないようである。

２）火葬土壙　形状を詳しく見ると，長方形の遺骸焼成部に直交するように通気坑が取り付くが，通気坑が円形になる19号や別の土壙状になる36号などもある。特に36号は，掘り込みが深く焼成部と通



第24図　墓壙群の分布と出土遺物

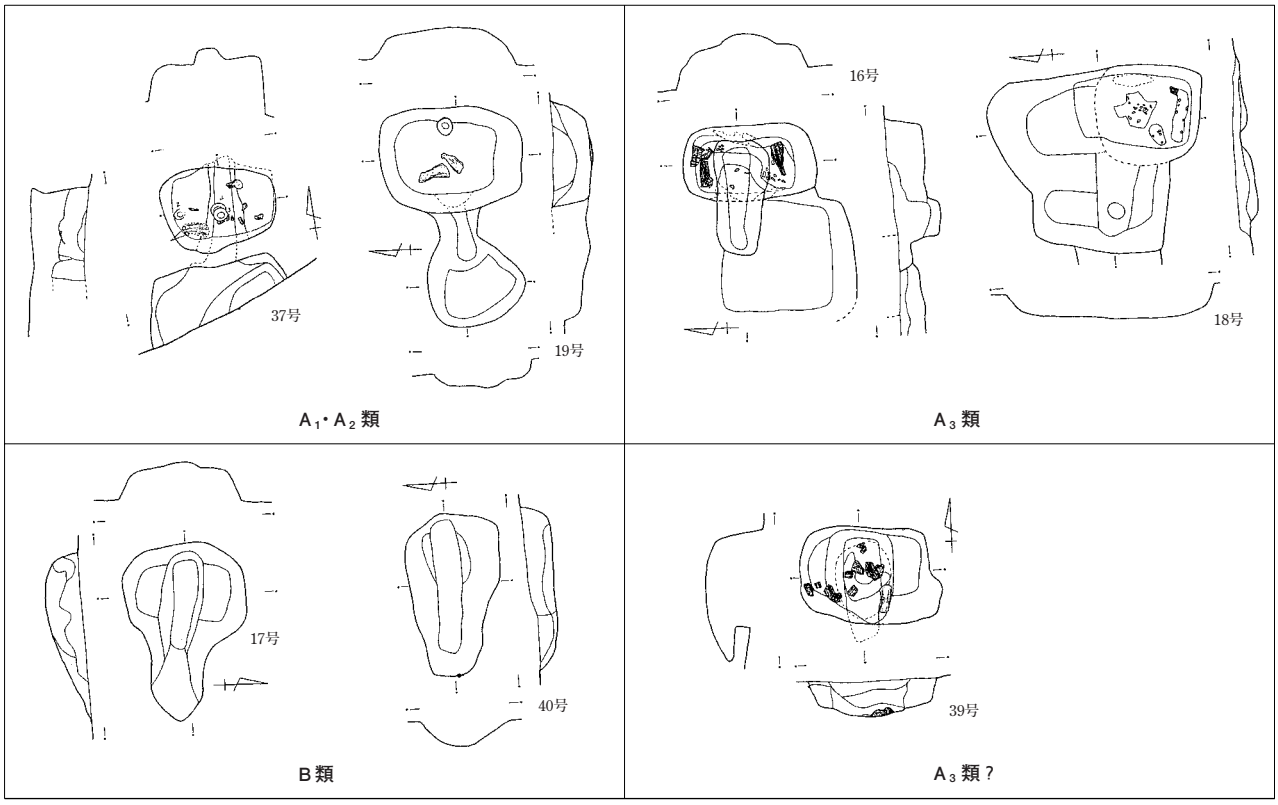
気坑がトンネルによって連結されており，入念な作りである。おそらくこうした形状のものが初期のもので，通気坑が直線状になるＴ字型タイプに簡略化していくものと推定される。ここでは，まだ詳しい検討を行っていないが，今後の検討のためにこの遺構の分類案を示しておいた（第25図③）。Ａ類は通気坑が焼成坑とは独立しているもので，両者はトンネル状の通気孔によって連結されている。通気坑の大きさにより細分し，Ａ１類は通気坑が焼成坑と同じくらいに大きなもの，Ａ２類は通気坑がやや小さくなり円形のもの，Ａ３類は，通気坑が通気孔の幅と同じくらいのものとした。このうちＡ３類は，遺存状態が悪いとＢ類とは区別が困難である。Ｂ類は焼成坑に通気溝が取り付くもの，Ｃ類は焼成坑に通気溝が取り付くタイプで，焼成坑の形が方形や長方形のものが多い。猪鼻城跡ではＡ１類からＢ類までが検出されている。

駒井野荒追遺跡では「燃焼坑転用墓」「火葬施設」と分類し，別種の遺構ととらえている（林田1993）。前者が本稿のＡ～Ｂ類，後者がＣ類に相当する。後者は，「遺体を荼毘に付する為にのみ」に構築された土坑とし，複数回の使用も推定している。これに対し「燃焼坑転用墓」は１回限りしか使われず，その後埋め戻され，墓としての性格を有するとしている。確かに本稿では火葬土坑として一括して扱っている遺構には，人骨の遺存状況には，大部分の骨が残されていると推定できるものから，ほとんどの骨を取り上げたためかわずかな骨片のみしか検出されないものまで，かなりの幅がある。しかしながら，「燃焼坑転用墓」に相当するものは，おおよそ15世紀代か16世紀でも初期までに限られる可能性が大きく，片や「火葬施設」は16世紀代から一部は17世紀まで下がる可能性が大きく，この両者は時間的な前後関係におくことが可能であろうと考えており，別種の遺構とする必要はないのではないかと思う。

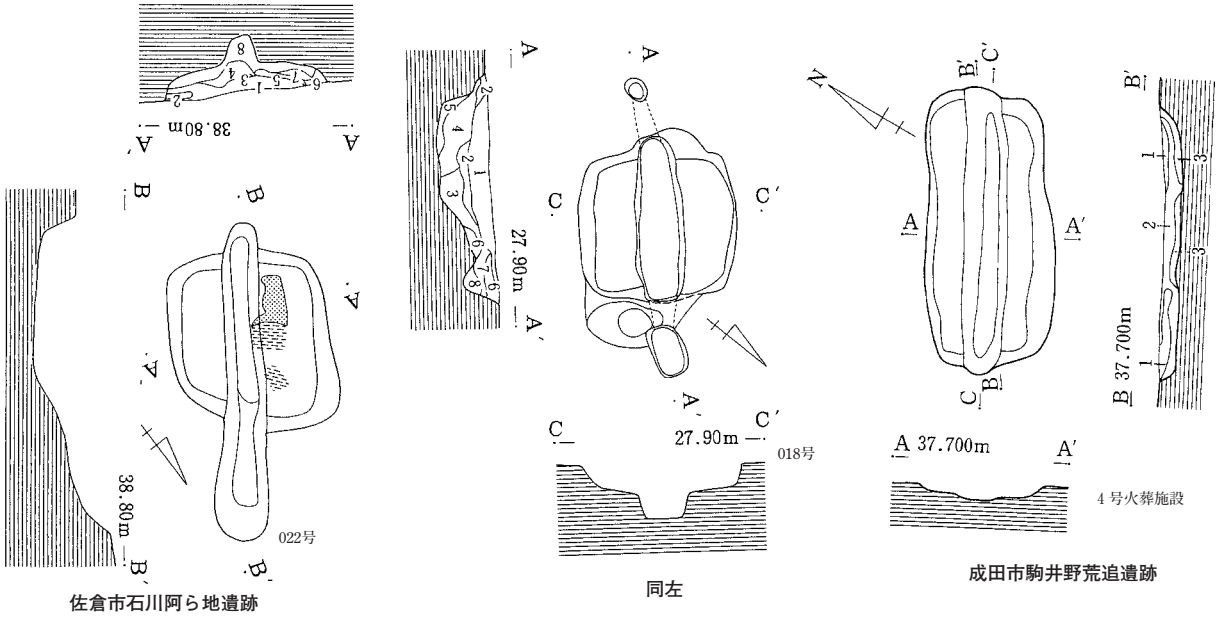
３）銅銭　７基の墓壙から銅銭が検出された。そのうち６枚の銅銭をもつものは４基で，５枚１基，４枚１基，３枚１基である。６枚セットのいわゆる六道銭のものが比較的多いので，この地点の銅銭の副葬については，６枚セットが基本的に成立していたものと考えられる。明銭はそれが含まれていたいずれの墓壙においても１枚しか組成されておらず，多数の銭種のなかの一部にすぎないことになる。したがって，この地点の墓壙は銅銭の組成からみれば，明銭の比率が増加する16世紀以降の様相とは異なっているといえる。

六道銭は土葬墓に供せられることが多いが，ここでは火葬墓に供せられる事例も確認されている（36号墓壙）。カワラケについても土葬と火葬の両方から検出されており，これにも違いがないことがわかる。したがって，このような土葬墓と火葬土壙の共通性から，火葬土壙にも骨が残されることにより，そこを墓としても認識していたものであろうと思われる。火葬を土葬墓が営まれる同じ場所で行っていることもそれを裏付けるものであろう。分骨のための火葬跡ともいえる火葬土壙は，墓としての性格も有していたことが推定されるのである。

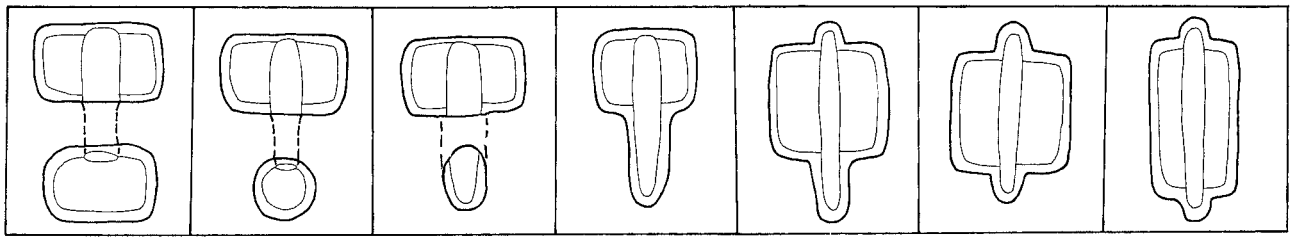
４）火葬骨について　墓壙に残された人骨については，付編(3)に鑑定結果を掲載したが，火葬の場合詳しいことが不明なものが大部分であった。火葬骨については，取り上げられた火葬骨の中に歯が全く含まれていなかったことは注目すべき所見である。これは，主郭土塁中の蔵骨器に内蔵されていた火葬骨も同様で，その他，近年千葉寺で回収された常滑壺の蔵骨器中の火葬骨においても歯は確認されなかった。３丁目公園の火葬土壙と蔵骨器の時期は，おおよそ200年ほどの時間差があり，その



① 猪鼻城跡火葬土壙分類集成図（1／60）



② 参考図



③ ＜分類案＞

第25図　火葬土壙分類図

まま火葬墓から蔵骨器への火葬骨の納入という一連の工程ではとらえることはできないが，火葬土壙の場合，意図的に取り上げた骨の方に歯が含まれているとすれば，納得がいくが，取り上げた骨が納められる蔵骨器の中に歯が含まれないのはどのような理由によるのだろうか。火葬土壙に歯が残されていない事例は，他にも確認できるようであり，そうした事例が普遍化されるなら骨とは別に歯を特に処置するような当時の火葬骨の処理方法が復元されることになろう。

３．猪鼻城跡の出土遺物

今回報告した調査地点の中世の出土遺物は第８表の通りである。日常生活に使われたと思われる遺物は非常に少なく，墓に関係した遺物が大部分である。猪鼻城跡中心部で多量に検出されているカワラケもここではほとんど墓壙に伴うもののみである。カワラケについては後に検討を別に行うが，灯明皿として使われた痕跡が，この地点の資料にはまったくみられなかったことは注目すべきである。これに対し，中心地区の資料にはある程度灯明皿として使われていたカワラケが含まれており，その使用法には違いがみられる。ここでの所見からすれば，墓に使われるカワラケは灯明皿としては使われなかったということが指摘できるかもしれない。

ここでは遺構の時期を特定できるような中世陶磁器も非常に少い。遺構の時期とは直接関係がないと思われる瀬戸大窯４期前半の皿を除くと，14世紀後半の瀬戸の盤，15世紀前半の常滑の鉢が時期が特定できる遺物である（年代観は藤澤1991・2001，中野1994参照）。その他，銅銭には初鋳1368年の洪武通宝と初鋳1408年の永楽通宝が含まれているので，33号墓壙は14世紀後半以降，２号・12号・36号墓壙は15世紀以降という時期は確定できる。

これに対して，参考のため過去の調査で出土した中心地区の遺物を比較検討したい。全体の瀬戸と渥美・常滑製品の量的変化は第26図に示した。このグラフから，瀬戸製品の出土量は，後期Ⅰ期～後Ⅳ期古段階に集中するという比較的単純なあり方が読みとれる。前期や中期の遺物は非常に少なく，特に前期のものは，蔵骨器の四耳壺のみである。古瀬戸後期の段階から猪鼻が継続的に使われるようになったものと考えられる。出土遺物からみると，鎌倉時代は土塁中の蔵骨器群に象徴されるように，葬送の地であった可能性が大きいといえる。鎌倉時代の渥美窯や常滑窯の製品も若干みられるが，当時の食器として使われていた青磁や白磁の碗皿類はほとんど検出されていないので，この時期はここは生活の場ではなかったと考えられる。1996年の調査で検出された古瀬戸中期の瓶子も蔵骨器の残欠と推定される遺物である。その後，15世紀の後半に相当する後Ⅳ期新段階のものはみられず，大窯段階のものがわずかに存在する。渥美・常滑製品では，全体に時期の確定できる遺物が少ないため，瀬戸製品ほど時期的変化は明確ではない。それでも瀬戸製品が激減する15世紀後半以降のものは確認できず，ほぼ瀬戸製品の動向と一致しているといえよう。これら陶磁器の消長から猪鼻城跡中心地区は，13世紀代は主に蔵骨器を埋葬する墓地であり，14世紀になるとなると少しずつ日常的に使われるようになり，本格的に使われるようになるのは14世紀後半からで，15世紀の半ばまでは建物が建てられるなど恒常的に使用されていたと推定される。この期間は，1455年に千葉宗家が滅ぼされる時期より以前であり，千葉氏が千葉を本拠としていた時期に対応することになる。千葉宗家滅亡後の大窯段階の遺物がみられることは，戦国城郭としての猪鼻城跡に伴うものと考えられるが，その量は非常に少なく恒常的に猪鼻城が使われていたものではないことを示すものと考えられる。

第８表　猪鼻城跡亥鼻３丁目公園地点中世出土遺物一覧

①　陶磁器

出土地点	種別	点数	備考
C・D区凹地	青磁鉢	1	
２号堀状遺構	渥美甕	1	主土壙
20号墓	常滑鉢	1	９型式
A区	常滑甕	5	
A区	常滑壺	1	
B区	常滑壺	1	
D区攪乱	常滑甕	1	
確認Bトレンチ	常滑甕	3	
２号土壙	常滑甕	1	
16号土壙	常滑甕	1	
２号堀状遺構	常滑甕	2	主土壙
37号墓	常滑壺	1	
A区	瀬戸盤類	1	後Ⅰ～Ⅱ
C区溝１・２	瀬戸器種不明	1	後期
D区	瀬戸擂鉢	1	後期
確認Bトレンチ	瀬戸折縁そぎ皿	1	大窯４前

②　カワラケ

	点数
10号墓壙	2
32号墓壙	3
36号墓壙	3
40号墓壙	2
47号墓壙	3
２号堀状遺構主土壙	1
P－１	2
19号土壙	1
計	17

③　石塔類他

出土地点	種別	点数
７号墓壙	五輪塔水輪	1
10号墓壙	五輪塔空風輪	1
23号墓壙	五輪塔火輪	3
	水輪	1
31号墓壙	五輪塔空風輪	3
	火輪	5
	水輪	2
32号墓壙	五輪塔水輪	1
１号土壙	五輪塔火輪	1
２号堀状遺構主土壙	宝篋印塔	1
２号堀状遺構副土壙	板碑	1
２号堀状遺構主土壙	板碑	1
D区凹地	板碑片	1
24号墓壙	自然石	1

④　銅銭等

出土地点	種別	点数
A区	釘	1
１号墓壙	銅銭	6
２号墓壙	銅銭	6
12号墓壙	銅銭	6
24号墓壙	銅銭	6
33号墓壙	銅銭	3
36号墓壙	銅銭	4
44号墓壙	銅銭	4
２号堀状遺構副土壙	銅銭	3
７・８号墓壙	スラグ	2
D区	スラグ	1
31号墓壙	スラグ	1

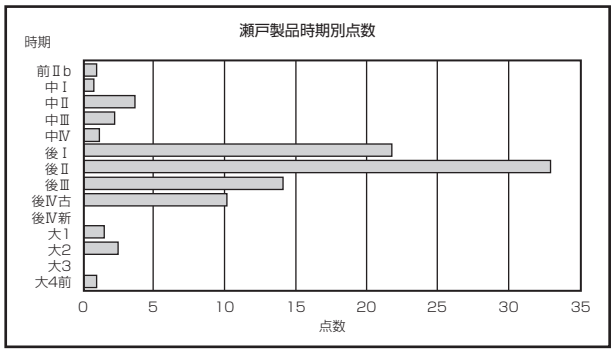
第９表　猪鼻城跡中心地区渥美・常滑・貿易陶磁集計表

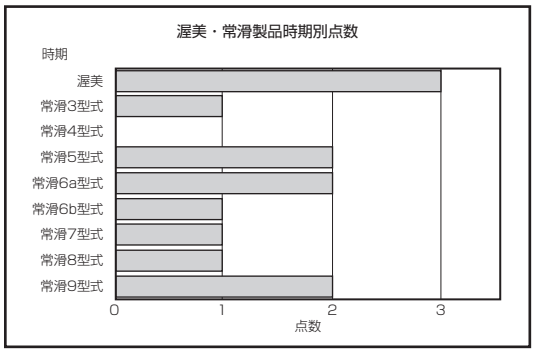
生産地	種別	区分	点数
渥美	甕		3
常滑	鉢	山茶碗窯系	2
常滑	鉢		2
常滑	鉢	３型式	1
常滑	鉢	８型式	1
常滑	甕		32
常滑	甕	５型式	2
常滑	甕	７型式	1
常滑	甕	９型式	1

生産地	種別	区分	点数
常滑	甕	９～10型式	1
常滑	壺		2
常滑	壺	6b型式	1
備前	擂鉢		1
中国	褐釉四耳壺	12世紀	1
中国	青磁	碗	4
中国	青白磁	梅瓶	1
計			56

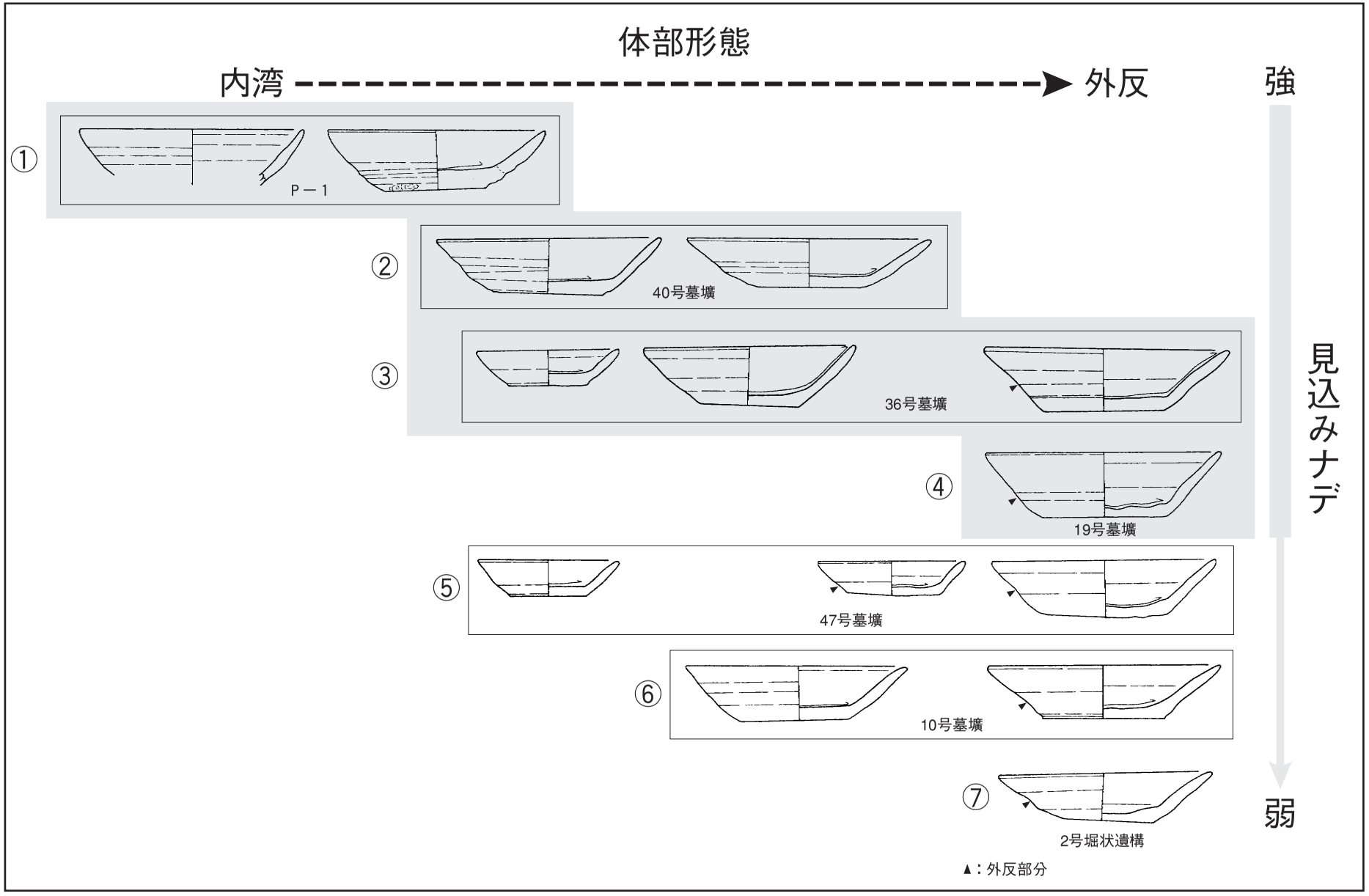
第10表　猪鼻城跡中心地区瀬戸製品時期別集計表

時期	天目茶碗	平碗	盤類	擂鉢	折縁小皿	折縁中皿	折縁深皿	直縁大皿	柄付片口	碗形鉢	縁釉小皿	折縁そぎ皿	稜皿	卸皿	中皿	卸目付大皿	花瓶	四耳壺	瓶子	狛犬	不明	計
前Ⅱb																		1				1
中期															1							1
中Ⅰ～Ⅱ																				1		1
中Ⅱ						1	1												1			3
中Ⅲ						1	1															2
中Ⅳ							1															1
後期	2	5												3							1	11
後Ⅰ	2	1					2		1													6
後Ⅰ～Ⅱ	2	8	7							1	6						1				1	26
後Ⅱ	4	7						1			4											16
後Ⅱ～Ⅳ		1	2								1											4
後Ⅲ	2	3	1					1			1			1								9
後Ⅲ～Ⅳ		1	1																			2
後Ⅳ		1		1																		2
後Ⅳ古					1						1					1						3
後Ⅳ～大1・2				1																		1
大１	1																					1
大２				1									1									2
大３																						0
大４前												1										1
計	13	27	11	3	1	2	5	2	1	1	13	1	1	4	1	1	1	1	1	1	2	93





第26図　猪鼻城跡中心地区瀬戸・常滑製品時期別点数



第27図　猪鼻城跡3丁目公園地点カワラケ分類図（1/3）

このように猪鼻城跡中心地区で建物等が建てられるなど盛んに使われていた時期に，３丁目公園地点では墓地が形成されていたということになる。主郭付近が鎌倉時代に墓域であったものが，そこに建物を建てて恒常的に空間利用するようになると，新たに別の地点に墓地を設けることになり，そのひとつが３丁目公園地点であったと考えることも可能である。

４．カワラケの編年

３丁目公園地点の調査においては，点数は多くはないがセット関係にあるものを含む比較的良好なカワラケ群を得ることができた。この調査地点では，遺構の時期を特定できるような陶磁器はほとんど検出されなかったので，遺構の時期決定においてカワラケの持つ意味は大きい。以下では，ここに報告した資料について検討を行いたい。

カワラケの分類にあたっての基準となるは，製作技法や胎土それに形態などである。製作技法には，ロクロの回転方向・底部の切り離し方法・器表面の整形法・体部の段ナデ・内面見込みのナデの有無やその加え方などである。底部の切り離し方法は，千葉市内においては中世段階では，回転糸切りの場合，ほとんど右回転糸切りによるものである。左回転糸切りのものは僅少であり，現在確認できているのは生実城跡の１例にすぎない。静止糸切りは16世紀代の一部の資料に確認できるが，これは上総方面に主体的に分する一群との関係が推定される。亥鼻３丁目公園地点のカワラケは，すべてロクロ整形によるもので，底部の糸切り痕はすべて右回転である。ここのカワラケでは分類において重要なのは，器形と見込みのナデ調整である。既に猪鼻城跡のカワラケについては簡単に編年観を示したことがある（簗瀬2000）。そこでは，カワラケを古い順に３群に大別した。Ⅰ群は内湾する器形で，内面見込にナデ調整を加えないもの，Ⅱ群は内湾型で内面見込みにナデ調整を加えるもの，Ⅲ群は体部が外反するもので，見込みにナデを加えるものである。現在でも基本的にこの分類と編年観は変更する必要がなく，今回の資料は大部分がⅡ類とⅢ類に含まれると考えられる。Ⅱ類からⅢ類への変化は，内湾から外反へという方向性がある。この二つの観点からこの地点のカワラケを配列したのが第27図である。この図で①②が内湾型のもので，④～⑦が外反型のタイプとなる。この地点の資料で最も重要なのは，36号墓壙の３点のカワラケである。大中小のセットからなるが，興味深いことに大型は外反する器形を取っているのに対し，中型・小型は弱い内湾タイプである。この３点は出土状態から，確実に共伴することが確認されており，大型と中型は胎土や器表面の調整に共通性が強く，同一の製作者によるものと推定できるものである。したがって，この墓壙では内湾型と外反型が共伴していることになり，Ⅱ群とⅢ群の中間に位置する資料といえる。これまで内湾型から外反型へのカワラケの変化については，二つのタイプの間に断絶を予想していた，この36号墓壙の資料が得られたことにより，両者は段階的に連続して変化してゆくことが確認できた。この地点の資料を分類すれば，①②は内湾型のⅡ群，④～⑦は外反型のⅢ群に分類でき，③の36号墓壙がその中間タイプといえよう。このうち①Ｐ－１の左側の資料は，口縁部を内側に屈曲させるナデ調整の特徴から，内面見込みにナデがないⅠ群に含まれる可能性があるが，残念ながら底部がないので確認できない。外反タイプは，出現期に体部に屈曲を有するものがみられるが，その後その屈曲はなくなり，直線的に外反する形態に移行するものと思われる。

カワラケの時期については，①は猪鼻城跡中心部の1984年の調査区（公衆トイレ）でまとまって得

られている資料に共通し，そこでは古瀬戸後期Ⅰ～Ⅱ期の製品を主体的に伴っており，14世紀後半に時期比定することが可能である。また，③の36号墓壙には銅銭４枚が伴い，そのなかに永楽通宝を１枚含んでおり，15世紀以降であることは確実である。ここでは銅銭が４枚のみしか検出されなかったが，本来６枚存在した可能性が大きく，六道銭を伴っていたと推定できる。こうした点から判断すれば，36号墓壙は15世紀でも初頭におくことはできず，15世紀半ば以降ということになろう。猪鼻城跡中心部でも同タイプの資料が数多く検出されているが，前述の通りこの地区が使われていたのは，古瀬戸後期Ⅳ期古段階までであり，およそ1460年以前ということになる。また，36号墓壙の資料よりも少し新しくなると考えている生実城跡のⅡ類は古瀬戸後Ⅳ期新段階に伴うもので，年代は1460年以降におくことができる（長原・簗瀬他2002)。こうした他の資料のあり方からみて，36号墓壙の資料は15世紀中葉におけるのではないかと考えられる。それに後続すると考えられるものも，15世紀の後半でもおおよそ第３四半期におくことが可能であろうと推定している。

この調査地点のカワラケを検討することにより，15世紀中頃に内湾型から外反型に変化することが明らかになった。この事実は，千葉ではそれまで古代末以来の長い伝統を有する体部に丸みを持つ内湾タイプのカワラケに別れを告げ，外反型のタイプに変化したということであり，この15世紀半ばは，千葉のカワラケにとっても大きな転換期であったといえることになる。

参考文献

小笠原長和　1977「千葉市の歴史（二）千葉氏と千葉周辺」『千葉市風土記』千葉日報社

小高　春雄　1995「亥鼻城跡」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ－旧下総国地域－』千葉県教育委員会

喜多　圭介　1993『石川阿ら地遺跡』（財）印旛郡市文化財センター

倉田　義広　1999『千葉市猪鼻城跡』（財）千葉市文化財調査協会

斎木　　勝　1985「瓜生池遺跡No.4」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』（財）千葉県文化財センター

太宰府市教育委員会　2000『太宰府条坊跡Ⅻ－陶磁器分類編－』

千葉市教育委員会　1976「千葉市内の五輪塔調査報告」『千葉市文化財調査報告書』第１集

千葉市教育委員会　1992『千葉市の仏像』

外山　信司　1996「下総高品城と陸上交通」『千葉城郭研究』第４号

中野　晴久　1994「赤羽・中野「生産地の編年について」」『中世常滑窯焼をおって資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

長原　亘・簗瀬裕一他　2002『生実城跡－昭和63年度・平成３～６年度調査』（財）千葉市文化財調査協会

林田　利之　1993『駒井野荒追遺跡』（財）印旛郡市文化財センター

福山　敏男　1983「中尊寺金色堂の性格」『寺院建築の研究』下

藤澤　良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ

藤澤　良祐　2001「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジア的視点から－』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

丸井　敬司　1995「涌谷伊達氏の『報告書』と千葉氏の家紋について」『千葉市立郷土博物館研究紀要』第１号

簗瀬裕一・外山信司　1997『千葉市高品城跡Ⅰ』（財）千葉市文化財調査協会

簗瀬　裕一　1998「猪鼻城跡」『千葉県の歴史』資料編中世１考古資料

簗瀬　裕一　2000「中世の千葉－千葉堀内の景観について－」『千葉いまむかし』第13号　千葉市立郷土博物館

山本　　勇　1980「千葉城跡」『日本城郭大系』第６巻　千葉・神奈川　新人物往来社

山本信夫・山村信榮　1997「中世食器の地域性　九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

和田茂右衛門　1984『社寺よりみた千葉の歴史』千葉市教育委員会

和田茂右衛門　1972『千葉町反別帳』（タイプ印刷）

第Ⅱ章　皿池東遺跡

１．遺跡の概要

皿池東遺跡は，鹿島川水系の支谷の源流部に位置する。遺跡の西側には，かつては遺跡の名称にもなっている皿池があり，水田耕作の水源として活用されていた。調査地点は，西に緩く傾斜する斜面に位置し，標高は約40mである。調査区の南東部には，調査対象外であるが小規模な性格不明の塚が１基ある（写真図版９⑧）。調査地点の基本層序は第32図の通りである。

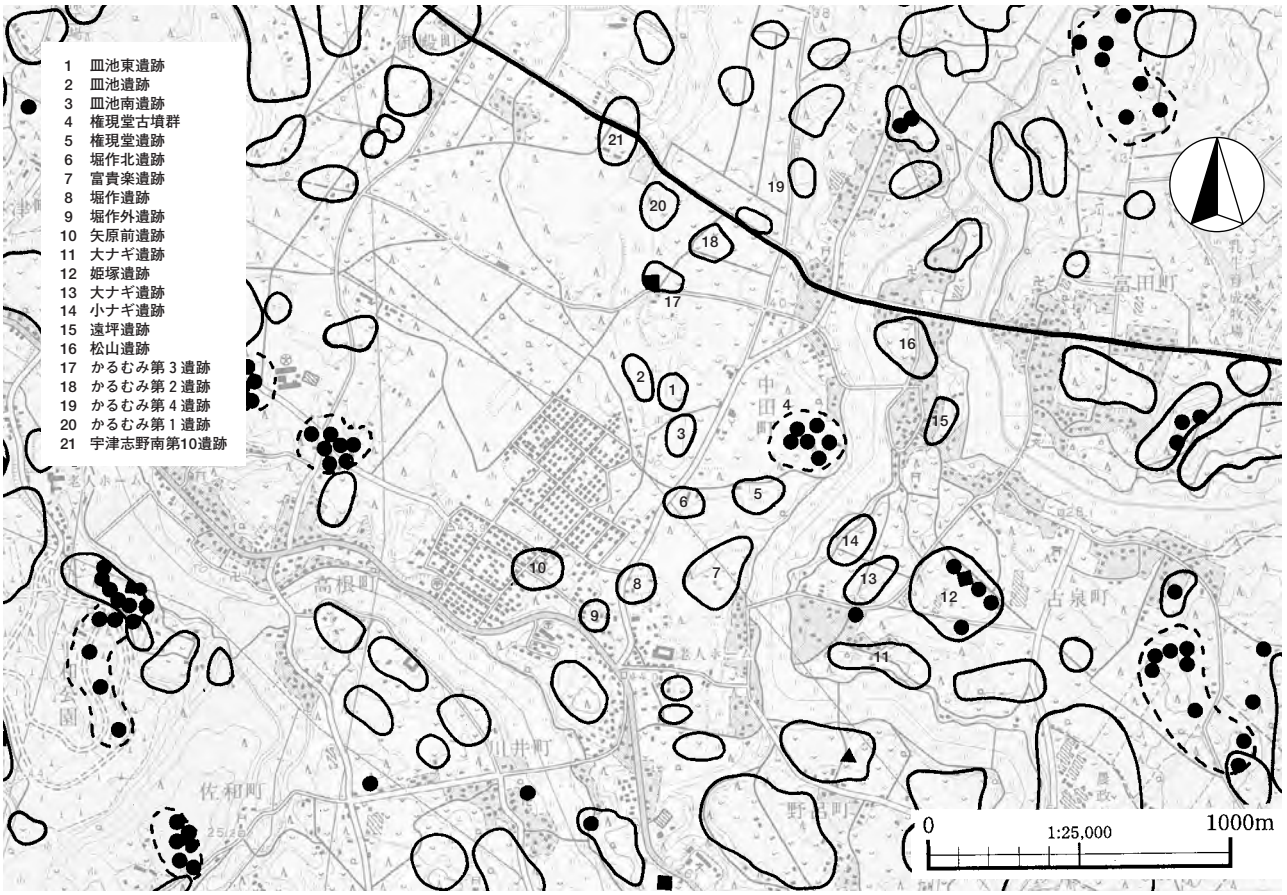
２．調査成果

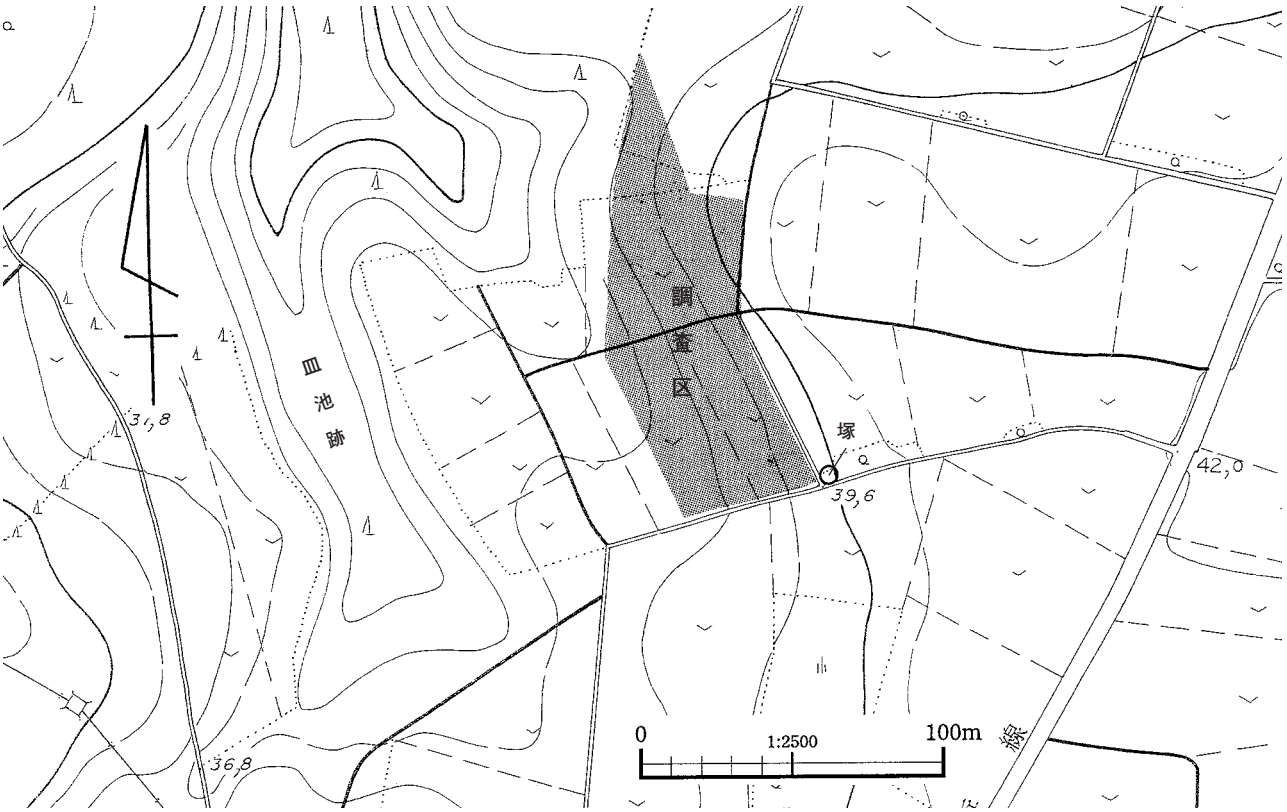
検出遺構は，溝３条と土壙２基，旧石器ブロック２ヶ所である。最も長い２号溝は，底面に波板状凹凸を有しており，道路跡と考えられる。この溝は現況で残る道路と方向が一致し，南方には，段差を伴う土手がその延長にあり，道路の痕跡と推定される。土壙２基は，縄文時代のものである可能性が高いが，その性格は不明である。

出土遺物は旧石器23点（ナイフ形石器１・両極剥片１・石核１・剥片14・砕片６），縄文土器などである。旧石器ブロックは２カ所検出された。第１ブロックは，総点数21点の分布域直径２ｍほどの小規模なブロックである。出土層位はⅡ層からⅢ層上部である。第２ブロックは，ナイフ形石器の先端部（第33図１）と縦長剥片(2)の計２点のみである。出土層位はⅢ層中である。二つのブロックとも点数が少なく詳細は不明だが，武蔵野台地の層序ではⅣ層上に相当するナイフ形石器を伴う石器群であろう。縄文土器は，第33図13～15が早期の条痕文系土器，16～18が前期，19～21が中期の土器である。その他，図示した４点の砥石（22～25）は，近世以降のものと思われる。

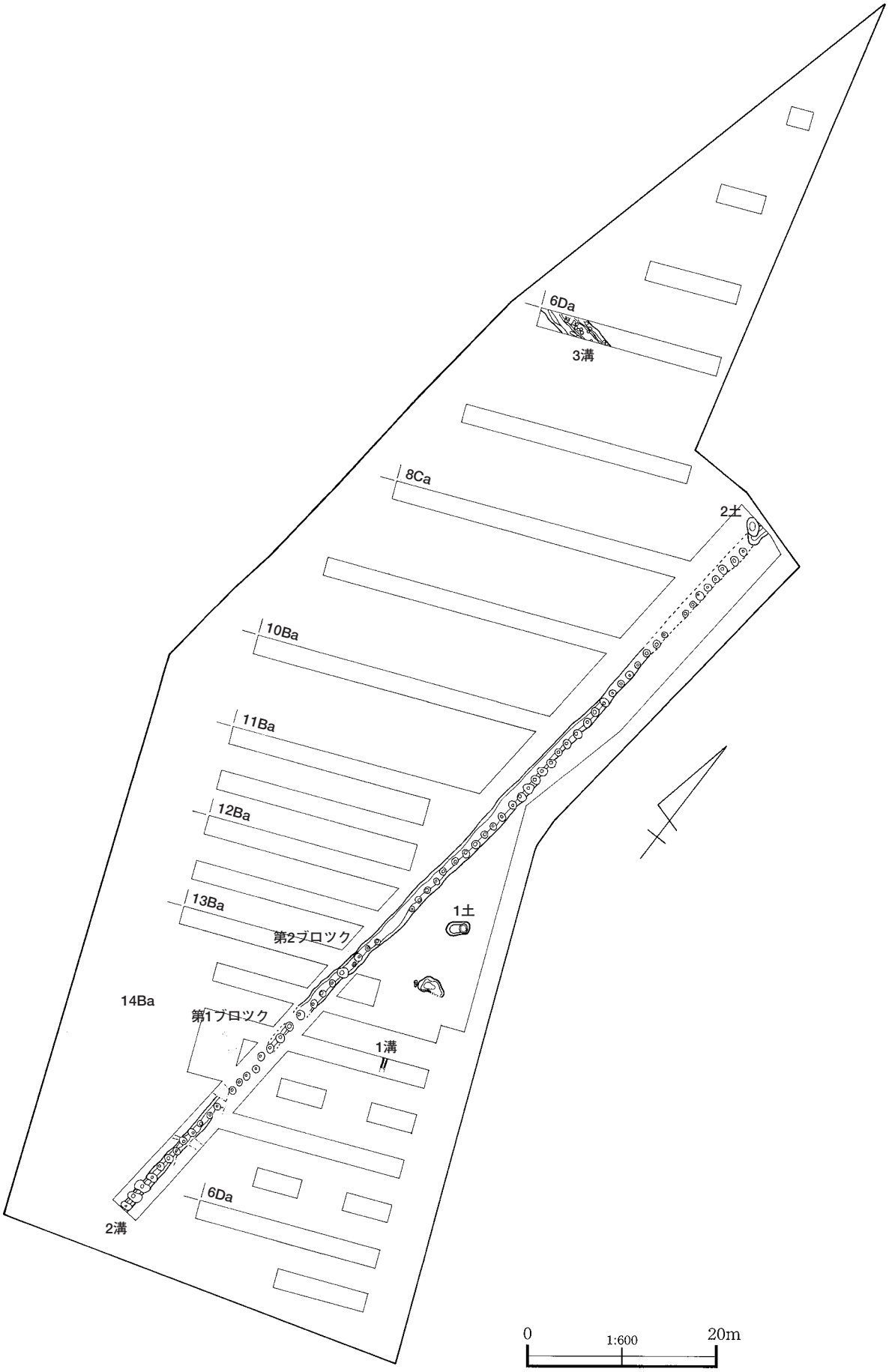
第11表　石器計測表

図番号	遺物番号	種　別	石　材	重さg	大きさ①長②幅③厚cm	備　考
1	13Cb1	ナイフ形石器	頁岩	0.3	① 1.7　② 0.5　③ 0.3	第２ブロック・先端部
2	13Cb2	両極剥片	安山岩	5.7	① 3.9　② 1.8　③ 1.1	第２ブロック・礫素材
3	14Bb5	剥片	頁岩	1.0	① 1.5　② 2.2　③ 0.2	第１ブロック
4	14Bb1	剥片	頁岩	3.2	① 2.0　② 1.9　③ 0.8	第１ブロック・小剥離痕あり
5	14Bb3	剥片	頁岩	6	① 3.8　② 2.7　③ 1.2	第１ブロック
6	14Bb6	剥片	頁岩	0.6	① 2.0　② 1.3　③ 0.2	第１ブロック・打面ハジケ
7	14Bb7	剥片	頁岩	2.9	① 2.6　② 2.5　③ 0.5	第１ブロック・打面再生剥片
8	14Bb8	剥片	頁岩	0.4	① 2.0　② 1.5　③ 0.2	第１ブロック・打面折れ
9	14Bb2	剥片	頁岩	1.3	① 2.8　② 1.6　③ 0.4	第１ブロック
10	14Bb4	剥片	頁岩	1.1	① 3.6　② 1.4　③ 0.4	第１ブロック・点状打面
11	14Bb	剥片	頁岩	10.1	① 5.2　② 3.4　③ 0.7	14Bbグリッド一括
12	14Bb12	石核	黒曜石	13.7	① 3.9　② 2.7　③ 1.2	第１ブロック・礫素材
	14Bb9	砕片	頁岩	0.1		第１ブロック
	14Bb10	剥片	頁岩	0.2		第１ブロック・打面折れ
	14Bb11	剥片	頁岩	0.2		第１ブロック
	14Bb13	砕片	頁岩	0.1未満		第１ブロック
	14Bb14	砕片	頁岩	0.1未満		第１ブロック
	14Bb15	砕片	頁岩	0.1未満		第１ブロック
	14Bb16	砕片	頁岩	0.1未満		第１ブロック・ポイントフレイクか
	14Bb17	砕片	頁岩	0.1未満		第１ブロック
	14Bb18	剥片	頁岩	0.1未満		第１ブロック・ポイントフレイクか
	14Bb19	剥片	頁岩	0.3		第１ブロック
	14Bb20	剥片	頁岩	0.1未満		第１ブロック・打面折れ

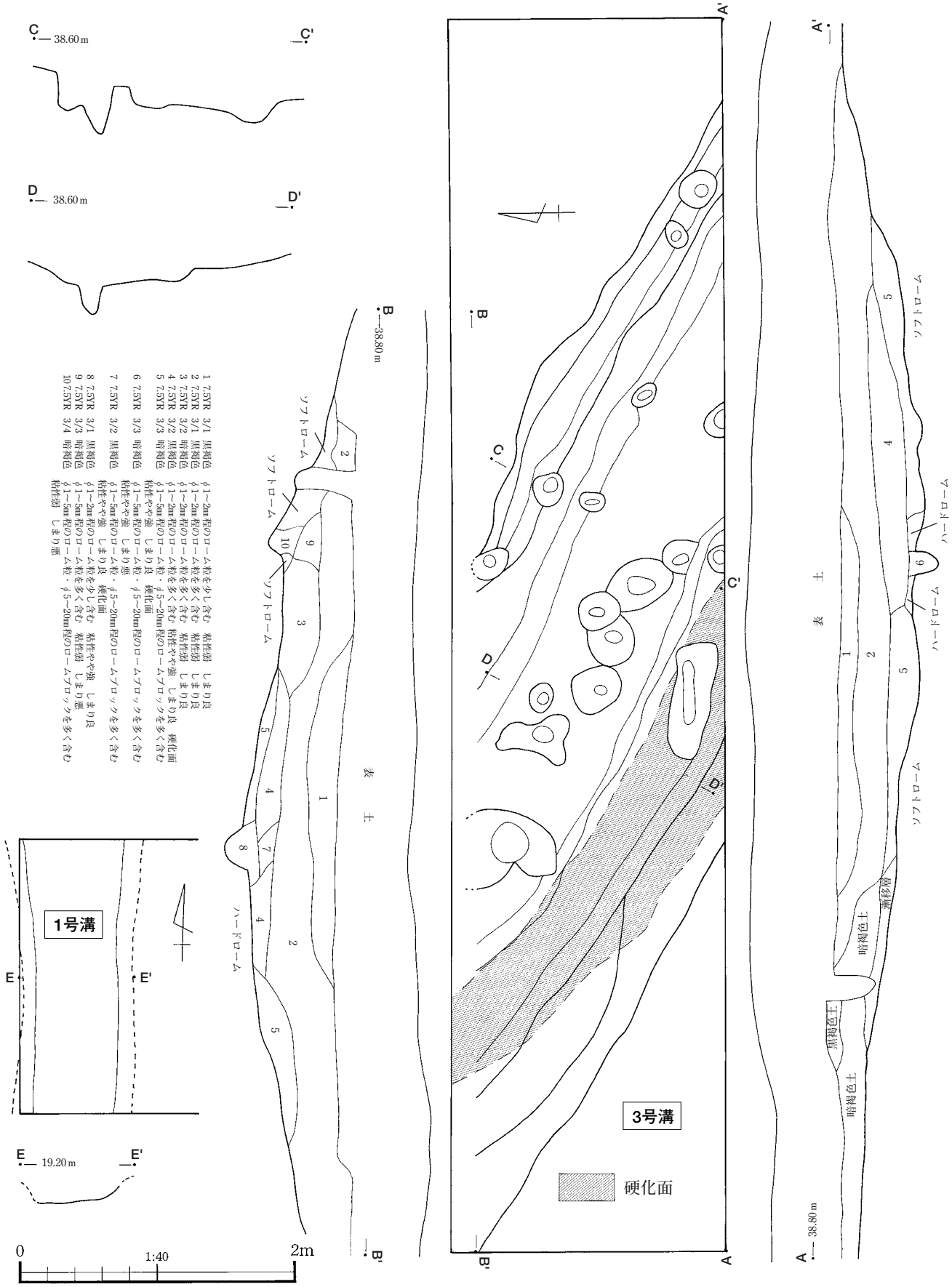




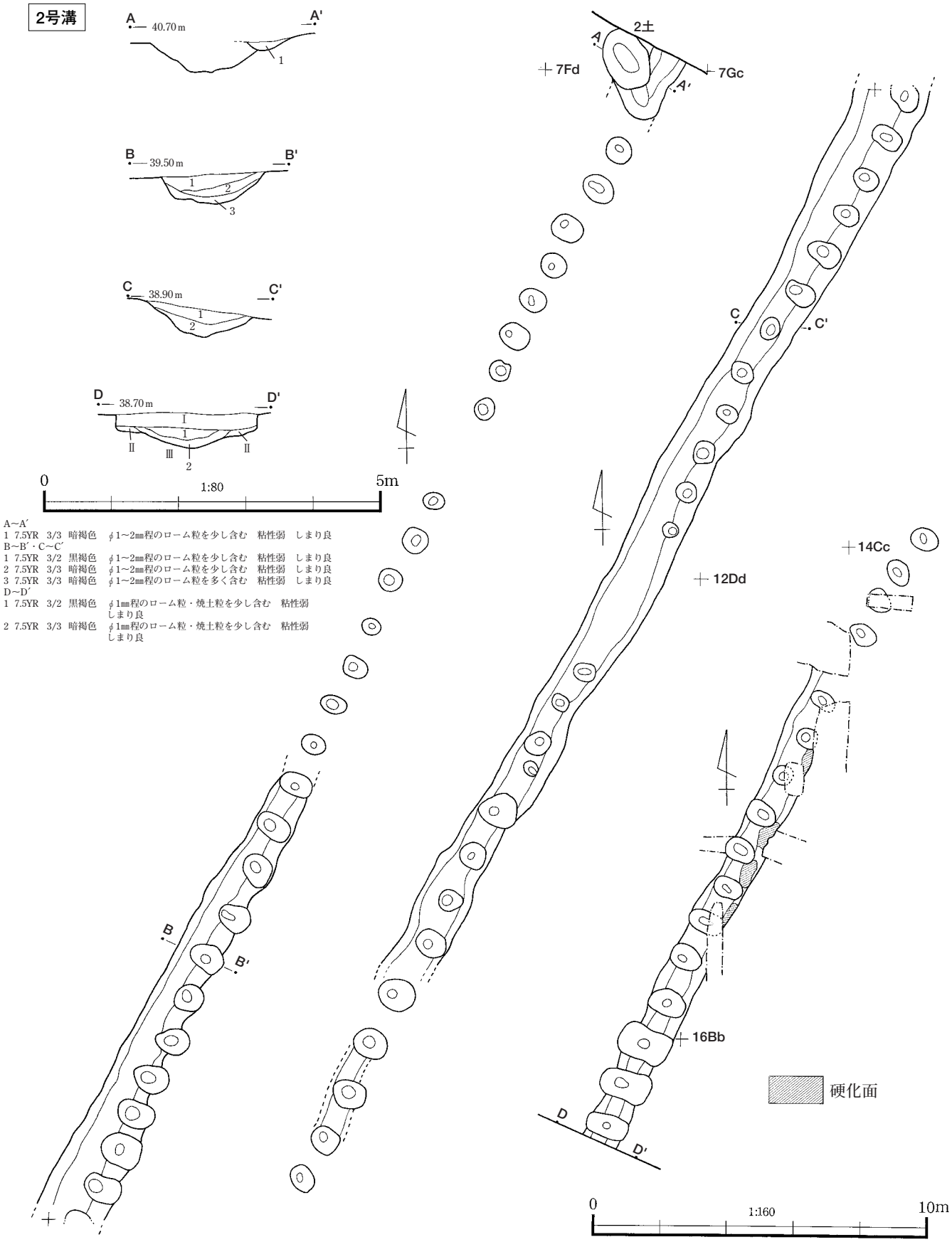
第28図　皿池東遺跡位置図(上)・地形図(下)



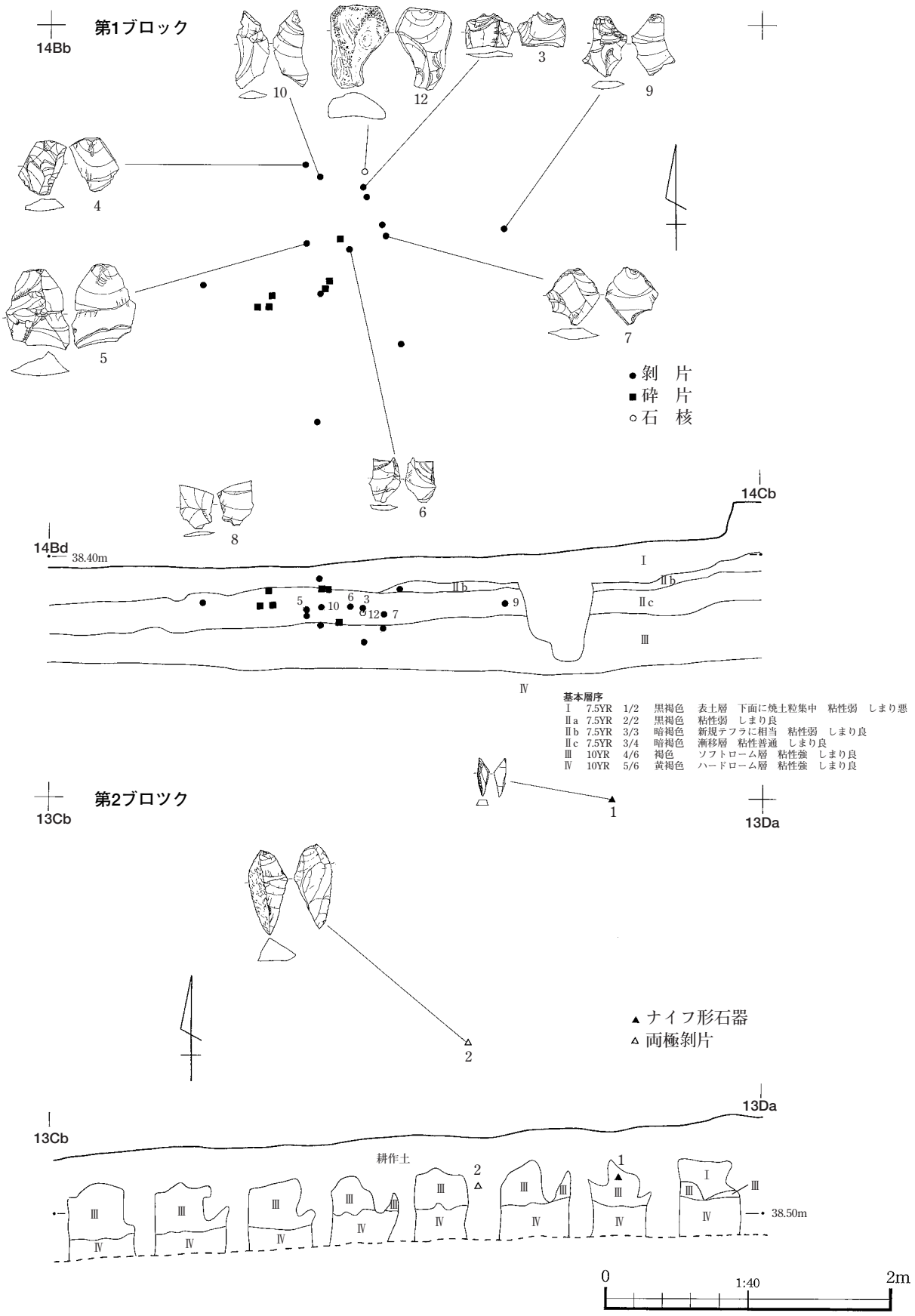
第29図　遺構配置図（1/600）



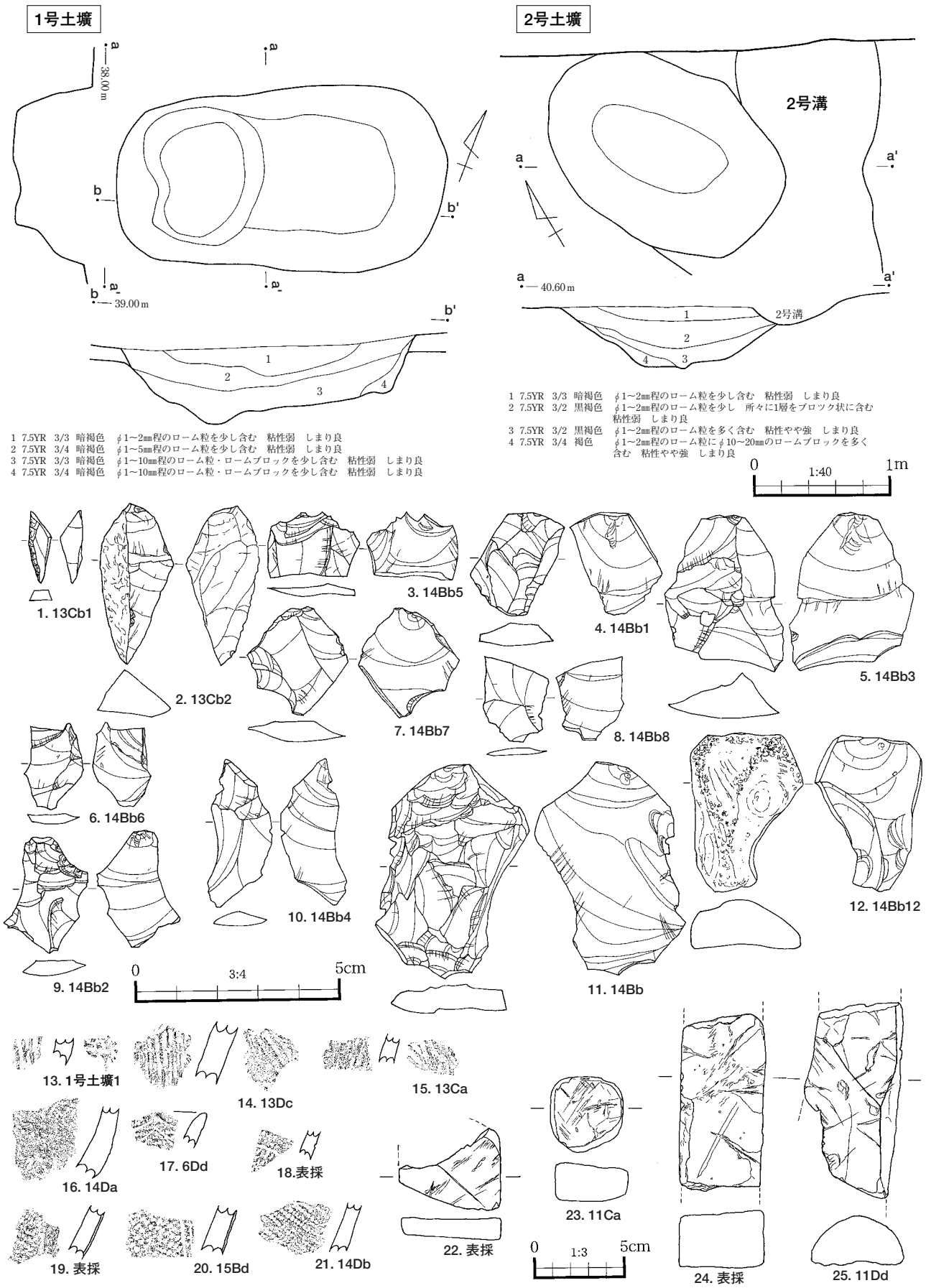
第30図　検出遺構　1号溝・3号溝



第31図　検出遺構　2号溝



第32図　旧石器第１・第２ブロック遺物分布図



第33図　検出遺構（土壙）・出土遺物

写 真 図 版

① Ａ区北側（南から）

② １号堀状遺構（東から）

③ １号堀状遺構セクション

④ １号堀状遺構

⑤ １号堀状遺構（南から）

⑥ Ａ・Ｂ区完掘状況

⑦ Ｂ区全景（南から）

⑧ Ｃ区東側

検出遺構　堀状遺構他①

① C区全景（東から）

② 2号堀状遺構

③ 2号堀状遺構

④ 2号堀状遺構

⑤ 2号堀状遺構調査風景

⑥ 2号堀状遺構副土壙

⑦ 2号堀状遺構セクション（主土壙）

⑧ C区～D区

検出遺構　堀状遺構他②

① D区東側（南西から）

② 2号堀状遺構カワラケ出土状況

③ 2号堀状遺構遺物出土状況

④ D区東側 凹地状遺構・41～44号墓壙

⑤ D区西側

⑥ 2号土壙

⑦ 4・5・6号土壙

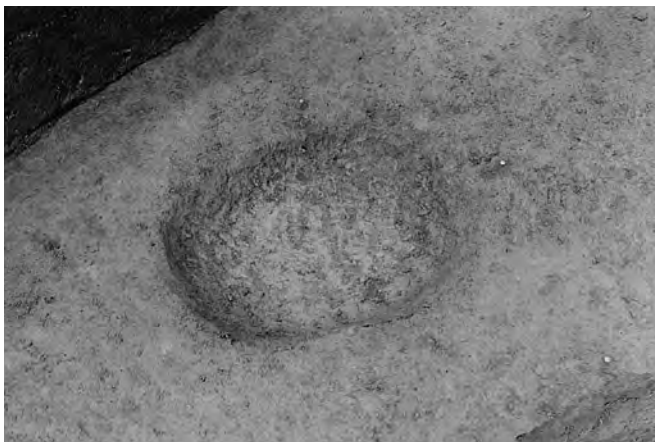
⑧ 7号土壙

検出遺構 土壙他

① 1号墓壙　人骨頭部

② 3号墓壙

③ 4号墓壙

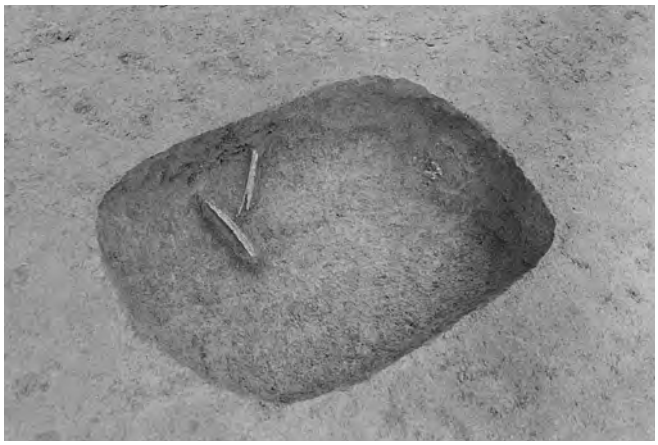


④ 5号墓壙

⑤ 6号墓壙

⑥ 7号墓壙（五輪塔）・8号墓壙

⑦ 7号・8号墓壙



⑧ 9号墓壙

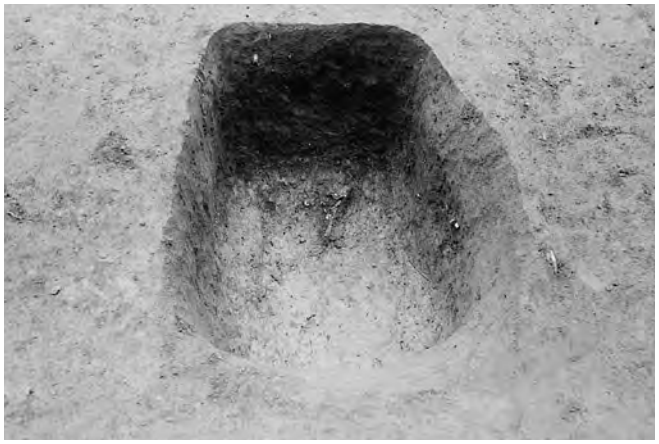
検出遺構　墓壙①

① 10号墓壙

② 11号墓壙

③ 13号墓壙

④ 14号墓壙



⑤ 14号墓壙

⑥ 15号・16号墓壙

⑦ 17号墓壙

⑧ 20号墓壙

検出遺構　墓壙②

① 21号墓壙

② 23号墓壙

③ 23号墓壙

④ 24号墓壙

⑤ 24号墓壙

⑥ 24号・25号墓壙

⑦ 26号・29号・30号墓壙

⑧ 28号墓壙

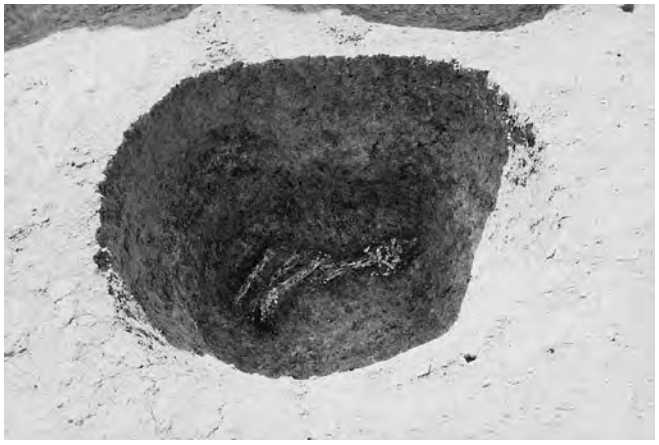
検出遺構　墓壙③

① 22号・23号・27号・28号墓壙

② 30号墓壙

③ 31号墓壙五輪塔出土状況

④ 32号墓壙五輪塔出土状況



⑤ 32号墓壙

⑥ 36号墓壙炭化材検出状況

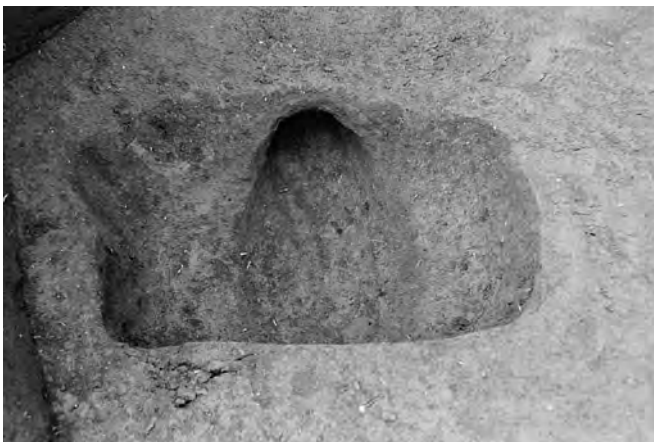
⑦ 36号墓壙カワラケ出土状況

⑧ 36号墓壙

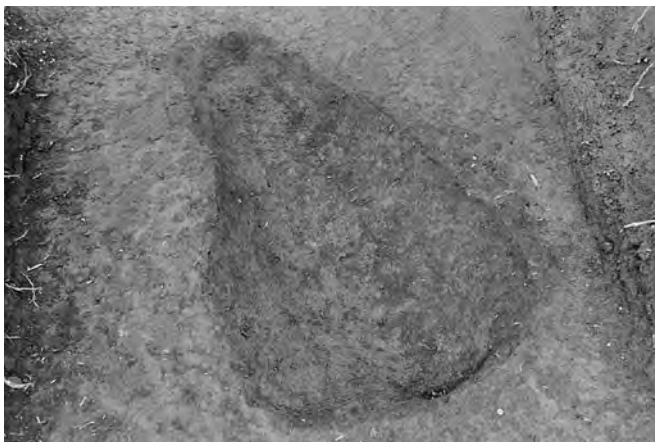
検出遺構　墓壙④

① 36号墓壙通気孔天井部除去後

② 39号墓壙炭化材・人骨検出状況

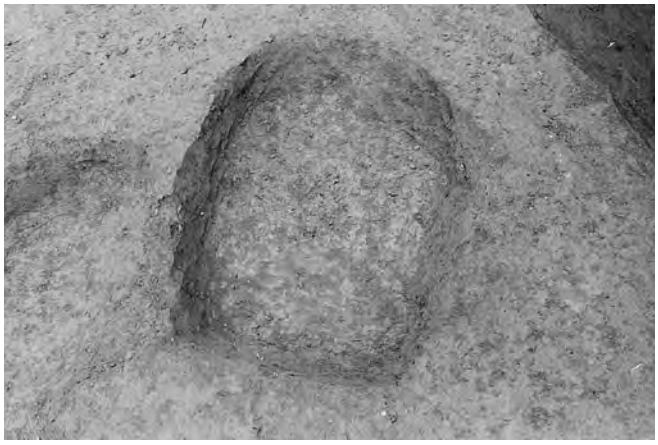


③ 39号墓壙



④ 40号墓壙

⑤ 41号墓壙



⑥ 42号墓壙

⑦ 43号墓壙

⑧ 44号墓壙

検出遺構　墓壙⑤

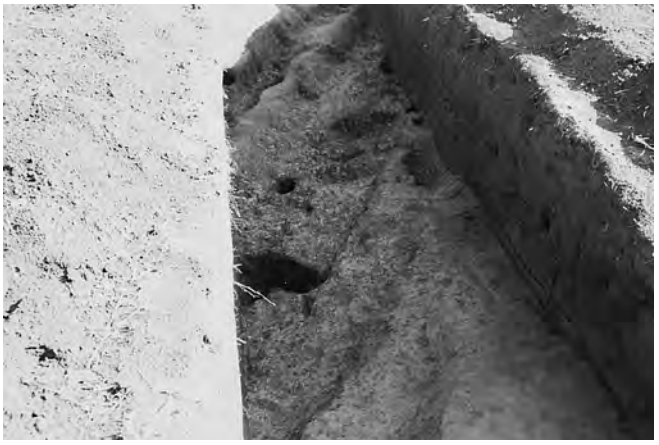
① 調査前風景 2001年9月17日

② 16Dd調査区セクション

③ 14Bb旧石器ブロック

④ 14Da区１号溝

⑤ ２号溝



⑥ ３号溝

⑦ １号土壙

⑧ 調査区東側にある塚

検出遺構他

1　13cb1

2　13cb2

3　14Bb5

4　14B1

5　14Bb3

6　14Bb6

7　14Bb7

8　14Bb8

9　14Bb2

10 14Bb4

11　14Bb

12　14Bb12

13　1号土壙1

15　13ca

17　6pd

18　表採

14　13DC

16　14Da

19　表採

20　15Bd

21 14Db

22　表採

23　11ca

24　表採

25　11Dd

※番号は第26図と対応

出土遺物

報　告　書　抄　録

ふ り が な	いのはなじょうせき・さらいけひがしいせき
書　　名	猪鼻城跡・皿池東遺跡
副　書　名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	簗瀬裕一
編 集 機 関	財団法人千葉市教育振興財団　埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒260-0814　千葉市中央区南生実町1210　　TEL　043-266-5433
発行年月日	2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いのはなじょうせき 猪鼻城跡	ちゅうおうくいのはな 中央区亥鼻3丁目203他	12104	中央区23	35° 35′ 50″	35° 35′ 55″	20010903 ～ 20011115	2,196.32	仮称亥鼻3丁目公園建設
さらいけひがしいせき 皿池東遺跡	わかばくなかたちょう 若葉区中田町1205-16他	12104	若葉区360	140° 8′ 00″	140° 13′ 40″	20010917 ～ 20020130	6,200	仮称若葉区球技場整備

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
猪鼻城跡	城跡・墓跡	中世	中世　堀状遺構2基・墓壙44基・土壙13基・溝跡5条・ピット1基	縄文土器・土師器・須恵器・灰釉陶器中世陶磁器・カワラケ・五輪塔・宝篋印塔・板碑・銅銭	
皿池東遺跡	包蔵地	縄文・中近世	旧石器時代ブロック2カ所 縄文時代土壙2基 中近世溝跡3条	旧石器（ナイフ形石器・両極石器・石核・剥片），縄文土器，砥石	

千葉市猪鼻城跡･皿池東遺跡

－平成13年度調査－

平成15年３月31日発行

編集・発行　千葉市教育委員会
〒260-0025　千葉市中央区問屋町1－35
TEL　043－245－5962
財団法人千葉市教育振興財団
埋蔵文化財調査センター
〒280-0814　千葉市中央区南生実町1210
TEL　043－266－5433

印　　刷　株式会社　正　　文　　社
〒260-0001　千葉市中央区都町1－10－6
TEL　043－233－2235